本　郷　遺　跡

1991・1992年度

1993年3月

柏原市教育委員会

はしがき

本郷遺跡は、大和川以西の沖積地に位置し、縄文時代から歴史時代まで継続する集落関連の複合遺跡で、近接する集落遺跡の中でも規模が大きく、出土する遺物も多様な内容のものがある。遺跡の現状は、大半が住宅化しており、大和川の氾濫によって流出した土砂が厚く堆積して深く埋もれている。近年、住宅建設の高層化や公共事業による上下水道の整備等によって、その事前の発掘調査が増加している。

今回の調査は、住宅建設に伴うもので既往の調査の中では規模が大きく、試掘調査によって弥生時代から古墳時代までの遺物が多数出土した事から、遺跡の性格や時期変遷を検証する成果が期待された。

調査成果は、本書に報告する通り住居や方形周溝墓と環濠になると考えられる大溝等の遺構と大阪府下２例目である小銅鐸が出土した。当初予測していた内容を上回る遺構と遺物が得られ、これを報告するものである。

これらの資料は、柏原市の歴史的環境復元にとどまらずより多くの各方面での人々の活用を期待したい。最後に、調査及び報告書作成にあたり、関係各位にご理解とご協力を頂いた事に記して感謝いたす次第である。

平成５年３月

柏原市教育委員会

教育長　庖　刀　和　秀

例　　言

1．本書は、柏原市教育委員会が原因者負担事業として実施した平成３・４年度埋蔵文化財の発掘調査の中で本郷遺跡（９１－１次調査）における発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は、柏原市教育委員会　社会教育課　文化係　北野　重を担当者として、
試掘調査　　平成２年11月26日
本調査　　平成３年４月22日～平成３年７月22日まで実施した。

3．発掘調査及び本書製作にあたって下記の方々に御指導、御助言を賜りました。
奈良国立文化財研究所　佐原　眞、帝塚山短期大学　山本　昭、**徳島文理大学**石野博信
大阪府教育委員会　中井貞夫、奥　和之、山田隆一、三木弘、兵庫県教育委員会　種定淳介、(財)大阪市文化財協会　田中清美、神戸市教育委員会　富山直人、
（財）八尾市文化財調査研究会　高萩千秋、寝屋川市教育委員会　**浜田延充**

4．調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加があった。

藤田昌宏	竹下　賢	栄山　茂	山田寛顕	安村俊史
桑野一幸	石田成年	寺川　歓	生駒美洋子	阪口文子
津田美智子	頃安敏夫	多田一美	飯田浩樹	楠本徹夫
平林　格	山口　剛	西島伸彦	尾野知永子	奥野　清
谷口鉄治	南本正一	鹿野和雄	猪木康之	乃一敏江
有江マスミ	村本株式会社	杉野謙二郎	島田組	三宅美都子
アジア航測	松本宏一			

5．本書の執筆は、北野が行った。

6．本書で使用した標高と方位は、特に注記しないかぎりＴ．Ｐ．、磁北である。

7．本調査に際して、写真、実測図を記録として残すと共に、カラースライドを作成した。また、出土遺物は、写真、実測図と共に当教育委員会にて保管を行っている。広く利用される事を願うものである。

目　　次

第１章　調査に至る経過…… 1
第２章　調査概要…… 3
　第１節　調査の概要…… 3
　第２節　遺　　構…… 4
第３章　遺物…… 11
　第１節　上層遺構出土遺物…… 11
　第２節　下層遺構出土遺物…… 18
　第３節　その他の遺物…… 20
第４章　まとめ…… 23
　第１節　遺構について…… 23
　第２節　遺物について…… 24

図　　目　　次

図－１　地区割図…… 1
図－２　周辺の遺跡…… 2
図－３　大溝３…… 5
図－４　大溝２出土土師器その５…… 16
図－５　住居１・土坑４出土土師器…… 17
図－６　小銅鐸実測図…… 22
図－７　小銅鐸の規模比較図…… 24
図－８　小銅鐸の出土地名表…… 25

図　版　目　次

図版－１　遺構全体図
図版－２　大溝１・２
図版－３　大溝４その１
図版－４　大溝４その２
図版－５　住居１～４・溝１
図版－６　調査区北側上層遺構と下層遺構
図版－７　南側下層遺構
図版－８　方形周溝墓１・２

図版－9　大溝1・2出土須恵器
図版－10　大溝4・その他遺構等出土須恵器
図版－11　大溝1出土土師器その1
図版－12　大溝1出土土師器その2
図版－13　大溝2出土土師器その1
図版－14　大溝2出土土師器その2
図版－15　大溝2出土土師器その3
図版－16　大溝2出土土師器その4
図版－17　大溝4出土土師器
図版－18　遺物包含層出土遺物
図版－19　下層遺構出土土器
図版－20　方形周溝墓1出土土器
図版－21　方形周溝墓・土抗3出土土器
図版－22　土抗3出土土器
図版－23　製塩土器
図版－24　航空写真
図版－25　大溝1・2全景
図版－26　大溝2遺物出土状況
図版－27　調査区北側
図版－28　大溝3
図版－29　大溝4全景・堰
図版－30　大溝4出土状況
図版－31　住居1・4
図版－32　方形周溝墓1・2
図版－33　調査区北側遺構
図版－34　小銅鐸出土状況・南側下層遺構
図版－35　遺物出土状況
図版－36　土層断面
図版－37　現地説明会
図版－38　小銅鐸
図版－39　大溝1出土遺物須恵器
図版－40　大溝1出土遺物土師器
図版－41　大溝2出土遺物須恵器・土師器
図版－42　大溝2出土遺物土師器
図版－43　大溝2出土遺物土師器
図版－44　大溝2出土遺物土師器
図版－45　大溝4出土遺物須恵器・土師器
図版－46　下層遺構出土遺物
図版－47　方形周溝墓出土遺物
図版－48　弥生土器

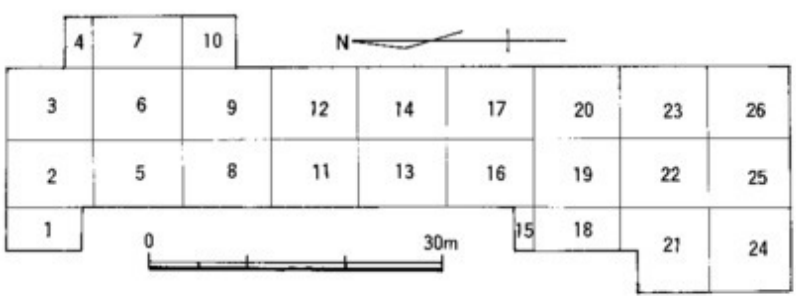
第１章　調査に至る経過

当該地は、柏原市本郷５丁目217－１他２筆（3,526.47㎡）に所在して本郷遺跡の中に入る。国道25号線と国道170号線の中間に位置し、東西方向に走る線の北側に接した南北方向100m、東西方向35mの長方形の区画地である。また、周辺部の調査から集落遺跡の中心部ではないかと考えられる場所である。昭和54年度以来、大阪府教育委員会、当市教育委員会によって14次の調査が行なわれた。調査結果によると、遺跡全域に縄文時代から中世の時期までの遺構と遺物が多数出土している。しかし、現在はほぼ平坦地となっているが、古環境の復元からみれば、氾濫原地域もあり集落の位置は、微高地上にあったことが考えられている。

平成２年11月、柏原市教育委員会が申請者の大和ハウス工業㈱から事前の試掘調査を依頼された。同月26日、重機の提供を受け試掘調査を実施した。試掘調査は、当該地内に南北に２ヵ所のトレンチを設定した。南側のトレンチは、３×３ｍを地表下2.5~3.0mで遺物包含層を検出した。遺物は、古墳時代の須恵器、土師器、木器等が出土した。北側のトレンチは、３×３mの規模で地表下約３ｍから古墳時代の遺物包含層を確認し、出土遺物は、土師器、須恵器、木器等が出土した。以上の結果より、当該地全体に集落遺跡が広がっていることが考えられ、再度申請者と協議して全面の発掘調査を行うようになった。

発掘調査は、申請者からの依頼により柏原市教育委員会が実施した。遺跡深度が深いことから全体に鋼矢板の打ち込みを行い、安全の確保に万全を期し慎重な工事を行った。上層の土砂は、重機掘削して排土した。遺物が出土する土層から人力により掘削した。調査結果は、本書に報告するとおりである。

今回の調査は、本郷遺跡の性格を示す発掘調査であることから、事前の記者発表を行い、平成３年７月20日、一般市民への公開を目的とした現地説明会を催した。小銅鐸と云う珍しい考古資料と弥生時代から古墳時代の遺構と遺物の見学に市内の人々だけでなく遠方から多数の人々が訪れて頂いた。



図－１　地区割図

N
本郷五丁目
0
200m
N
大県遺跡
本郷遺跡
大県南遺跡
平尾山古墳群
船橋遺跡
太平寺遺跡
安堂遺跡
高井田遺跡
0
1000m

図－2　周辺の遺跡

第２章　調査概要

第１節　調査の概要

試掘調査は、平成２年11月26日、２ヶ所のトレンチを設定して重機により地表下約３ｍまで掘削した。主として古墳時代の遺物包含層を検出したことから、建物基礎の部分に全面発掘調査を実施することになった。調査は、平成３年４月26日から同年７月20日まで実施した。調査の実施に際して遺跡深度が深いので鋼矢板の打ち込みを行い調査等の工事に際して安全を期し、上層の土層は重機によって遺物が出土する層まで掘削し、その下層の土層は人力によって掘り下げ遺構の検出と遺物の取り上げを行った。沖積地であることから重機の移動や掘削は周辺住民の迷惑を考慮して慎重に実施した。

調査の方法は、必要に応じて土層の確認が可能なように南北方向と東西方向に畔を残した。また、地表から2.5m以上の下層であり水がよく湧く地域なので周囲に溝を巡らし排水を心掛けた。調査の実施に際して調査区を北西隅から北東方向に１、２区とし順次南東隅まで26区に細分して分けた。これは、遺物の取り上げ能率を高め、調査精度を正確にする目的である。

基本土層断面は、調査区の南側に残した畔によって説明すると次のとおりである。

第１層は、盛土と旧表土及び粘土質の耕作土である。約2.2mの厚さがあり、近世遺構の土層と考えられ、この最下層として薄茶灰色粘質土がある。第２層は、淡黄灰色粘質土及び灰茶色粘質土である。第３層は、灰茶色から黄灰色の砂土である。0.3～0.4mの厚さがある。この砂土は、調査区全体に広がっており、古大和川が氾濫した時の砂層である。第４層より下層の土層は、大きく２ツに分けられ、所謂あげ田の痕跡のある場所とそうでない場所がある。前者の方は、第４層は、暗青灰色粘質土である。0.12～0.3mの厚さがある。第５層は、青灰色粘質土又は青灰色シルトである。第６層は、灰青色粘質土又は灰青色シルトである。この層の上面は、古墳時代の遺構面である。第４～６層は、0.8～1.0mの幅で台形畦状に1.3～1.8m間隔に遺存していた。その間の土層は、灰色又は青灰色砂土が第３層から続いており調査区全域に広がっている。このあげ田のない後者の土層は、第３層の下層に第７層があり、薄茶灰青色シルトである。第８層は、青灰色粘質土である。厚さ約0.5mを測る。第９層は、淡黄灰色粘質土である。この土層は、古墳時代前期の遺物包含層である。第10層は、黄灰褐色粘質土である。この土層は、上面で弥生時代後期の遺構を確認しており、遺物を含まず弥生時代以前の土層であろう。この土層より下層は、地山の緑灰色粘質土又はシルトである。

第２節　遺構

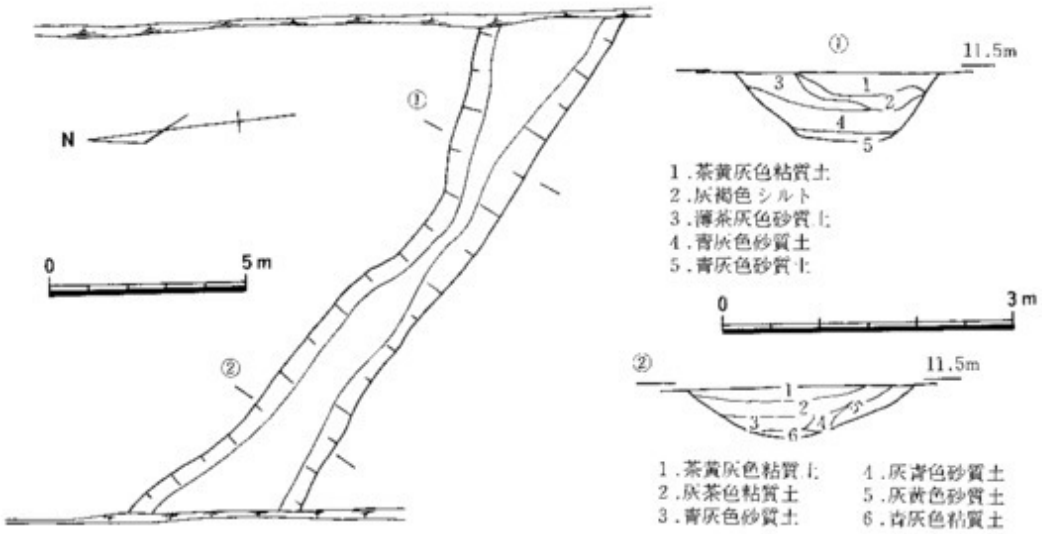
調査によって検出した遺構は、古墳時代の大溝１～４、溝１～６、竪穴住居１～４、土抗１、ピット多数と弥生時代の溝７～13、方形周溝墓１～２、土抗１、ピット多数を検出した。それぞれの遺構について形状、規模、遺物の出土状況等を述べていきたい。

大溝１

調査区の４、６、７、10区に検出した大溝である。形状は、南東から北西方向を向き90度方向を変換し北東方向に伸び大きく湾曲した大溝である。長さ約12mを測り、幅は、2.8～4.2m、深さは、1.0～1.7mである。地形は、南側から北側へ低くなっているが流れは北側から南側へ向いているようで、北側の方になるほど浅くなっている。大溝の掘方断面は、逆台形であるが凹凸が激しい底部である。大溝中央部の土層断面は、次のとおりである。第１層は、暗茶褐色粘質土である。第２層、茶褐色粘質土、第３層、灰茶色砂質土、第４層、茶灰色粘質土である。第２～４層は、大溝の埋土の中で新しい埋土である。第５層は、灰褐色砂質土、第６層は、灰青色粘質土、第７層は、青灰色砂土、第８層、青灰色砂土と暗茶褐色粘質土（ピート層）の混層である。出土遺物は、土師器、須恵器、木器、種子等が出土した。時期は、古墳時代中期が主体である。遺物の多くは第１層から東よりの肩部から転落したように出土している。第５～８層は、砂土を多く含み水の流れによって堆積した土層であるが水が淀んだ時に出来るピート層も部分的にみられる。大溝が稼働していた時期は、古墳時代中期である。

大溝２

調査区の２、３、５～10区に検出した大溝である。形状は、南東方向から北西方向に向けて伸び北側に屈曲した後真西に大きく蛇行してＳ字状に曲がりくねった大溝である。長さは、23.5m、幅、2.5～5.8m、深さ、0.6～1.7mを測る。大溝の掘方断面は、逆台形である。西側肩部はなだらか斜面である半面、東側肩部はきつい斜面で２段になっている部分も認められる。北側の大きく折れ曲がった部分の斜面は、テラス状の平坦地を持ち人為的な構造の溝の形跡がある。埋土は、第１層は、暗灰褐色砂質土で大溝１の周辺まで広がる土層である。出土遺物は、土師器、須恵器を含んでいる。砕片の土器が多かった。第２層は、暗灰茶色粘質土で地山の崩壊土に近い。第３層は、暗灰褐色粘質土と茶灰色砂土の混層、第４層は、暗灰褐色砂質土、第５層は、黄緑灰色シルトである。第６層は、灰褐色砂質土、第７層は、薄茶灰色シルト、第８層は、青灰色粘質土、第９層は、灰白色シルト、第10層は、灰茶色砂土である。第３～10層は、割合細かな砂層が主で緩やかな流れの堆積土である。遺物は、須恵器を含まず布留式土器を含む古式土師器が復元可能なものが多く大溝全体から出土した。上層の埋土と混ざった痕跡があまりなく下～上層と順次堆積しているようである。第11層は、茶灰色粘質土、第12層は、灰褐色シルト、第13層は、暗茶褐色粘質土、第14層は、茶灰色砂土、第15層は、茶褐色粘質土、第



図－3　大溝3

16層は、黄茶灰色砂土、第17層は、灰褐色シルト、第18層は、灰黄色砂質土、第19層は、緑灰色粘質土である。第11層から下層のうち粘質土とした土層は、植物遺体を多く含み溝の底部に水が淀んだ時に出来る土層である。砂層は、上層の砂層より粒子が大きいものが多く、時として洪水のような氾濫があったことが考えられる。出土遺物は、庄内式土器を中心とした時期の遺物で自然木と加工の施した木製品も出土した。大溝が稼働していた時期は、古墳時代前期から中期にかけての時期である。

大溝3

調査区の11～14区にかけて検出した大溝である。南東から北西方向にほぼ真直ぐ流れている。規模は、長さ15.5m以上、幅は1.6～2.9m、深さ0.5～0.7mを測る。掘方断面は、逆台形又は円弧状を呈する。南東部の埋土は、第1層、茶黄灰色粘質土、第2層、灰褐色シルト、第3層、薄茶灰色砂質土、第4、5層、青灰色砂質土である。砂土は少なく穏やかな流れに出来る土層である。遺物は、あまり大きな破片はなく土師器、須恵器、弥生土器等が少量出土した。大溝の稼働していた時期は、古墳時代中期が主流である。

大溝4

調査区の18、21～23、25、26区に検出した大溝である。形状は、南東から北西方向にほぼ真直ぐ伸びた大溝である。規模は、長さ19.5m以上、幅4.2～6.0m、深さ0.9mである。掘方断面は、逆台形で底部は割合平坦である。土層セクションは、2カ所で観察した。埋土は先の大溝1～3と異なり細かく別れており、攪乱されているような土層である。砂土は、薄い層で部分的に認められる。全体に粘質土が多い。大溝の西側端から杭と横木を組み合わせた堰を検出

した。堰は、水の流れは西北西方向に流れるのが本流であるが西方向に向きを変える目的の遺構と考えられる。杭はほぼ垂直かわずかに南傾しており横木は東西方向のものが多い。杭は、堰の周辺部で106本を数え、大溝の中央部かやや南寄りの場所にあり、円形自然木と方形の角杭がある。前者は、径５～10㎝のものが大部分を占め先端を焼いたものが10本程認められた。また、先端は鋭利な刃物で尖らせている。材種は広葉樹である。後者は、３～10㎝の角材で先端部を焼いているものが４本認められた。ほとんどの杭は先端を尖らせており転用材のようである。材質は、針葉樹で全体の８割を占めている。

大溝の中央部や東側の中程底部に木の切れ端や杭が人為的な並び方をした所があり、堰の手前で導水するための施設があったものと考えられる。出土遺物は、土師器、須恵器、弥生土器、種子、石器、獣骨等が出土した。上下層とも時期の混在した遺物があり明確に分けられる状態の出土をしていない。また、土器の破片が多く接合資料も少ない。大溝の深さが浅いので稼働させるための底さらいが頻繁に行われていたことが考えられる。

溝１

調査区の３区から検出した半円形に曲がった溝である。長さ4.5m、幅0.5～1.1m、深さ0.1mを測る。掘方断面は、逆台形に近い。埋土は、薄茶灰色砂質土である。遺物は、土師器、須恵器が少量出土した。直ぐ隣に竪穴住居があり関連のある溝と考えられる。時期は、古墳時代中期である。

溝２

調査区の９、10区に検出した溝である。大溝１と大溝２の中間部分にあり、南東から北西方向にほぼ直線的に大溝２の東側肩部まで伸びている。長さ9.6m、幅0.5～0.7m、深さ0.1mを測る。掘方断面は、半円形である。時期は、古墳時代中期である。

溝３

調査区の５、８区に検出した溝である。大溝２の西側端から西北西に真直ぐ伸びた溝で流れは西から東向きである。長さ3.7m、幅約１m、深さ0.1～0.3mである。掘方断面は、やや平らな底部を持ち幅の広いU字形である。埋土は、灰褐色砂質土である。この溝の周辺から朱塗りの弥生土器が出土している。時期は、他に遺物がなく明確でない。大溝２に注ぐような溝であるので古墳時代前期から中期にかけての時期が考えられる。

溝４

調査区の23区に検出した溝である。東側から大溝４に向けて真直ぐ流れる溝である。長さ6.0m、幅0.9～2.0m、深さ0.2mを測る。掘方断面は、緩い弧状である。埋土は、薄茶灰色粘質土である。時期は、不明で古墳時代中期以降であろう。

溝５

調査区の24～26区に検出した溝である。大溝４の南側端の東側から西側に向けて真直ぐ伸び

た溝である。長さ16.0m、幅0.9～2.0m、深さ0.2mを測る。掘方断面は、緩い弧状である。この溝も大溝4以降の時期である。

溝6

調査区の25区に検出した溝である。溝5と接続して南北方向に伸びる溝である。長さ3.8m、幅0.9～1.4m、深さ0.1mを測る。掘方断面は、U字形である。埋土は、薄茶灰色粘質土である。時期は、出土遺物がなく不明で古墳時代中期以降であろう。

大溝4より南側の調査区は、遺構面が2面あり溝5、6の検出面より約0.2～0.3mの淡黄灰色粘質土を掘削した後に溝7～11を検出した。各溝は、完形の土器も出土したが細片の土器が多く農耕に利用された溝であろう。時期は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてが考えられる。

溝7

調査区の21、24区にあり、溝5、6の存在する面の下層から検出した溝である。南東から北西方向にほぼ真直ぐ伸びる溝で溝11に接している。掘方断面は、逆台形を呈して人為的な所作が認められる。長さ10m、幅1.4～1.7m、深さ0.5mを測る。埋土は、第1層、薄茶灰褐色シルト、第2層、青灰色粘質土、第3層、灰褐色砂質土、第4層、青灰色粘土である。遺物は、土師器、弥生土器が少量（223、224）出土した。時期は、弥生時代後期から古墳時代前期に当り、溝7～11の中で最も新しい溝である。

溝8

調査区の25、26区から検出し東西方向から南北方向に折れ曲がった溝である。長さ12.5m、幅1.1～1.4m、深さ0.13～0.22mである。掘方断面は、浅いU字形である。土層は、上層が薄茶灰褐色粘質土又は暗灰褐色粘質土、下層が青灰色粘質土である。遺物は、溝の底部に完形に近い弥生時代後期の土器（222、228～233）が出土している。

溝9

調査区の22、25区に検出した南西から北東方向を向いた溝で北側は大溝4に、南側は溝8に切断されている。長さ5.5m、幅1.2～1.4m、深さ0.2mである。掘方断面は、弧状を呈する。埋土は、上層が暗灰褐色粘質土、下層が青灰色粘質土である。出土遺物は、弥生土器が少量出土した。

溝10

調査区の25区に検出した溝8にきられ溝11に続くと考えられる南東から北西方向に伸びた溝である。長さ3.5m、幅0.15～0.2m、深さ0.13mである。掘方断面は、弧状である。埋土は、上層が薄茶灰褐色粘質土、下層が灰青色粘質土である。弥生土器が少量出土した。

溝11

調査区の21、24区から検出し溝10から続くと考えられ溝7と接した所でくの字形に屈曲して

北北西に伸びる溝である。長さ11.5m、幅0.8～1.15m、深さ0.24mである。掘方断面は、弧状である。埋土は、上層が薄茶灰青色シルト、中層が暗灰褐色粘質土、下層が黄緑灰色粘質土である。出土遺物は、弥生土器が少量（235）出土した。

溝12

調査区の21区に検出した溝で溝11と大溝４に接しており南南西から北北東に伸びた溝である。長さ５m、幅0.9～1.4m、深さ0.3mである。掘方断面は、逆台形である。埋土は、第１層、薄茶灰褐色粘質土、第２層灰青色砂土、第３層暗青灰色粘質土、第４層灰褐色粘質土、第５層緑青灰色粘質土である。出土遺物は、第１層から青銅製小銅鐸が出土した。自然埋没した状態で鈕の部分を南向きの溝上方に向けて少し下方に傾斜を持ち埋まっていた。第２～５層から弥生土器の細片少量とサヌカイト石鏃１点が出土した。溝７～12までの溝の中で最も古い要素がある。時期は、弥生時代後期である。

住居１

調査区の３区に検出した古墳時代中期の方形竪穴住居である。大溝１と２の北側に広がる微高地の南側中間部に当る。両大溝を利用出来る適した場所に立地しており、人為的に溝の方向を変えたことも考えられる。大溝１、２に埋没していた遺物の多くはこの住居の廃物品であろう。しかし、各大溝の遺物量は、一住居に対応する量ではなく北側ないし東側の方向になお多くの住居が想定される。住居の方向は、Ｎ－18°－Ｅである。南北方向一辺は、3.0～3.3m、東西方向3.4～3.7mを測る。中央部に４穴の柱穴が遺存している。南西部の柱穴は２穴あった。検出面より約0.2mの深さである。遺物は、床面全体に土師器、須恵器の細片、鉄滓が出土した。埋土は、薄茶灰色粘質土である。張り床や排水溝は確認されなかった。

住居２

調査区１区の南端部に住居の約四分の一だけ検出した方形竪穴住居である。大溝２の北側ないし一部溝によって削られている。この周辺の土層はやや軟質で調査に伴う鋼矢板の打ち込みによって影響を受けてその近く程下方に引張られて下がっている。住居の方向は、Ｎ－40°－Ｗである。規模は、南北2.7m、東西2.0m、深さ0.2mである。埋土は、青灰色粘質土である。柱穴や排水溝は検出していない。遺物は、土師器が少量出土した。時期は、明確でないが古墳時代中期頃であろう。

住居３

調査区の１区の北西隅に検出した方形竪穴住居である。住居２の北側1.5mにあり、その南東部分だけの検出である。住居の方向は、Ｎ－９°－Ｅである。規模は、南北方向2.5m、東西方向1.5m、深さ0.15mである。埋土は、青灰色粘質土である。竪穴住居２と同様に柱穴や排水溝はなかった。時期は、埋土から遺物の出土がなかったが上層の遺物包含層から古墳時代中期頃であろうと考えられる。

住居４

調査区の19、20、23区にまたがって検出した方形竪穴住居である。大溝４の北側３ｍ、方形周溝墓２から南東へ1.7ｍの位置にあり南側では安定した場所である。住居の方向は、Ｎ－60°－Ｅである。規模は、一辺約4.5ｍである。遺存状態が悪く、深さは0.1ｍである。北側隅に掘りあげ田の底部があり、攪乱されている。四隅に３ケ所の柱穴痕と中央部分に炉の痕跡がある。柱穴は円形で東側３穴あり他は各１穴である。規模は、直径0.2～0.45ｍ、深さ0.03～0.1ｍを測る。周溝は、南西方向の一辺を除き幅0.1～0.25ｍで断面は逆台形またはＵ字形で遺存している。南西部分は、一番高い場所になり北東及び北西方向に緩やかに下がっている。炉は、中央部で0.4～0.6ｍで黒茶色に焼成を受け変色している部分があり、その下層は、防湿の為か炭を充満させたピットとなっている。遺物は、土師器の細片が全体から、植物遺体が南西部から出土した。植物遺体は、状態が悪いが細かい繊維状で同一方向の伸びた部分もありゴザのようなものの可能性がある。時期は、明確でないが周辺の遺物包含層や大溝４の埋土から出土している遺物等を参考にすれば古墳時代中期として大過ないであろう。

土抗１

調査区の３、６区に検出した円形土抗である。大溝１の西側肩部で住居１の南側にあり両遺構と関連がある土抗と考えられる。規模は、径約1.5ｍ、深さ0.85ｍである。掘方断面は、Ｕ字形で底部が平底である。埋土は、灰青色シルト、茶褐色粘質土、灰青色粘質土があり、植物遺体や水が淀んだ状態の土層が大部分である。出土遺物は、土師器、須恵器、木片、種子等が出土した。時期は、古墳時代中期である。

土抗２

調査区の13区から検出した。大溝３と方形周溝墓１の間で円形の土抗である。底部が円弧状に窪んだ自然に溜りが出来た様な遺構である。埋土は、ピート層に近い土層である。径は、約1.0ｍ位である。時期は、明確でないが方形周溝墓と同時期であろう。

土抗３

１区の北端部で検出した土抗である。排水溝の掘削時に検出したので明確な規模は不明であるが２ｍ位の幅で長さはさらに調査区外に続くと考えられる。遺物は、弥生時代中期の土器群が出土した。土器は、壺（249、253～255）、高杯（250、251）、瓶（252）、蓋付鉢（256～259）、水差形土器（260）がある。

ピット群

調査区の１～３区に検出したピット群が古墳時代中期の面と弥生時代後期の面から多くのピットを検出した。建物に構成出来るものはなくそれぞれ独立したようなピットである。形状は、円形や楕円形のピットが多く方形のものはない。また、埋土の中から土師器、須恵器と弥生土器が出土したピットもあるが細片が多く時期を明確にするものは少ない。

方形周溝墓１

調査区の13、16区から検出した周溝墓で西側半分が調査区外である。マウンドはほとんどなく後世の削平によって消滅している。規模は、東西4.0m以上、南北7.6mである。主体部は、マウンドの中心部になく北側よりの場所に土器棺を検出した。規模は、楕円形平面を成し南北0.72m、東西0.57m、深さ0.2mである。口縁部を打ち欠いた壺に瓶か壺の底部を蓋にした土器棺である。土器は、掘方ぎりぎりに蓋を北側寄りの横位に埋納している。周溝は、北、東、南側に検出した。方向は、ほぼ南北方向である。南側の溝は、周溝墓２に共有している。東側溝の中に完形に近い土器が数点出土した。供献土器と考えられるが溝埋土の上層から出土している。北側溝は、幅1.2m、深さ0.34m、東側溝は、幅最大5.5m、深さ0.54mである。埋土は、第１層黄灰褐色粘質土、第２層灰黄色粘質土、第３層青灰色粘質土、第４層青灰色シルト、第５層青灰色砂質土である。自然埋没していった様子が窺える。時期は、弥生時代後期である。

方形周溝墓２

調査区の15、16、18、19区に検出した周溝墓で周溝墓１の南側に接している。規模は、東西7.0m以上、南北6.7mである。周溝墓１と方位が異なり約45°東側へ振っている。主体部は、周囲の土層と若干異なった部分があり木棺の痕跡と考えられる部分が存在した。ほぼマウンドの中心部になり可能性は高い。周溝は、西側だけを除き３方に検出した。掘方断面は、逆台形である。北側溝は、周溝墓１と共有しており、幅1.6mである。東溝は、長さ９m、幅約1.5m、深さ0.37m、南溝は、長さ８m以上、幅約1.5m、深さ0.34mである。埋土は、第１層薄茶灰青色シルト、第２層灰黄色粘質土、第３層灰青色粘土、第４層灰青色粘質土である。溝の中に細片の土器が数点出土した。時期は、弥生時代後期である。周溝墓１、２の前後関係は、明確でないが後者は大溝４に規制されて方向が決まったことが考えられる。大溝４は、古墳時代中期頃に利用されていた大溝であるが周溝墓２があるため少し離して南側へ避けて掘削したのか周溝墓２が造墓される以前から前身の溝が存在していたのか両方が想定される。周溝墓２の方が後出と考えられる。

第３章　遺物

今回調査した範囲の中で出土した遺物は、先に述べた遺構の中及び遺物包含層から多量の遺物が出土した。遺物の種類は、須恵器、土師器、弥生土器、木器、青銅製小銅鐸、獣骨、種子、鉄滓、臼玉、砥石、サヌカイト製石鏃等がコンテナ95箱分出土した。今回報告する遺物は、原則的に実測が可能なものと特異な形態をしたものに限定した。時期は、弥生時代中期から古墳時代中期までが中心である。各種類毎に若干の説明を加えてみたい。

第１節　上層遺構出土遺物

須恵器は、古墳時代中期から後期にかけての時期の遺物が出土した。出土した遺構は、大溝１～４、溝１、土抗１、竪穴住居１、遺物包含層からである。各遺構毎に説明を加えていきたい。

大溝１から杯蓋（１～５）、杯身（７～14）、有蓋高杯（６、15）、無蓋高杯（16、17）、把手付椀（18、19）、壺（62）がある。時期は、陶邑編年Ⅰ型式４段階（以下１－４と省略する）からⅡ型式１段階までのものがある。分層して調査したが各層にそれぞれ異時期のものが混入していた。１の天井部は、カキ目調整である。杯の底部及び天井部には手持ちの不定方向のヘラ削りのあるものはなく、全体に丁寧な回転ヘラ削りを施している。口縁の端部は、平らか凹面をなして内傾するものが多く丸くなったものはない。胎土は、密なものから１～３㎜の砂粒を含むものまで色々であるが精緻なものが全体的に多い。焼成は、良好で堅緻のものである。色調は、青灰色、灰白色のもので淡い色のものが多い。２の口径と器高は、12.9㎝、4.4㎝である。３の口径と器高は、14.4㎝、4.2㎝である。７の口径と器高は、10.0㎝、4.4㎝、14のそれは、12.0㎝、5.3㎝を測る。有蓋の高杯の蓋（６）は、つまみが付き口縁端部は内傾する段をもつ。15は、ハの字状に広がる短い脚が付き３方向の台形透かし穴が付いている。無蓋高杯（17）は、両側に小さく模様帯の幅に断面が円形をなす把手を付けている。模様は、上部に２条の凸線と下部に波状文がある。口縁部は、外反して広がり端部が直立気味である。脚部は、外反気味にハの字状にひろがり、３方向の台形透かし穴があけられている。胎土は、密で２、３㎜の砂粒を少し含む。焼成は、良好堅緻である。色調は、灰青色又は暗灰青色である。17の口径と器高は、16.4㎝、11.9㎝を測る。把手付椀（18、19）は、片方に無蓋高杯の把手と同様のものを付け、18には球状の装飾を貼り付けている口縁は外反気味に直立し、底部は小さく平底である。底部の調整は、不整方向のヘラ削りである。模様帯は、上部が２本の凸線で下部が波状文である。胎土は、２㎜未満の砂粒を少し含むが精良である。焼成は、18が堅緻で19

は不良である。色調は、前者が暗灰色、後者が淡乳褐色である。18の口径と器高は、8.8cm、6.8cmを測る。壺（62）は、横方向に長い楕円形体部に逆ハの字状に広がる口縁部があり端部はさらに外反した後上方に湾曲して伸びるものである。口縁端部外側に2条の凸線がある。体部外面は、全面に平行叩き後上部大半にカキ目調整を施し、内面は同心円文叩きを擦り消し上部には指圧痕がある。口径と器高は、15.3cm、15.6cmを測る。胎土はやや密で砂粒を少し含む。色調は、赤褐色を呈する。

大溝2から出土した須恵器は、主としてその上層からで杯蓋（20～26）、杯身（27、28）、高杯（29）、把手付椀（30）、横瓶形壺（31）がある。杯は、Ⅰ－3からⅡ－4までのものがある。20は、天井部が不整方向のナデを施し口縁端部は丸く仕上げる。口径と器高は、9.4cm、3.1cmである。23は、天井部全体にカキ目を施している。口縁端部は平面で接地する。口径と器高は、14.1cm、4.4cmである。29は、小型高杯の脚部で透かし穴が施されていない。30は、把手の外れた痕が片方だけにあり体部に2条の凸線と波状文がある。口縁部は器壁がやや薄く外反気味に直立している。底部は、不整方向のヘラ削りである。口径と器高は、10.8cm、6.7cmである。31は、口縁部が欠損しているが小型の壺である。体部の円筒部分には3条の沈線を巡らし、その間に2、3条の波状文を施す。平坦な外底部は、ヘラ先状の刺突文が螺旋状に施されている。シャープな感じの壺である。50は、格子状叩きを施した後5条以上の平行沈線が施されている。胎土は、密、焼成は、良好堅緻、色調は、灰白色である。韓式系の陶質土器である。

大溝3から壺（51）が出土した。口縁部が欠損しているが頸部が細く体部の最大径にあたる位置が上方2／3の位置にあり、頸部下方に波状文、底部に半スリ消し平行叩き、肩部に円孔が1穴と波状文帯が巡る。

大溝4から出土した須恵器は、杯蓋（32～37）、杯身（39～42）、有蓋高杯（38）、高杯（43、44）、瓶（45、46）が出土した。時期は、Ⅰ－4からⅡ－4までのものがある。32は、Ⅱ－4に属する最も新しい時期のもので扁平な天井に形骸化した稜が付く。天井部の調整は回転ヘラ削りと未調整部分がある。口径と器高は、14.9cm、4.2cmを測る。その他の杯は、主に2時期に分かれ、口縁端部は、内傾する平面又は段を持つ。高杯と瓶は、その中でも古いものに含まれる。

溝1から出土した須恵器は、杯身（47）がある。Ⅱ－2の時期にあたる。口径と器高は、11.2cm、4.4cmである。住居1から出土した須恵器は、杯蓋（54）、杯身（55、56）がある。54は、明瞭な稜を持ち口縁端部は内傾する平面を有している。天井部は、全体に丁寧なヘラ削りを施している。55は、口縁端部が丸く仕上げられている。口径と器高は、10.7cm、4.6cmである。いずれも胎土は密で焼成は良好堅緻である。色調は、灰青色又は灰白色である。これらは、Ⅰ－5にあたりこの時期頃に廃絶した住居であろう。土坑1から杯蓋（52）と高杯（53）が出土し

た。52は、扁平な天井部を持ち口縁端部が平地面に接する。口径と器高は、12.5cm、3.8cmである。これらは、Ⅰ－4にあたり住居1と近接する時期である。

その他に出土した須恵器は、遺物包含層からである。上述した遺構内出土遺物とほぼ器種、時期は同様である。60は、口径と器高は、8.1cm、5.0cmと扁平小型の把手付椀である。体部に2条の凸線があり波状文がなく底部に松葉状のヘラ記号が交錯するように描かれている。底部は、不整方向の静止ヘラ削りである。

土師器は、古墳時代前期から中期にかけての遺物が出土した。出土した遺構は、大溝1、2、4、溝1、7、住居1、土抗1等がある。各遺構毎に説明を加えていきたい。

大溝1から出土した土師器は、杯（63～73）、高杯（74～77、98）、小型壺（78～85）、中型壺（86～88）、瓶（89～97）、甑（99、100）、鍋（101）等がある。

杯は、半楕円形の体部に口縁端部が短く外反して丸く又は尖り気味に終わるものが多い。調整は、内面を板ナデによって平滑に仕上げ、外面を上部が板ナデ、下部がヘラ削りが多い。63、64は、外面に指押え痕がある。68と70は、口縁部内面にハケ目が遺っている。また、後者は、外面にハケ目調整が施されている。色調は、茶褐色、茶灰色、赤茶色、橙茶色である。胎土は、やや粗く石英、長石を含み、金雲母や角閃石のあるものが多い。これらは、当地域産の粘土を使用している。66の口径と器高は、14.2cm、4.8cmを測る。高杯は、同一形態のものが出土した。半楕円形の体部に口縁端部が内湾する。脚部は、ラッパ口状に広がる。接合部分に、ハケ目の痕跡が遺るのは、ハケ目後ナデ調整が行われたためであろう。75以外は内面に放射状の暗文がある。74の口径と器高は、12.1cm、11.2cmである。色調、胎土は、杯と同様である。98は、脚部の裾に装飾様の粘土が付着している。内面はヘラ削りとハケ目調整である。器壁が厚くやや大型の器種であろう。

小型の壺は、楕円形又は円形の体部に短く外反する口縁部が付く。底部まで遺存していたものは少なかった。外面はハケ目を基調とし、内面は板ナデである。中型の壺も同様の形態と調整方法を採用している。

瓶は、全形復元できるものは少ないが長胴の体部に外反する口縁部を持ち、端部が丸いもの、上方又は内側に少し折り曲げるものがある。89は、口縁端部が外反後上方に平坦面を持つ。外面はハケ目又はヘラ削り、内面はハケ目又はヘラ削りを用いている。色調は、茶灰色、茶褐色系統のもので、胎土は砂粒を含み粗い。甑は、2点あり断面逆台形の体部に2つ把手を付け、底部中央に1穴、周囲に4穴が穿たれている。外面はハケ目、内面は、ハケ目又はナデ調整である。胎土は、当地域産のものである。100の口径と器高は、2.82cm、24.8cmである。鍋（101）は、口縁部が外反して端部は方形で上面に凹線が巡る。内外面は、ハケ目調整で把手の下はヘラ削りである。

大溝2から出土した土師器は、主に次の2時期に分けることが出来る。古墳時代中期の土器

群と古墳時代前期の土器群である。器種は、杯（102～104）、椀（105、106）、器台（107～113）、高杯（114～123）、小型壺（124～135）、中型壺（136～139、149、150）、二重口縁の壺（140、142～148）、長頸壺（141、151、152）、鉢（153）、瓶（154～173）等が出土した。

杯は、扁平な体部に小さく外反する口縁端部を持つ（102）、口縁端部が外反した後に上方に折り曲げる（103）、半円形の体部に外方へ真直ぐ伸びた口縁部を持つ（104）がある。後者は、小型壺にも近似して下層から出土し薄い器壁に丁寧な仕上げである。内面は板ナデにより、外面をナデとヘラ削りで仕上げている。色調、胎土は、当地域産のものである。椀は、杯を少し大きくしたもの（105）、口縁端部を小さく外反させる。内外面にハケ目が遺存している。106は、体部が半球形で口縁端部がわずかに外反している。外面はハケ目調整である。色調は茶褐色を呈し、胎土は粗く砂粒を多く含む。

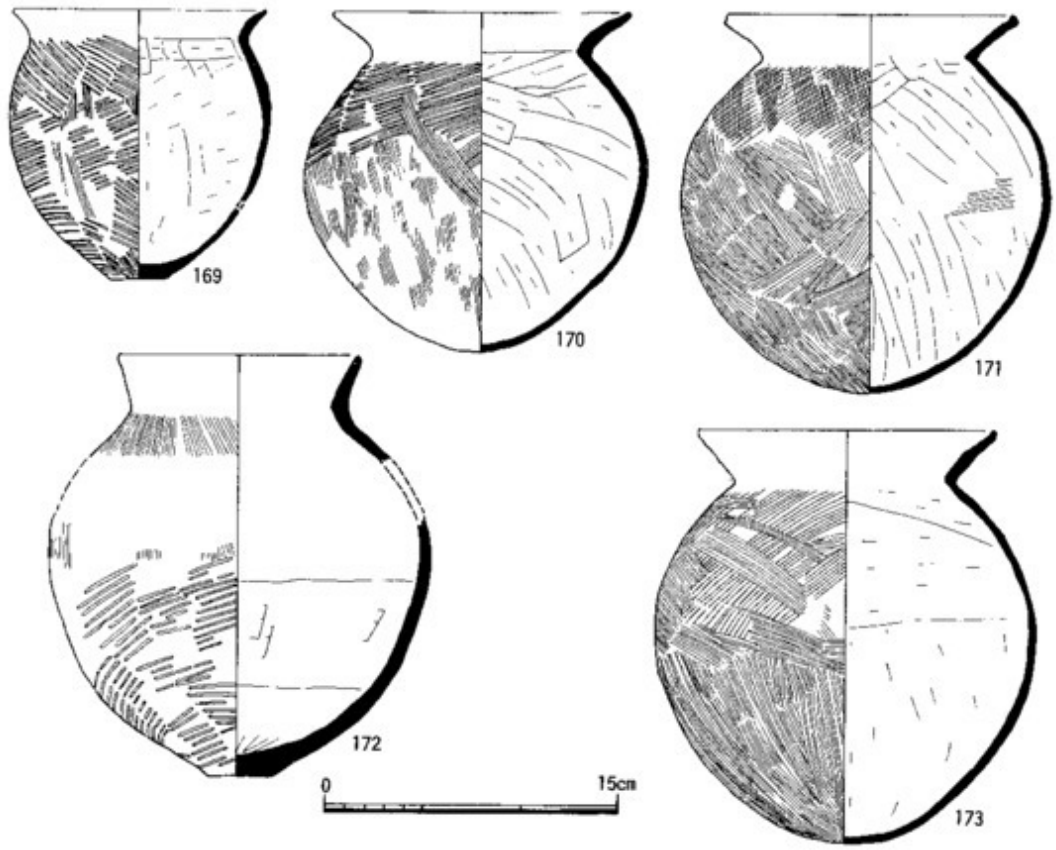
器台は、小形のものが多く杯部が、弧状に内湾しているもの（107、111、113）、口縁が真直ぐ外方に伸びるもの（112）があり、脚部が、正三角錐をなすもの（108、111）、それより長いもの（112、113）、短いもの（109、110）がある。113は、杯部と脚部の中央部に穴があり、脚部に3ないし4ケ所の円孔を空ける。111は2方か4方のいずれかの円孔がある。杯部の内面に放射状の暗文があり、脚部外面にも丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土が精良で表面も平滑に仕上げる。111の口径と器高は、8.6㎝、7.7㎝である。高杯は、大型のもの（114、115）、小型のもの（116～123）がある。前者は、杯の底部と口縁の境に段を有するもので口縁端部が外反している。115は、口径が24.1㎝を測る。内面の口縁部付近に4方向のヘラ磨きと底部に放射状の暗文を施す。色調は、橙灰色、胎土は、粗く砂粒を含む。小型のものは、116、117、118～123の3ツの形態に分かれる。前者は、器台と同様に内外面に密で細かい横方向のヘラ磨きを施し、杯部は半楕円形で、脚部の端が欠損しているが低く広がり杯部の口径よりさらに大きくなる。4ケ所に円孔がある。第2者の117は、体部が半楕円形でラッパ状の脚が付く。調整は、ハケ目と板ナデを主にしている。当地域産の胎土である。口径と器高は、13.2㎝、11.9㎝である。後者は、いずれも口縁端部が内湾後外上方に外反し、脚が長く杯部口径より小さくラッパ状に広がるものである。123のみ脚部の上部が粘土で充填している。色調は、橙黄色、黄褐色、茶灰色である。胎土は、角閃石、金雲母等の砂粒を含む当地域産である。調整は、板ナデとハケ目で仕上げる。121は、杯部外面にヘラ磨きがあり、123は、杯部内面に螺旋暗文がある。120の口径と器高は、18.7㎝、13.9㎝である。

小型壺は、楕円形または球状の体部に逆ハの字状に広がる口縁部が付く。124は、底部に取り付け部があり装飾壺の一部であろう。体部の大きさに比較して長い口縁部を持つもの（126、127）は、内外面を密なヘラ磨きが施されている。短い口縁のもの（124、125、128～135）は、ハケ目調整を主に使用している。124の外底部は、ヘラ磨きである。内面は、板ナデもあるが大部分ヘラ削りである。色調は、黄灰色、黄褐色、橙黄色、胎土は、やや粗く当地域産の粘土

を使用している。中型壺は、球形の体部に直立気味に外反する口縁部を持ち、端部が丸いもの（136、138）、内外に肥厚するもの（137、149）、四角く終わるもの（139、150）がある。調整は、外面をハケ目で、内面をヘラ削り、ナデ、指押さえ等を行う。当地域産の胎土である。

二重口縁の壺の内140は、吉備地域の土器であろう。体部は、倒卵型であるが肩部の張りは少ない。口縁部は、体部から外反した後上方に伸びる。口縁外面には凹線文がある。外面は、ハケ目、内面は、ヘラ削り調整を施す。内底面に指ナデ痕がある。色調は、黄灰色、胎土は、砂粒を少し含み粗い。口径と器高は、14.4cm、23.3cmである。同様な形態のものに144がある。142は、口縁部の内外面に波状文を巡らし、他の部分はヘラ磨きを施す。143は、四国地域の土器であろう。頸部はほぼ直立して大きく外反し端部をまた上方に折れ曲げる。内外面をヘラ磨きしている。145、146は、二重口縁の段がやや崩れたものである。147は、二段に大きく外反した口縁を持ち、体部と口縁との境目に凸帯が巡りこの端部と口縁の先端部及び中段端部に刻目を施している。口縁上部に崩れた波状文を巡らしている。口縁内部の上下に横方向と縦方向のヘラ磨きを施している。体部は、外面をヘラナデ、内面を板ナデである。色調は、茶灰色、胎土は、石英、長石、角閃石等砂粒を少し含む。148は、口縁部が外反後内湾気味に立上がるもので内外面を板ナデしている。部分的にハケ目の痕跡がある。141、151、152は、直口壺である。141は、楕円形状の体部に少し外反気味に伸び端部は丸い口縁が付く。体部外面はハケ目調整で内面は板ナデである。上部に指頭痕が多く遺る。151は、長い口縁部を端部で少し外反させる。外面にハケ目が遺る。152は、長胴に真直ぐな口縁が付く。外面を縦方向のヘラ磨きを施している。色調は、暗黄褐色、胎土は、金雲母、角閃石を含む。溝下層から出土している。153は、大型鉢で肩の張った体部に小さい平底の底部が付く。口縁は、ほぼ真直ぐ外方に伸びる。口縁及び体部の調整は、ヘラ磨きとヘラナデをしている。色調は、灰褐色、胎土は、金雲母、くさり礫を含む。口径と器高は、29.2cm、29.4cmを測る。

瓶は、全形を知るもの（169～173）は少ないが口縁端部の形態に異なる種類がある。口縁部が体部から大きく外反して端部を上方に小さく摘みあげたもの（154～157、159、170、171、173）、外方に真直ぐ又は内湾気味に伸び端部が内側に肥厚するもの（158、160～168）である。前者は、外面の上半を平行叩き、下半はハケ目により、内面は、ヘラ削りによって仕上げている。169と172は、体部は逆卵型であり、口縁端部が丸くおわるもので底部が平底である。ハケ目調整は極わずか認められる。172の調整は、外面上半がハケ目で下半は平行叩き、内面は板ナデである。170は、球形に近い体部である。173は、体部の最大径が中央やや上位で楕円形に近い形態である。これらは大溝の下層から出土し、弥生時代第Ⅴ様式か庄内式土器である。色調は、黄褐色、黄灰色、灰褐色である。胎土は、黒色砂粒、金雲母、くさり礫等を含みやや粗い。口径と器高は、169は、12.8cm、13.8cm、170は、15.0cm、17.3cm、173は、15.2cm、21.0cmである。後者は、布留式土器である。これらは、大溝の上層から出土し、古墳時代中期であ



図－4　大溝２出土土師器　その５

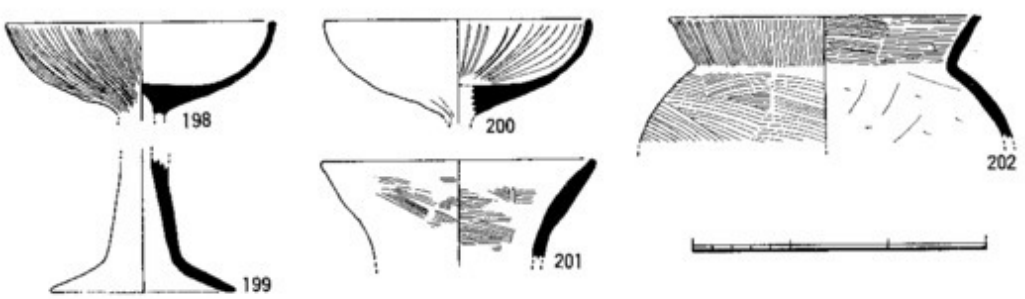
る。口縁部は、体部との境で段を持つもの（162、165、166）とないものがある。調整は、横方向のハケ目を主体としている。内面は、ヘラ削りが主である。173は、体部上半部に３つの刻み目がある。色調は、暗黄灰色、黄褐色、黄橙色である。胎土は、庄内式土器と近似している。口径は、同等の体部を持つ庄内式土器より内湾している分だけ少し小さい。

大溝４から出土した遺物は、大溝２の遺物と同様な時期のものが出土した。器種は、杯（174）、鉢（175）、高杯（176～180）、小型壺（181～186）、大型壺（187）、瓶（188～195）、弥生時代第Ⅴ様式の壺（196）等がある。174は、体部が深く平底状になった杯で口縁は外方に小さく折り曲げている。体部の調整は、内外面にハケ目とナデを施している。当地域産の胎土である。175は、２段になった口縁部に丸い底部を持つ小型鉢で、内外面に密なヘラ磨きをしている。器壁は薄く、色調は、橙茶色、胎土は、当地域産である。口径、器高は、15.4㎝、5.6㎝である。高杯は、杯部が内湾する小型もの（176、177）と大型のもの（178～180）がある。前者は、外面はハケ目とヘラ削りにより、内面に板ナデ後放射状暗文が見える。脚部は、ラッパ状で口径があまり大きくならない。後者は、杯底部は平たく、大きく外反する口縁を持つ。

178は、内外面にハケ目があり、179は、ヘラ磨きをしている。180は、ヨコナデで脚部との接合部分にハケ目が遺る。口径は、26.8cmである。小型壺（181～184）は、横方向に長い楕円形をして真直ぐ又は内湾気味に外方へ広がる口縁を持つ。外面は、ハケ目で184はその後ヘラ磨きをしている。内面は、ヘラ削りか板ナデである。185は、扁平な体部に大きく外反する口縁を持ち、脚部がある。外面には縦方向のヘラ磨きがある。色調は、薄灰褐色、胎土は、石英、長石等の砂粒をよく含む。186は、楕円形の体部にハケ目後ナデ調整を施す。187は、逆卵形の体部に端部が欠損しているが大きく外反する口縁部をもっている。外面は、ハケ目調整である。肩部に簡素な波状文が付けられている。内面は横方向のヘラ削りである。色調は、灰茶色、胎土は、角閃石を含み当地域産である。瓶は、190以外が布留期のものである。口縁端部が肥厚するもの（188、191）、内外に折れ曲げるもの（189、192、193）がある。調整は、外面に平行叩きの遺るものがあるがハケ目調整が主流である。196の壺は、内外面に密なヘラ磨きが見られる。胎土は、金雲母、角閃石等の砂粒を含み当地域産であろう。

住居1から高杯（198、199）が出土した。杯部は、半円形に内湾する形態で外面にはハケ目が施されている。脚部は、ラッパ状に広がり口径より大きくならない。土抗1から高杯（200）、壺（201）、瓶（202）がある。200の高杯は、内湾する杯部を持つ形態で小型のものである。内面に放射状の暗文がある。201の壺は、逆ハの字に広がる口縁部で、端部がうち側に肥厚する。内外面にハケ目が見られる。202の瓶は、口縁が外側に真直ぐ伸び端部が上面に平坦面を持つもので、体部内面がヘラ削りを行い他の部分はハケ目か板ナデである。時期は、5世紀末から6世紀にかけての時期である。

遺構に伴わない遺物として各種の土器がある。特徴のある遺物に若干説明を加えてみたい。213の直口壺は、小さな底部に、最大径がほぼ中央部に見られる体部と直立気味に立上がり、端部で外反する口縁を持つ。口縁外面に1条の沈線を巡らしている。体部上半と口縁部外面に板ナデ状のハケ目を施し、下半は、ナデ調整である。色調は、茶灰色、胎土は、石英、長石、角閃石の砂粒を少し含む。215は、口縁部が短く外反し端部が上方に尖り気味のもので肩部付



図－5　住居1・土抗1出土土師器

近に円孔がある。216は、壺の破片と見られるもので直線と曲線の組み合わせた沈線文がある。外面はヘラ磨き、内面は板ナデをしている。色調は、茶褐色、胎土は、石英、長石、金雲母を少し含んでいる。218は、土錘である。長さ、10.3cmである。220は、横方向に張った体部、口縁部は大きく外反して端部は水平方向に伸び内側に軽い段が付く。口縁端部と肩部に竹管文を配し外面をヘラ磨き、内面を横方向の板ナデを施している。色調は、灰茶褐色、胎土は、金雲母、角閃石を含んでいる。

第2節　下層遺構出土遺物

下層遺構は、調査区の1～3、21～26区までの北端と南端の2ケ所で検出した。それぞれ時期の明確となるものを示し説明を加えたい。

北側ピット群の中から出土した遺物として、鉢（226）、瓶（227）がある。226は、半球形の体部に外方に伸びる口縁が付く体部外面はハケ目調整があり、口縁部内面にヘラ磨きがある。口径と器高は、11.5cm、6.1cmである。227は、庄内式土器の瓶である。溝7から出土したものに瓶（223～225）がある。224は、口縁部が水平方向に大きく外反した後斜め外方に屈曲する。その外面に円形浮文を貼りつけている。また、口縁端部に刻み目をつけている。225は、小形瓶である。外面に平行叩きを施し胴部が口径より小さく平底である。口径と器高は、13.2cm、12.2cmである。溝8から出土したものは、瓶（228、229）、高杯（230）、器台（231）、壺（232、233）がある。228は、225と同種の形態である。叩きが肩部、体部上半と下半の3つの部分に別れている。調整方法が異なるのは器形がやや大きいというのも理由の1つであろう。色調は、茶灰褐色、胎土は、石英、長石、角閃石等の砂粒を少し含む。二次焼成痕がある。口径と器高は、17.5cm、17.7cmである。229は、逆卵形の体部に外反する口縁をもち小さな底部が付くと思われる。調整は、外面を下方から左下がりの叩きで同一方向に施している。これも二次焼成痕がある。230は、外反する口縁の高杯で、脚裾はあまり大きくなく内実になっている。調整の主流は板ナデである。杯底部外面は、ハケ目、内面はヘラ磨きが見られ脚部外面はヘラ磨きである。裾部に4ケ所の円孔がある。231は、受部と裾部が同様の鼓形を呈する器台である。内外面の調整は、ヘラ磨きを施している。色調は、灰白色、胎土は、金雲母、角閃石を含む。233は、球形に近い体部に外反する口縁を持つ壺である。内外面を板ナデによって全体を仕上げている。体部の肩に部分的なヘラ磨きをし、4ケ所に竹管文がある。色調は、暗灰褐色、胎土は、角閃石を含んでいる。口径と器高は、15.0cm、25.0cmである。234は、溝4から出土した壺の破片である。この溝は、古墳時代後期の溝であるから後世の混入した遺物であろう。235は、溝11から出土した壺の体部である。体部はナデによって平滑に仕上げている。色調は、灰褐色、胎土は、角閃石を含んでいる。底部にXのヘラ記号が付いている。236は、

周溝墓１周辺の土層から出土したもので、体部の中程に最大径がある長胴の瓶である。体部外面は、水平方向に叩きを施し、外反する口縁の端部に刻目を付けている。色調は、薄茶灰色　、胎土は、角閃石等の砂粒を少し含んでいる。口径と器高は、19.0㎝、29.0㎝である。周溝墓１から出土した遺物は、墳丘土器棺として使用していた瓶（239）、壺（240）と周溝の中に、杯（237）、壺（238、241）、鉢（242）がある。239は、瓶の体部下半を蓋として使用している。中程で穿孔している。外面はヘラ磨き、内面はナデ調整である。内面に剥離した痕跡が多く遺る。240は、逆卵形の体部に外反する口縁、極端に小さい平底の底部が付き、体部との境目に刻目のある突帯がある。口縁部と体部上半の外面をヘラ磨きをする以外は板ナデかヘラナデ、内面はヘラナデで仕上げている。色調は、灰茶色、胎土は、石英、長石、角閃石を含んでいる。237は、半球形で小さく外反する口縁を持つ杯である。底部近くをヘラ削りしている。238は、二重口縁の底部穿孔した壺である。口縁外面と体部上方に円形浮文があり、前者には２ケ１組を６ケ所、後者は２ケを２ケ所と１ケ３ケ所に張り付けている。体部上方に直線文と波状文が付けられている。体部外面には密なヘラ磨きがあり、内面はハケ目調整が施してある。色調は、茶褐色、胎土は、石英、長石、角閃石、チャートを多量に含んだ生駒西麓産である。241は、横方向に長い楕円形の体部を持ち直立した後外反した口縁を持つ壺である。内外面にハケ目調整を施している。体部下方にハケ目をナデ消した部分が見られる。242は、体部最大径が上部にあり直立した後外反する口縁を持つ鉢である。底部は、平底から丸底に変換する過渡期の土器で土器自体では正位に立たない。調整は、ハケ目と板ナデ調整をしている。色調は、茶褐色、胎土は、石英、長石、角閃石を含む。口径と器高は、24.0㎝、22.5㎝である。243は、外反する口縁部を持つ壺である。調整は、内外面を板ナデを主として使用している。

周溝墓２から出土した遺物は、壺（244）、瓶（245～247）、高杯（248）である。244は、小型壺の口縁部で直立した後に端部が尖り気味のものである。245、246は、外反した口縁の先を上方につまみ上げた瓶である。両者の口縁端部外面に凹線文が施されている。247は、逆卵形の体部に外反する口縁を付け、わずかに痕跡が遺る程度の平底がある。調整は、口縁の内外面はナデ、体部の肩部と底部付近は平行叩き、体部中央部は、ハケ目であり、内面はヘラ削りである。色調は、薄茶灰色、胎土は、石英、長石、金雲母を少し含む。口径と器高は、14.2㎝、16.8㎝である。248は、高杯の杯部である。大きく外反する口縁部を持ち、内外面に密なヘラ磨きを施している。口縁端部外面と段の部分でヘラ削りが見られる。

調査区の１区にある土抗３から多量の弥生時代中期の土器が出土した。壺（249、253～255）、高杯（250、251）、瓶（252）、蓋付鉢（256～259）、水差形土器（260）がある。壺（249）は、口縁外面に簾条文と扇形文、内面受部に竹管文を飾る有段口縁の広口壺である。253は、最大径が体部中央部にあり外反する口縁部を持つ壺である。口縁部外面に波状文と内面に櫛描列点、頸部と体部上半に波状文と直線文、下半にヘラ磨きを用いている。内面下半はハケ目で

ある。体部中央に穿孔がある。色調は、灰黄白色である。254は、体部最大径は中程より少し下方にあり、簾条文とヘラ磨きを多用しているやや大型の壺である。頸部と体部上方に9段の簾条文とその間に凹線文を入れる。色調は、灰茶褐色である。255も同様の壺である。250は、柱状の脚上部から水平方向に大きく屈曲した下部があり、端部がほんの少し摘み上げる。外面は、ヘラ磨きである。251は、杯部に水平縁を持つ高杯で内面突帯は厚く、短く柱状の脚部が付く。内外面にヘラ磨きを付けている。252は、口縁がくの字に短く屈曲して端部外面に凹線を入れ体部は逆卵形の瓶である。外面は、ヘラ磨きで内面は板ナデである。鉢の蓋は、断面が低い台形で口縁が水平にやや伸び端部を摘み上げる。円孔が2つ並び反対側にも対峙している。外面はヘラ磨きで内面は板ナデかナデ調整である。258は、256と対になる鉢で胴部の最大径がかなり下方にある。口縁は、端部で肥厚する。胴部上方は簾条文で下方はヘラ磨きである。口縁部に蓋と同じ位置に2つ2組の円孔があり、紐を通すようになっていた。底部近くで穿孔されている。259は、257と対となり胴部最大径が中央部付近にあり、口縁端部が肥厚している。対峙する2つ並列する円孔がある。体部上部に直線文と波状文、下部にヘラ磨きを施している。内面は、板ナデである。260は、水差である。胴部最大径が下方にあり内湾気味に立ち上がる口縁は端部がわずかに肥厚する。頸部付近に扁平な把手を付ける。口縁から体部の6割ほど簾条文で下方をヘラ磨きしている。内面は板ナデである。

第3節　その他の遺物

その他の遺物として、製塩土器、種子、木製品、小銅鐸が出土した。

製塩土器が古墳時代前期から中期の大溝、住居等から出土した。形態からⅤ分類出来る。

Ⅰ類（261～294）は、コップ形で口縁が直立又は内湾気味に立ち上がり平底状の底部を持つ形態のものである。外面をナデ調整するものと平行叩きをするものがある。胎土は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含む当地域の粘土使用しているものが多い。Ⅱ類（295、296）は、口縁が直立して器高が低く断面方形の形態のものである。色調は、茶灰色、灰茶色であり、胎土は、砂粒を含み他地域産のものであろう。295の表面は荒い面で、296は、平行叩きを施している。Ⅲ類（297、298）は、断面が半円形になる形態である。297は、口径7.4㎝、器高4.3㎝の中型のもので色調は灰白色、胎土は、砂粒を多く含む。298は、口径4.9㎝、器高2.5㎝の小型のものである。色調は、灰黒色、胎土は、砂粒が少し含まれる。Ⅳ類（299）は、脚の付く形態のもので市内から初見のものである。その接合部分だけが遺存している。外面に平行叩きがみられる。器壁が薄く1～2㎜である。色調は、灰茶色、胎土は、精良である。Ⅴ類（300、301）は、破片で器形が不明であるが大きな椀形のものであろう。器壁が6～7㎜と厚く、二次焼成を受けている。内外面に粘土継目の痕跡があり、砂粒を多く含んでいる。301は、外面に

ハケ目が残っている。

各遺構から出土した土器の破片数及び叩きの持つものは、次のとおりである。大溝１、399（全体の割合51.9％）ケ、その内叩きの持つもの57ケ、大溝２、39（5.1％）ケ、６ケ、大溝４、154（20.0％）ケ、18ケ、住居１、17（2.2％）ケ、１ケ、土抗１、６（0.8％）ケ、３ケ、包含層、154（20％）ケ、27ケである。

出土場所は、大溝１（261～277、295、297）、大溝２（278～280、298）、大溝４（281、282、299、300）、住居１（285）、土抗１（296）、以外は、遺物包含層である。

種子は、桃、ウリ科、ブドウ、ヒョウタンと専門分野での鑑定はしていないがタデスゲ、カナムグラ、クスノキ、カシ、シイの種類がある。大部分が大溝４からであるが、その他の遺構は、大溝１、２、ピットがある。大溝４から桃97、ウリ科100、ブドウ４、ヒョウタン６、タデスゲ６、カナムグラ７、クスノキ１、不明44である。大溝２から桃16、カシシイ１、不明１である。大溝１桃１、ピットから桃１である。

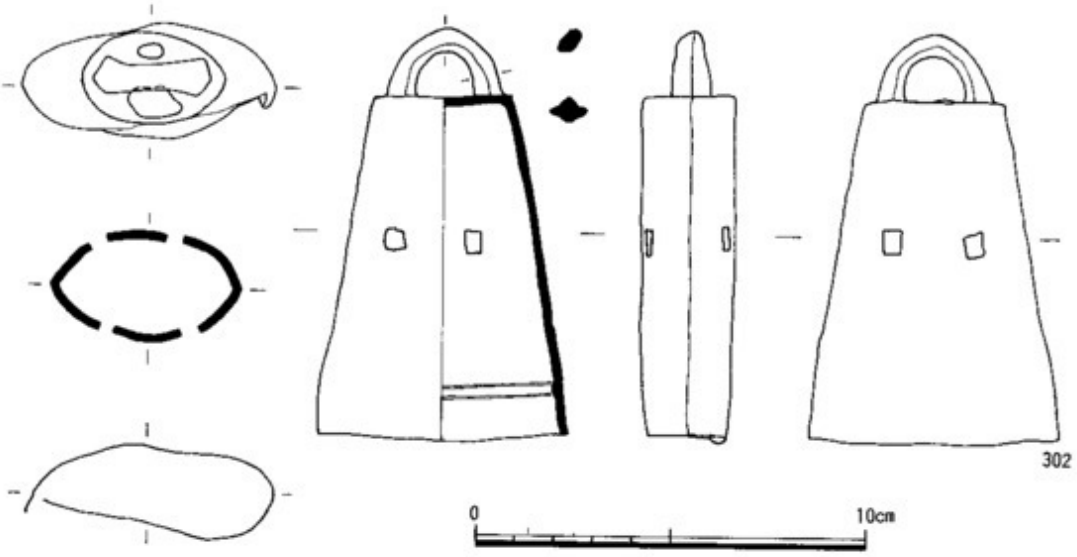
木製品が大溝２から出土した。種類は、案の上板、ヘラ状木製品、人工的に加工されたその他用途木製品の部分材、堰に使用された杭がある。

案は、一部が欠損しているが復元出来る上板である。縦木取りの柾目である。長さ104.2㎝、幅33.3㎝、厚さ0.3～1.6㎝である。裏面には両端部から15.5～18㎝の場所に２～2.2㎝幅の板脚を組み込む臍穴が空けられている。また、臍穴から約2.5㎝外側の位置から薄く抉るように削られている。表面の調整は、手斧で削っている。その他の用途不明木製品として、長さ52.5㎝、幅4.7㎝、厚さ５～８㎜の縦木取りの板目材がある。規則的に並べた無数の孔がある。また、紐穴のようなところが３ケ所で空けられている。杭は、大溝４に137本の杭があり、特に堰の部分で106本があった。また、横方向に置いた板材や自然木も幾つかある。堰の部分での杭は、板材や角材を転用してもの36本、自然木の枝を使用したもの45本、先端を尖らせていたものが44本あり、全体に焼成したものが14本あった。遺存していた杭の中で最も長いものは、113㎝で、50㎝以上のものが32本あった。

小銅鐸は、溝12から出土した。青銅製の端部が押圧によって少し割れがあるがほぼ完形で側縁に鰭がなく、身は無模様である精巧な作りの製品である。

小銅鐸（302）は、総高10.5㎝、鐸身部高8.7㎝、鈕高1.8㎝、重量149.2ｇを測る。

鈕は、断面菱形の菱環状を呈し、取付け部で0.75～0.95㎝、中程で0.6㎝である。鈕内面の吊り下げ部付近は、菱形の稜がほとんど見られずよく使用されたと考えられる。鈕と身の接合部分は、身上部の舞の端部から中程へ３～４㎜入ったところから取付けられており、今宿五郎江小銅鐸と同様である。身の長径部は、上方3.6㎝、下方6.2㎝（復元値）で約９°の広がりを持ち、側縁はほぼ直線的に伸びている。短径部は、上方2.4㎝、下方2.9㎝（復元値）とわずかな裾広がりである。長側縁は、丸み帯びた稜を持ち同一方向に磨いた痕跡があり、製作時に整



図－6　　小銅鐸実測図

形のため調整を行ったものであろう。磨いた痕跡は、片方が顕著に遺るが他方はわからない。舞の部分に大小２ツの楕円形孔と身の両面部分に縦６㎜、横４～５㎜方形の２孔の型持孔がある。孔間の幅は、1.6㎝、下端底部からの位置は、4.7～4.8㎝を測り中心部に近い場所にある。身の壁の厚さは、ほぼ均一で約２㎜を測る。内面突帯は、底部から約１cm上方の位置にあり、幅３㎜、高さ１㎜位で全周囲回っている。舌によって鳴らされたと考えられ中央部の突帯がよく磨耗して低く高さ0.5㎜くらいになっている。色調は、赤茶褐色である。

小銅鐸の地名表では、常松幹雄氏と種定淳介氏、中井貞夫氏の地名表を主に参考にさせて頂き柏原市立歴史資料館竹下賢氏にも教授をうけた。

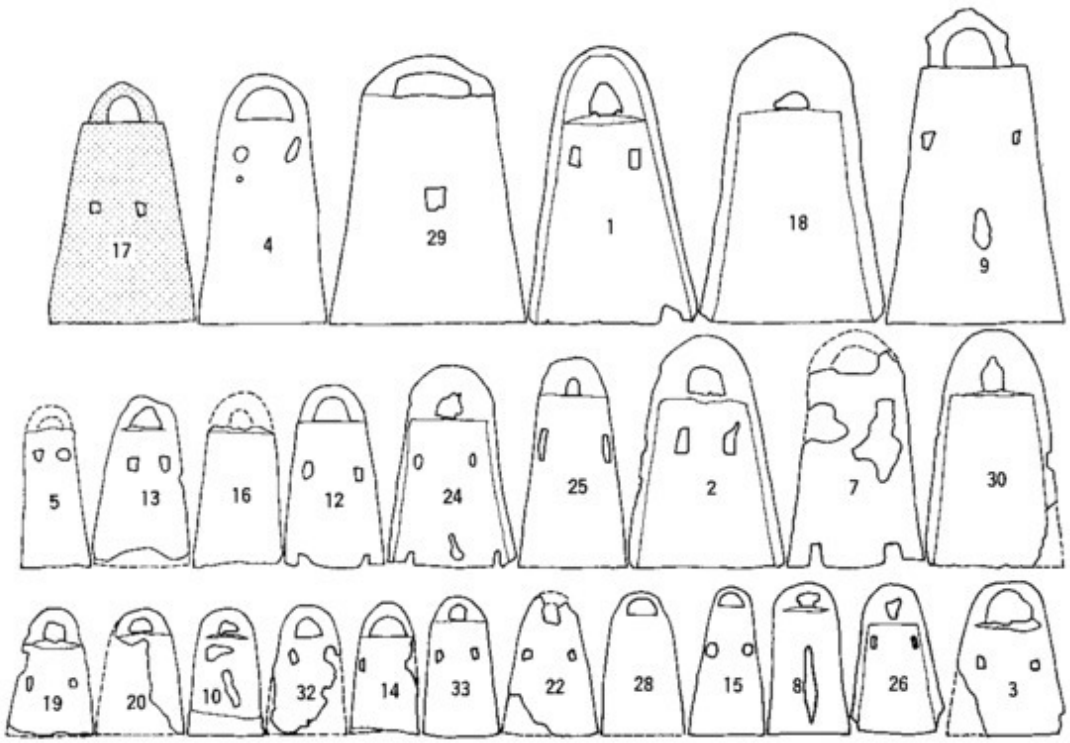
第4章　まとめ

第1節　遺構について

これまでの調査例を考慮すると、本郷遺跡の東側から北側にかけての場所には縄文時代から歴史時代までの遺構と遺物が点在しており、今回の調査地は、本郷遺跡の中心から少し離れた集落の縁辺部あたりと思われる。

検出した遺構は、弥生時代の中期の土抗3、後期の方形周溝墓1、2、後期の溝7～13とピット群がある。土抗3は、集落に関連した土抗である。周溝墓は、大溝3、4の間に2ツが同一溝を共有して検出した。主体部が土器棺だけで時期が明確でないが溝埋土から出土した土器から後期から古墳時代前期にかかるものである。さらに南東方向、北西方向に周溝墓群がつづく可能性があろう。調査区南側から溝を7条検出した。大溝4の方向に伸びており、配水用の溝であろう。古墳時代になると大溝4がこれらの溝の用途を代替えしたと考えられる。溝の時期は、後期であるが僅かに古墳時代前期の土器が出土した溝もある。調査区北側のピット群は、後期の集落に係わるものである。

古墳時代前期から中期にかけての大溝1～4、溝1～6、住居1～4、土抗1、2がある。大溝1、2は、集落の直ぐ近くに隣接する大きく屈曲して流れる大溝である。大溝1は、調査区の北東部に検出し、円弧状に回り両端部が調査区外に伸びている。埋土上層には集落の縁辺部であろう証拠に多量の土器が廃棄されたように落ち込んでいた。下層に砂層があり水の流れのあった大溝である。時期は、上下層から須恵器の出土があり、中期より古くはならない。大溝2も同様の性格の大溝で集落の近くに導入した人工的に掘削された可能性もある。最北部のテラス状の段も水汲み場だろう。遺物は、量が多くないが完形に近い土器が各土層から、前期から中期までのものが出土した。洪水があったらしく自然木も多く出土している。大溝3、4は、南東から北西方向にほぼ真っすぐ伸び、溝断面は逆台形である。人工的に掘られた運河であろう。大溝4は、堰が検出され南西方向への配水目的としている。これらの大溝は、生活用の水利用、古大和川の氾濫や洪水の防御、水田農耕の配水、他集団からの攻撃を防御する等の目的用途が認められ、集落を囲む環濠の可能性もあろう。性格を明らかにするには、これらの大溝が調査区外へどのような方向に向いているのか集落の発展期が古墳時代前期から中期に集中していることが証明されなければならない。今後の調査が期待される。そのまま遺跡の縮図としていいのか重要な問題である。住居は、大溝が稼働している頃の方形の竪穴住居である。調査区の北側に3ツの住居があり、大溝にきられた住居もあるが弥生時代の住居が見つかっておらずさらに北側にその集落の続きがどのような配置にあるのか今後に期待したい。住居4は、他の住居とかけ離れた場所にあり、配水の管理などをした特別な住居であろうか。



図－７　小銅鐸の規模比較図

第２節　遺物について

遺物は、弥生時代中期の土器群と後期の土器が出土した。中期の土器は、第３様式から第４様式の時期で一括性のある土抗から出土している。後期の土器は、大溝２、３、４から少量と下層遺構の溝７～13、方形周溝墓１、２等から出土した。第Ⅴ様式でも後半にあたる一群で底部の平底が消滅する前後である。当地域の特徴的な胎土の遺物群である。古墳時代は、前期から中期にかけての土師器、須恵器が出土した。溝の性格上限定出来ないが大溝２から時期変遷が追える遺物が多く出土しており、河内地方の土器変遷に貴重な資料である。

今回の調査で特異な遺物に小銅鐸がある。この遺物は、弥生時代の青銅器であって全国から33例目で、大阪府下から２例目の希少価値のある遺物であり、本郷遺跡の性格を知るための重要な指標となる貴重な遺物である。名称については、これまで統一的なものがなくその系譜から朝鮮式小銅鐸と日本式小型銅鐸、形状から銅鐸と区別するため小銅鐸に大別されている。しかし、小銅鐸との名称は、一般に普遍化しつつある。所有形態は、１．集落単位の所有　２．有力家族の所有　３．個人所有の問題があり、また、用途として、１．農耕祭司　２．葬送祭司　３．指導者の象徴としての使用が考えられている。

この小銅鐸について問題点を述べ今後の指標としたい。

本郷小銅鐸は、銅鐸の編年では菱環鈕式の最古形式のものである。無文で総高10.5cmを測り、33例中７番目の大きさである。鈕内面と身内面突帯に磨耗がよく観察され、吊り下げて鳴らされていたことが伺える。鈕の取付け部が今宿五郎江小銅鐸と同様の舞内側から突出している。身の型持孔は、正裏面各２ケの孔が中央部やや上方にあり、古相を示している。小銅鐸は、溝12に廃棄されたもので埋納したような状態は見られなかった。時期は、溝12の埋没の最終時期である。溝埋土中の遺物が少ないことから限定できないが弥生時代後期を示している。また、関連する周辺の遺構から推定するならば、溝７～13から出土した土器が弥生時代第五様式から古墳時代前期の庄内期までの範囲に含まれるので少なくともこの時期範囲を離れることは考え難い。

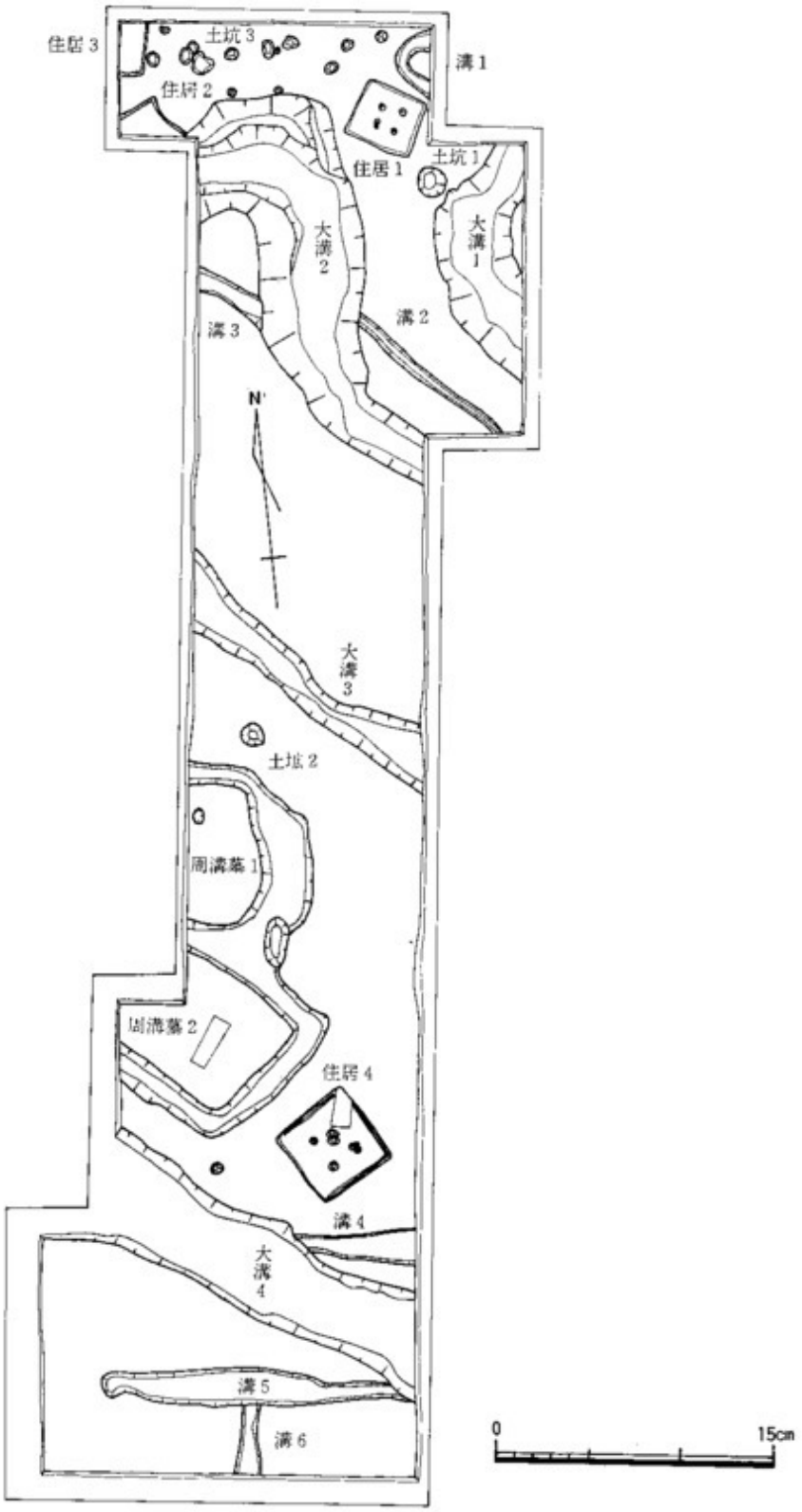
今回発掘調査で小銅鐸が出土したことから形態や出土状態が完形で明らかである。銅鐸が使用された畿内圏の中心部からの新たな資料の提供であり、上記の問題が解決する１ツの契機となろう。今後はさらに本郷遺跡の性格を明らかにするべき調査に専念したい。

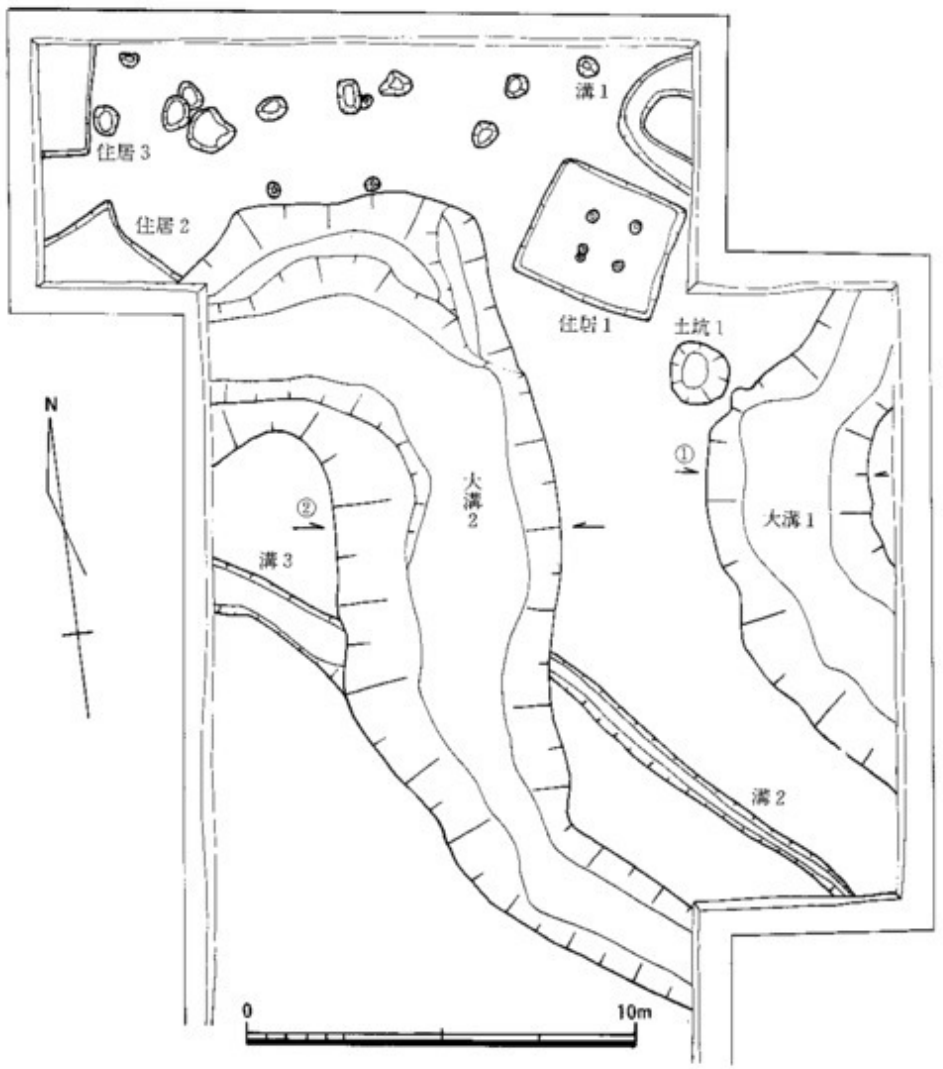
図－８　小銅鐸出土地名表

No	遺跡	所在地	総高(cm)	鰭	内凸	舞孔	身孔	横様	出土状況	時期	備考
1	川焼台Ⅰ	千葉県市原市草刈字川焼台	12.3	○	×	○	○	綾杉文隆起線文横目文	住居	終末～古前	朱を施す
2	川焼台Ⅱ	千葉県市原市草刈字川焼台	9.9	○	×	○	○	隆起線文	住居	古前	
3	天神台	千葉県市原市大字村上字天神台	6.8	×	×	○	○		住居	古前	
4	文脇	千葉県君津郡袖ケ浦町	10.8	×	×	○	○		木棺墓	後期	
5	草刈	千葉県市原市草刈字川焼台	5.9+α	×	×	○	○		住居	古前	
6	八木	千葉県君津市大井戸	9.0	×	×	○	○		土抗墓	後期	管ガラス切子玉
7	大南	福岡県春日市大字小倉字大南	9.0+α	×	○	○	○	4区袈裟襷文	溝	後期	
8	浦志	福岡県糸島郡前原町浦志	6.6	×	○	○	－		溝	後期～終末	舌共伴
9	五郎江	福岡県福岡市西区今宿五郎江	13.5	×	×	○	○		溝	後期前半	
10	原田	福岡県嘉穂郡嘉穂町	5.5	×	×	○	○	斜格子文	木棺墓	中期下限	舌共伴
11	板付	福岡県福岡市博多区板付2丁目	7.6	×	×	○	○		土抗	後期	
12	岡峯	静岡県富士市東井川出間峯	7.9	×	×	○	○		－	－	弥生土器散布
13	愛野向山	静岡県袋井市愛野向山	7.5+α	×	×	○	○		尾根溝	後期	銅鐸共伴
14	陣ケ沢	沢静岡県富士市船津陣ケ沢	5.7	×	×	○	○		古墳石室	－	
15	石東	静岡県静岡市富士見台1丁	6.4	×	×	○	○		表面採集	中～後期?	
16	寛弘寺	大阪府南河内郡河南町寛弘寺	6.1+α	×	○	○	○		住居	後期	
17	本郷	大阪府柏原市本郷	10.5	×	○	○	○		溝	後期	
18	志郡	滋賀県草津市志那町	12.7	○	×	○	○	4区袈裟襷文複合鋸歯文	－	－	
19	松原湖内	滋賀県彦根市松原町	5.4	×	×	○	○		包含層	後期	銅鐸
20	草山	三重県松阪市久保町字草山	5.4+α	×	×	○	○		奈良溝	後期	銅鐸
21	白浜貝塚	三重県鳥羽市浦村町字白浜	12	○	×	○	○	鰭耳３個	集落	後期	
22	高篠	兵庫県三木市細川町高篠	6.0	×	○	○	○		平安溝	－	
23		兵庫県		×	×	○	○				
24	長瀬高浜	鳥取県東伯郡羽合町8	8.8	○	○	○	○	連続渦巻文	住居	古前	石舌銅鐸銅鏡
25	北山東郷	鳥取県東伯郡東郷町北福字北山	9.3	×	×	○	○		丘陵斜面	－	埋納の可能性
26	下市瀬	岡山県真庭郡落合町大字下市瀬	6.6	○	×	○	○		井戸の側	後期～末	
27	矢部南向	岡山県倉敷市矢部足守川	6.4	×	×	○	○		住居	後期後半	
28	多武尾	大分県大分市横尾字南城	5.5+α	×	×	○	－		溝	後期	
29	別府	大分県字佐市大字別府字桜	11.6	×	×	○	○		竪穴住居	後期後半	
30	田間	栃木県小山市田間小字西裏	10.3	○	×	○	○	降帯文	表面採集	－	
31	本郷	神奈川県海老名市本郷2274	8.2+α	×	×	－	○		住居	古前	
32	余野	愛知県丹羽郡大口町余野	5.6+α	×	○	○	○		－	後期	
33	江原	徳島県美島郡脇町字江原	6.1	×	×	○	○		－	－	

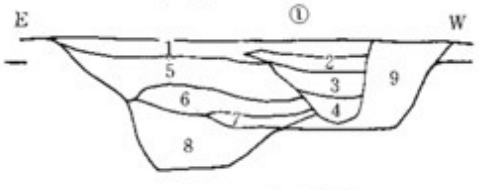
図　　版

図版一　遺構全体図


住居3
土坑3
溝1
住居2
住居1
土坑1
大溝2
大溝1
溝3
溝2
N
大溝3
土坑2
周溝墓1
周溝墓2
住居4
溝4
大溝4
溝5
溝6
0
15cm



大溝1土層断面図

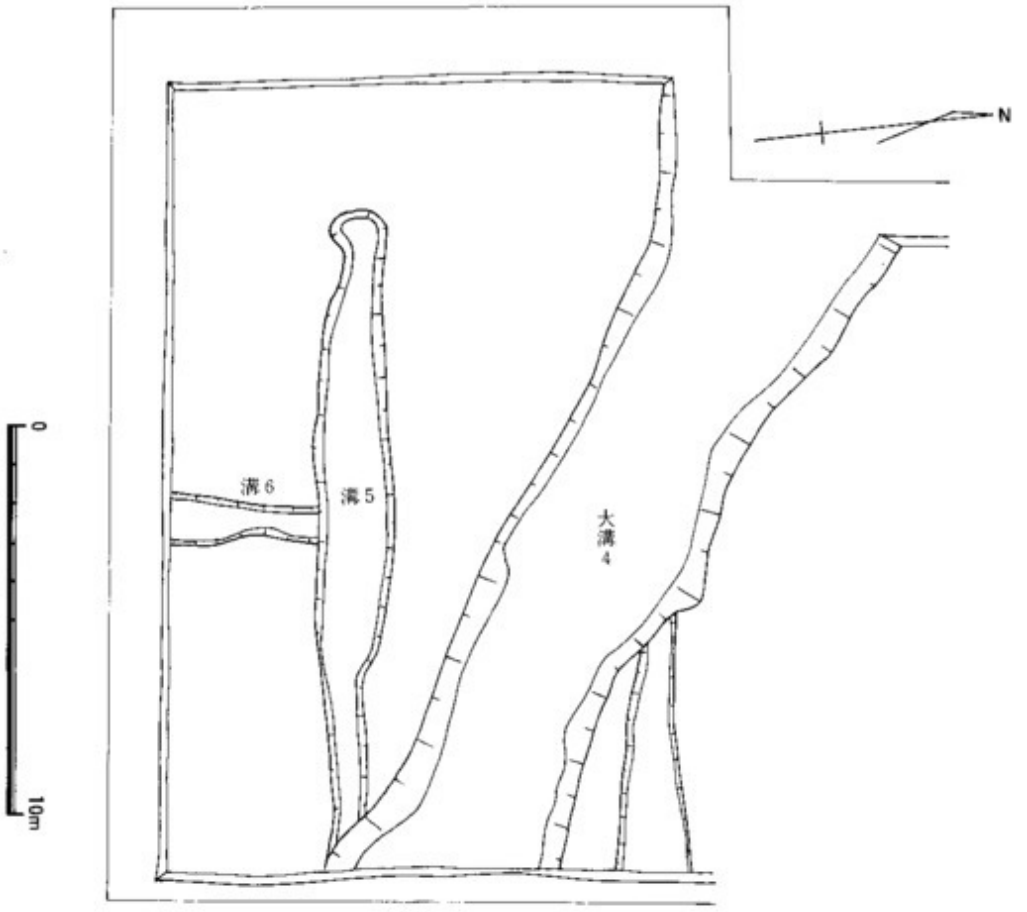


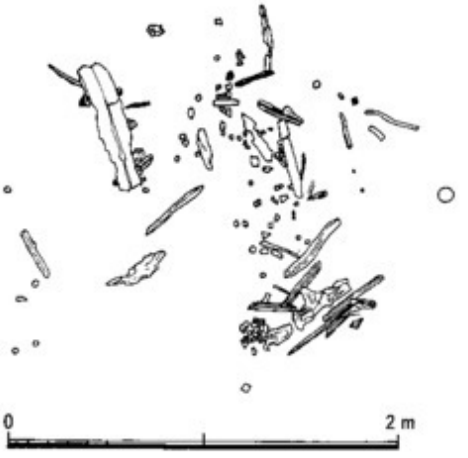
1.暗茶褐色粘質土
2.茶褐色粘質土
3.灰茶色砂質土
4.茶灰色粘質土
5.灰褐色砂質土
6.灰青色粘質土
7.青灰色砂土
8.青灰色砂土と暗茶褐色粘質土
9.灰褐色シルト

大溝2土層断面図

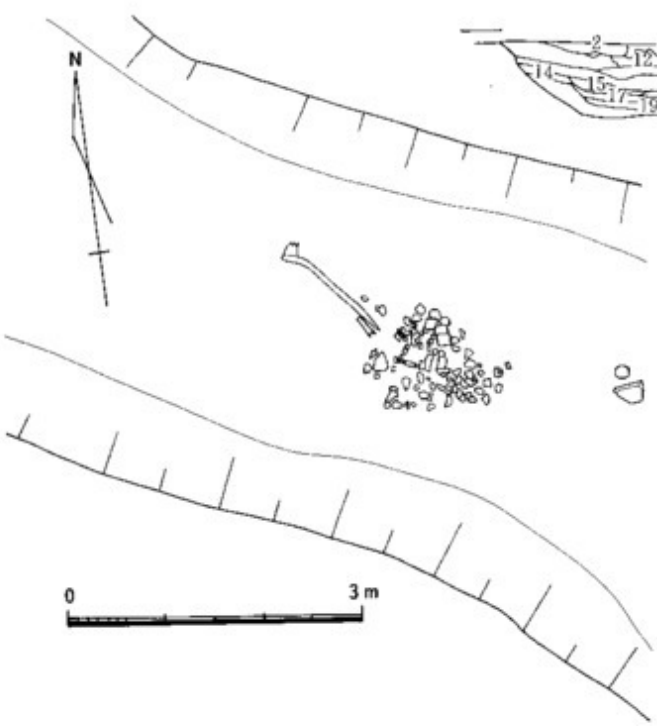
1.暗灰褐色砂質土
2.暗灰茶色粘質土
3.暗灰褐色粘質土と茶灰色砂土
4.暗灰褐色砂質土
5.黄緑灰色シルト
6.灰褐色砂質土
7.薄茶灰色シルト
8.青灰色粘質土
9.灰白色シルト
10.灰茶色砂土
11.茶灰色粘質土
12.灰褐色シルト
13.暗茶褐色粘質土
14.茶灰色砂土
15.茶褐色粘質土
16.黄茶灰色砂土
17.灰褐色シルト
18.灰黄色砂質土
19.緑灰色粘質土

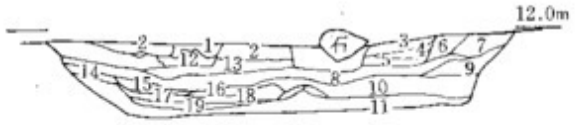
図版三　大溝四その一



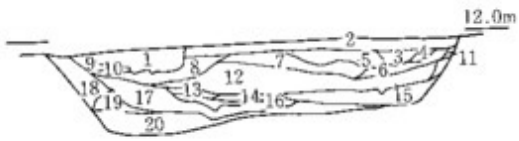


図版四　大溝四その二

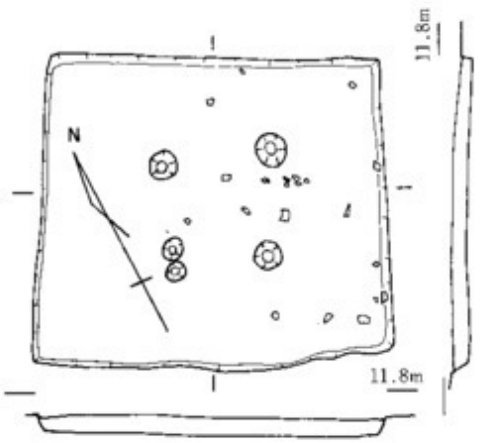




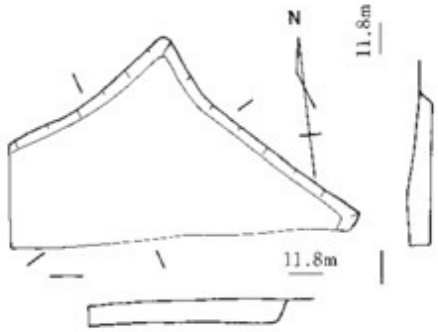
1.灰白色砂土
2.薄茶灰青色粘質土
3.青灰色粘質土
4.暗青灰色粘質土
5.灰茶色粘質土
6.薄茶灰青色粘質土
7.茶灰色粘質土
8.暗灰褐色粘質土と灰色砂土
9.青灰色砂質土
10.暗灰褐色と青灰色シルト
11.緑灰色粘土
12.茶灰褐色粘質土
13.暗灰褐色砂質土
14.茶灰色粘質土
15.黒灰色粘質土
16.灰茶色砂質土
17.灰白色砂土
18.暗灰褐色粘質土
灰茶色砂土
19.灰褐色砂質土



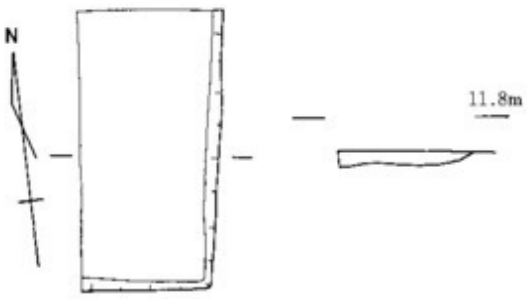
1.灰白色砂土
2.灰青色粘質土
3.青灰色砂土　粘土
4.灰青色砂質土
5.薄茶灰青色粘質土
6.青灰褐色粘質土
7.茶灰青色砂質土
8.薄茶灰青色粘質土
9.青灰色粘質土
10.灰茶色粘質土
11.青灰色粘質土
12.暗灰褐色粘質土と灰
13.青灰色粘土
14.灰色砂土
15.暗青灰色粘質土
16.暗灰褐色粘質土
17.暗灰褐色粘質土と灰
18.青灰色粘質土
19.灰褐色粘質土
20.濃茶灰色砂質土



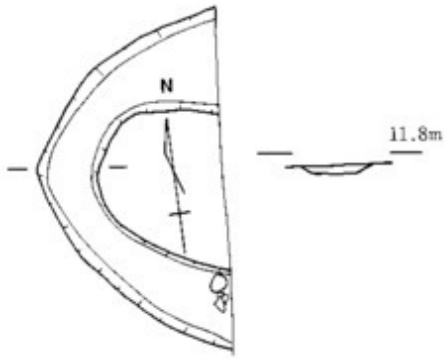
住居1



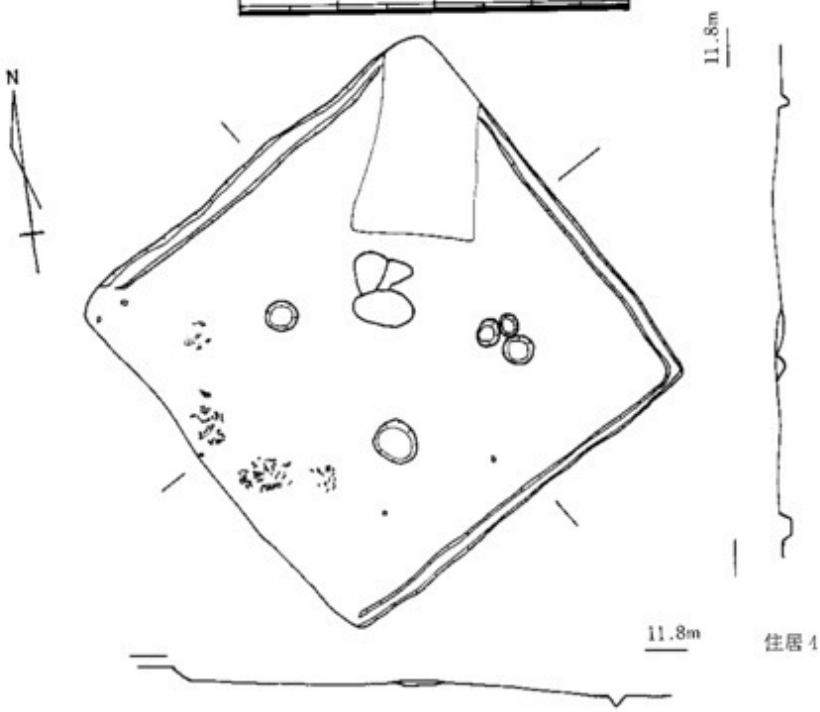
住居2



住居3

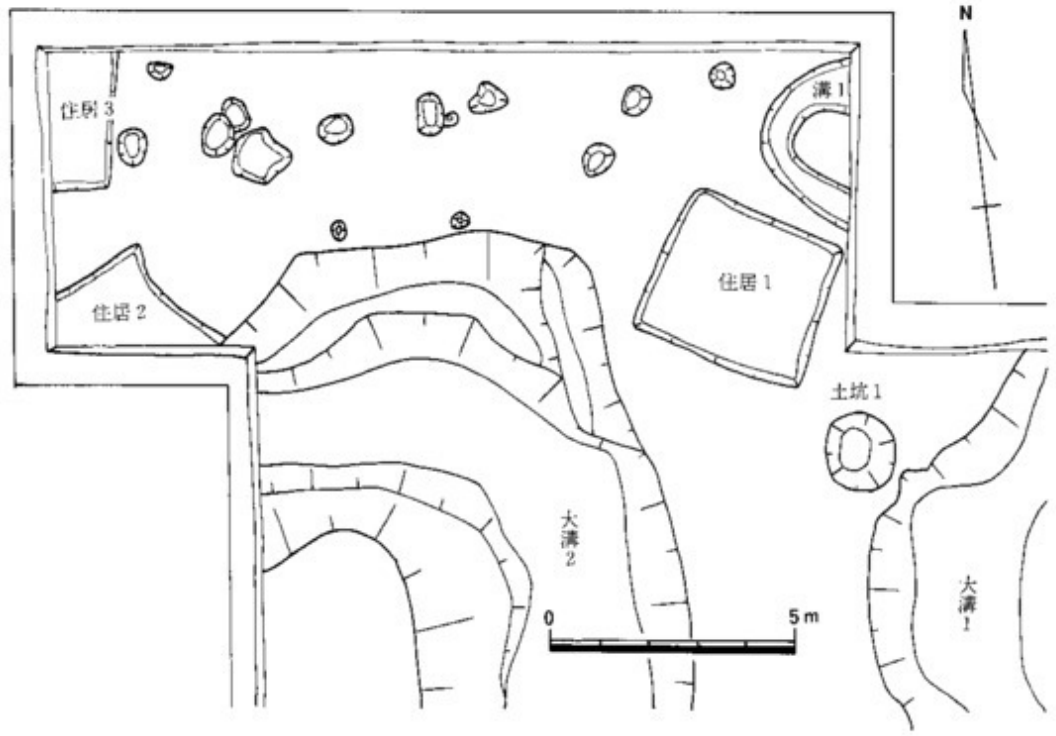


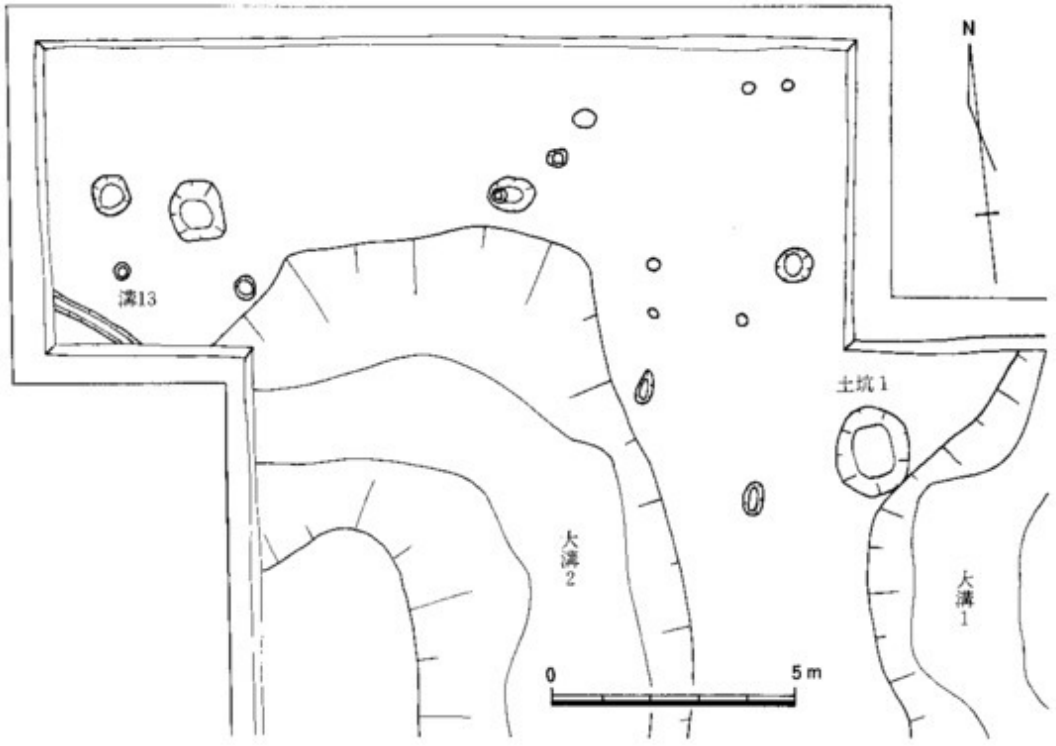
溝1

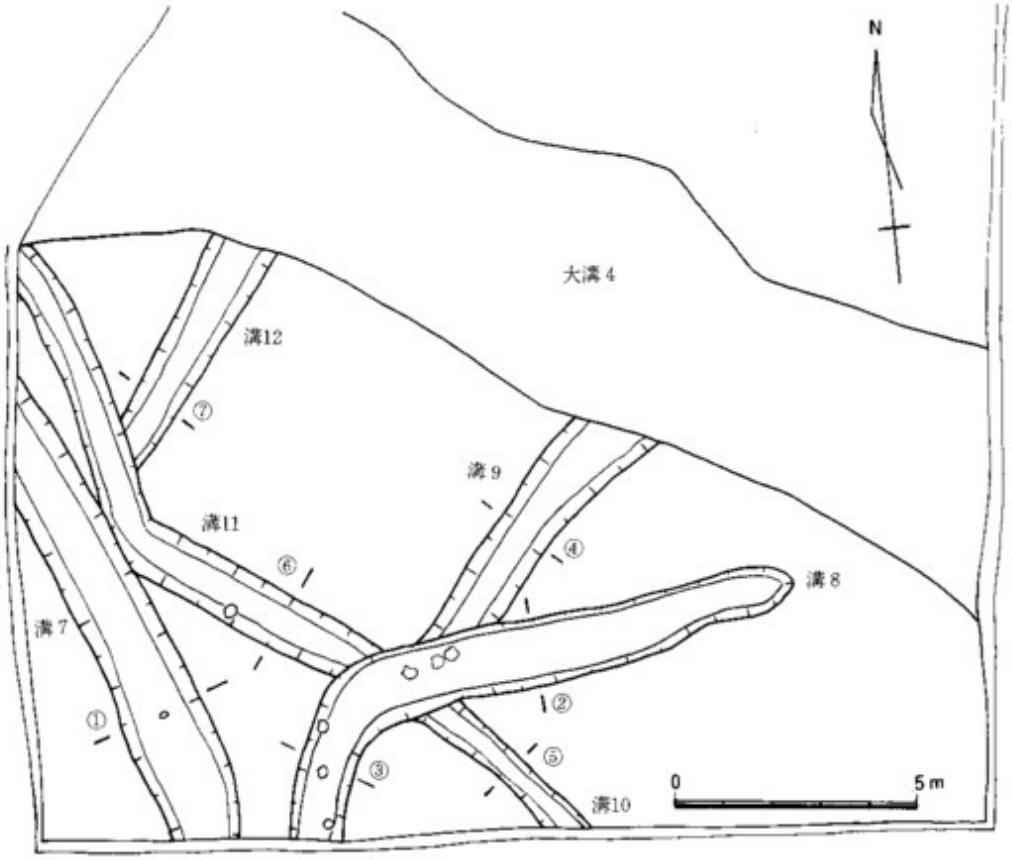


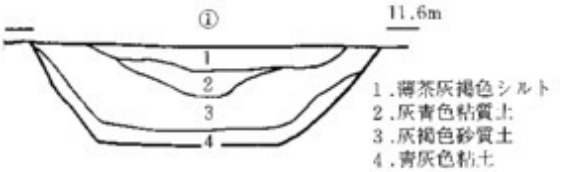
住居4

図版六　調査区北側上層遺構と下層遺構









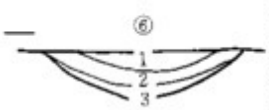
1．薄茶灰褐色シルト
2．灰青色粘質土
3．灰褐色砂質土
4．青灰色粘土

1．薄茶灰褐色粘質土
2．灰青色粘質土

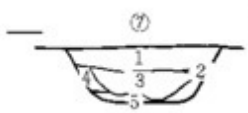
1．暗灰褐色粘質土
2．青灰色粘質土

1．暗灰褐色粘質土
2．青灰色粘質土

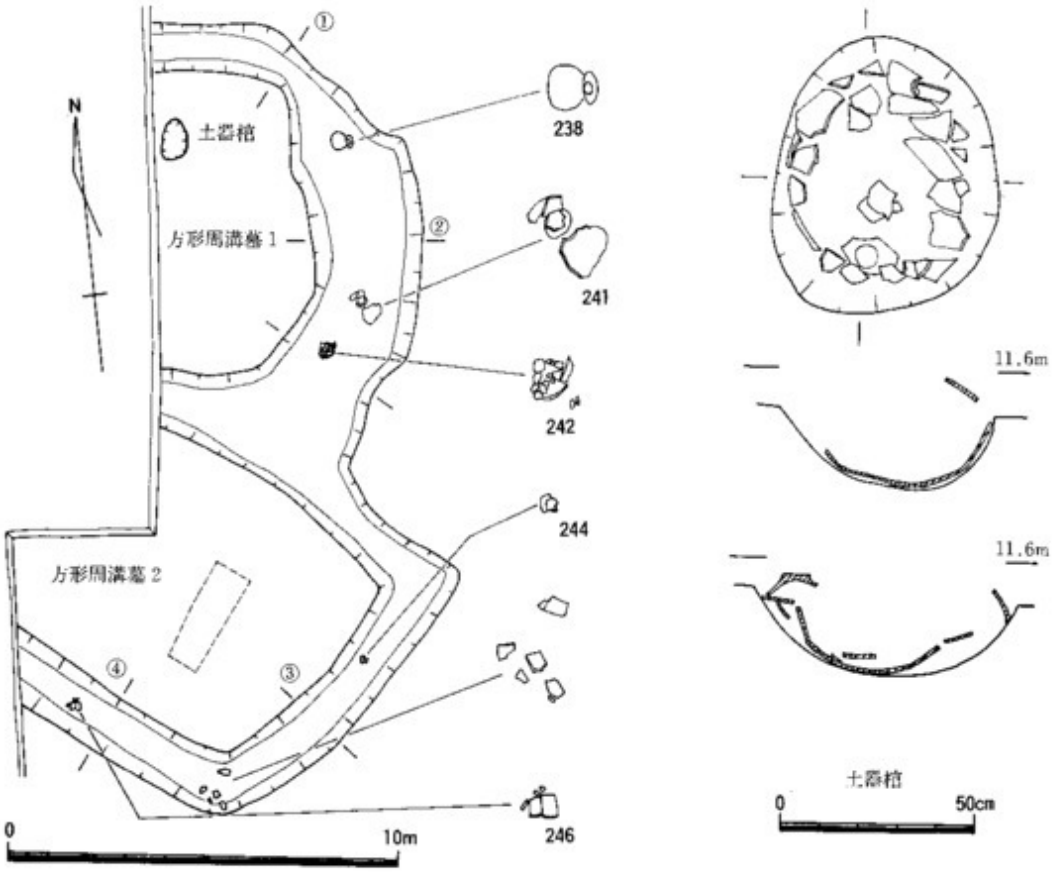
1．薄茶灰褐色粘質土
2．灰青色粘質土

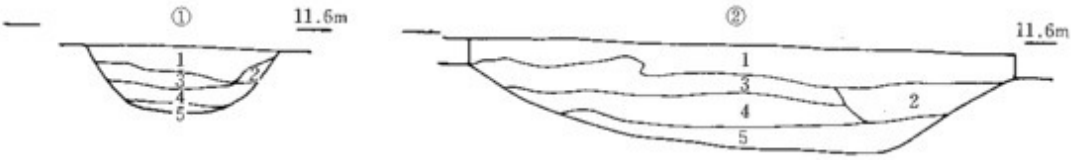


1．薄茶灰青色シルト
2．暗灰褐色粘質土
3．黄緑灰色粘質土



1．薄茶灰褐色粘質土
2．灰青色砂土
3．暗青灰色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．緑青灰色粘質土





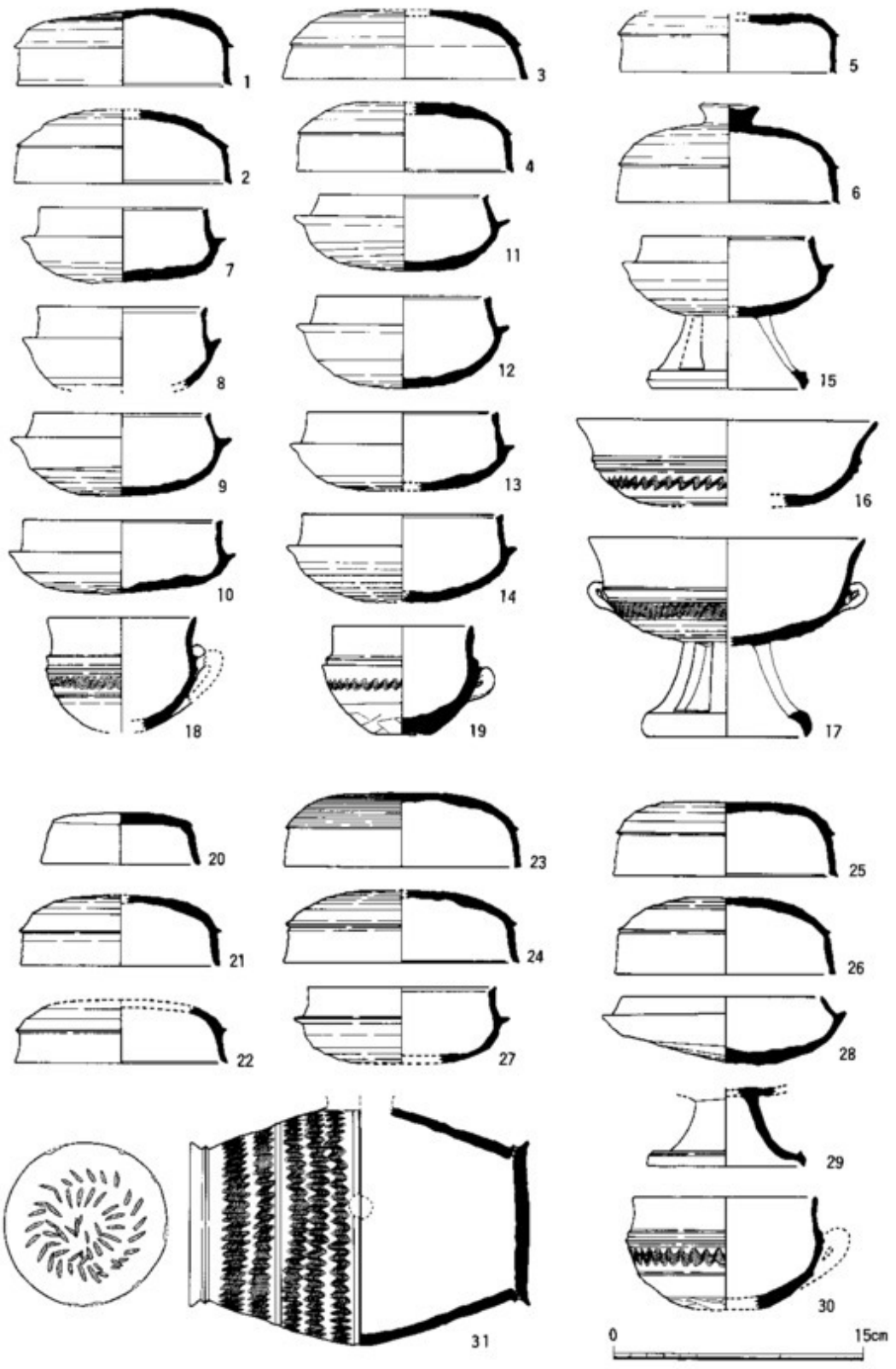
1．薄茶灰青色砂質土
2．灰青色粘質土
3．青灰色粘質土
4．青灰色シルト
5．灰青褐色砂質土

1．黄灰褐色粘質土
2．灰黄色粘質土
3．青灰色粘質土
4．青灰色シルト
5．青灰色砂質土

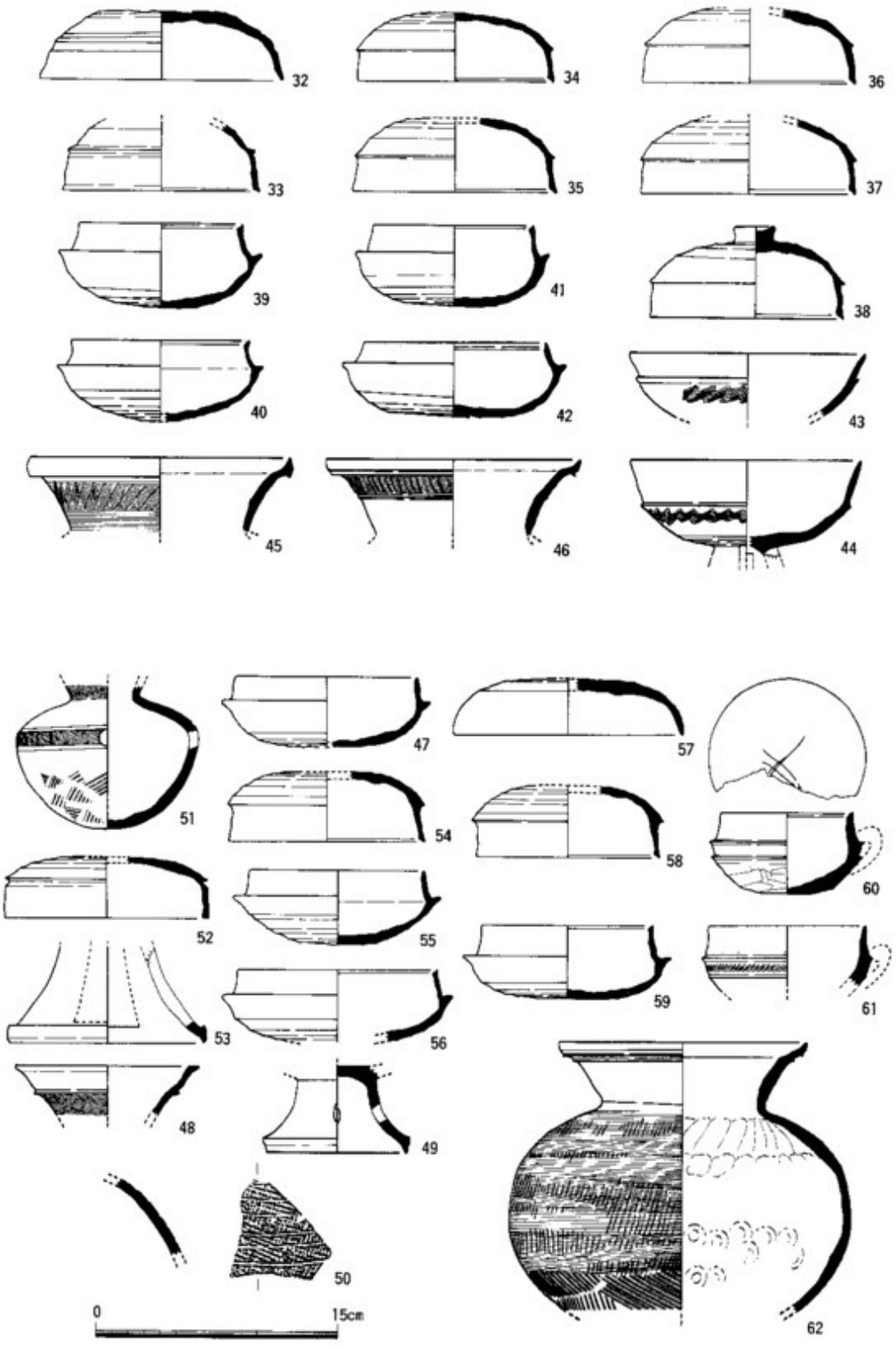
1．薄茶灰青色シルト
2．黄灰緑色シルト
3．灰黄色粘質土
4．灰青色粘土
5．灰青色粘質土

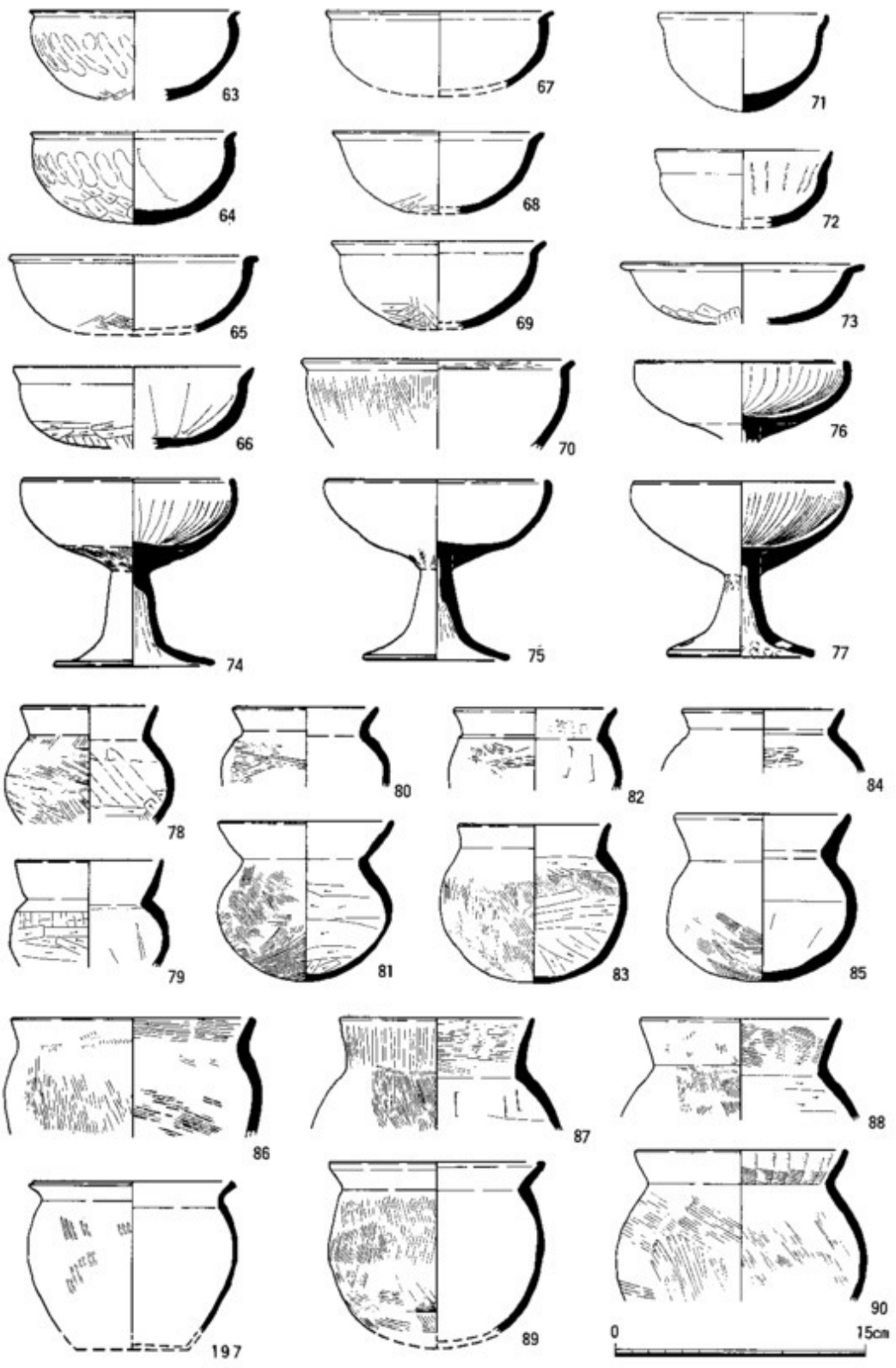
1．薄茶灰青色シルト
2．灰黄色粘質土
3．灰青色粘土
4．灰青色粘質土

図版九　大溝一・二出土須恵器

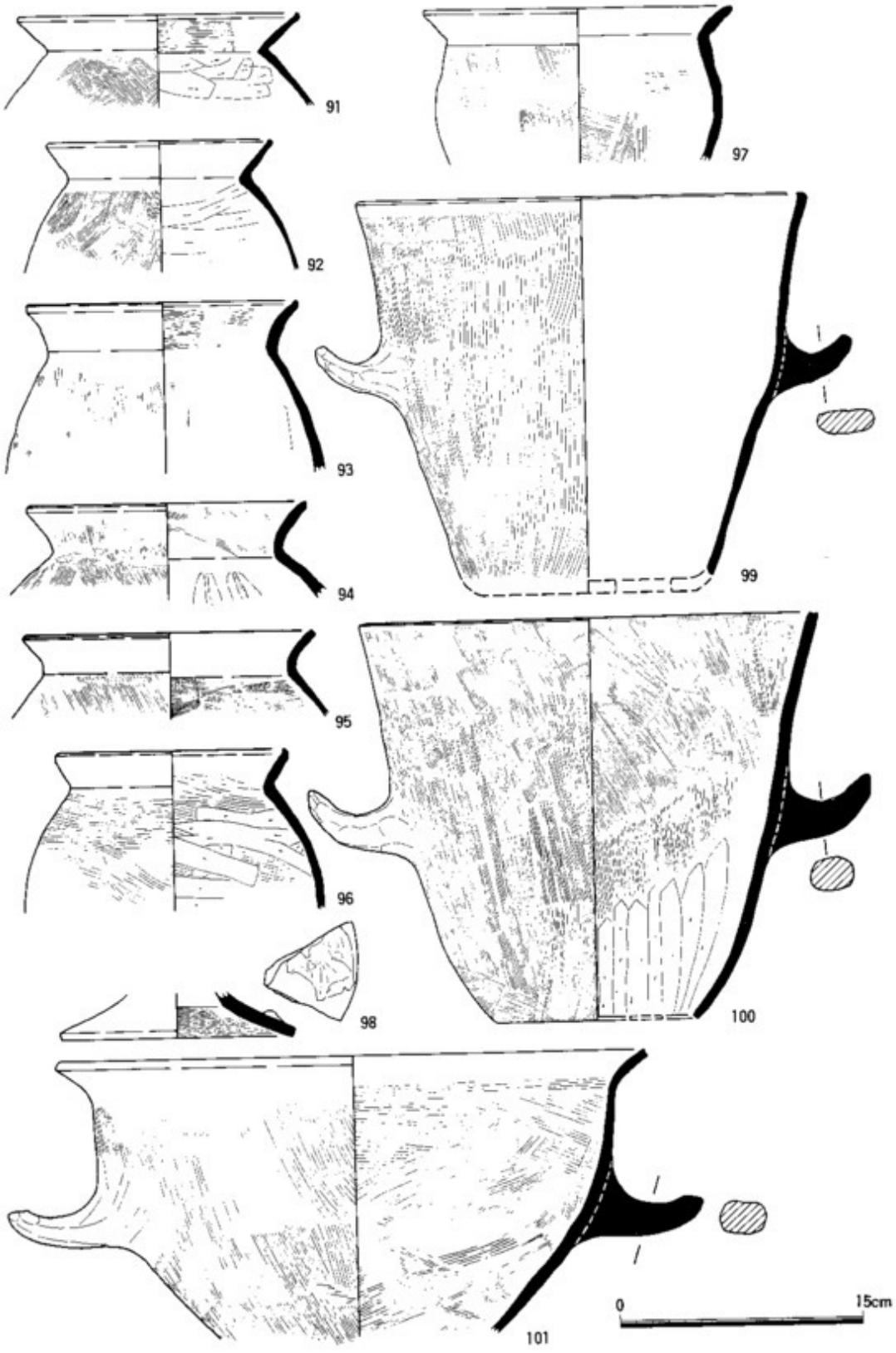


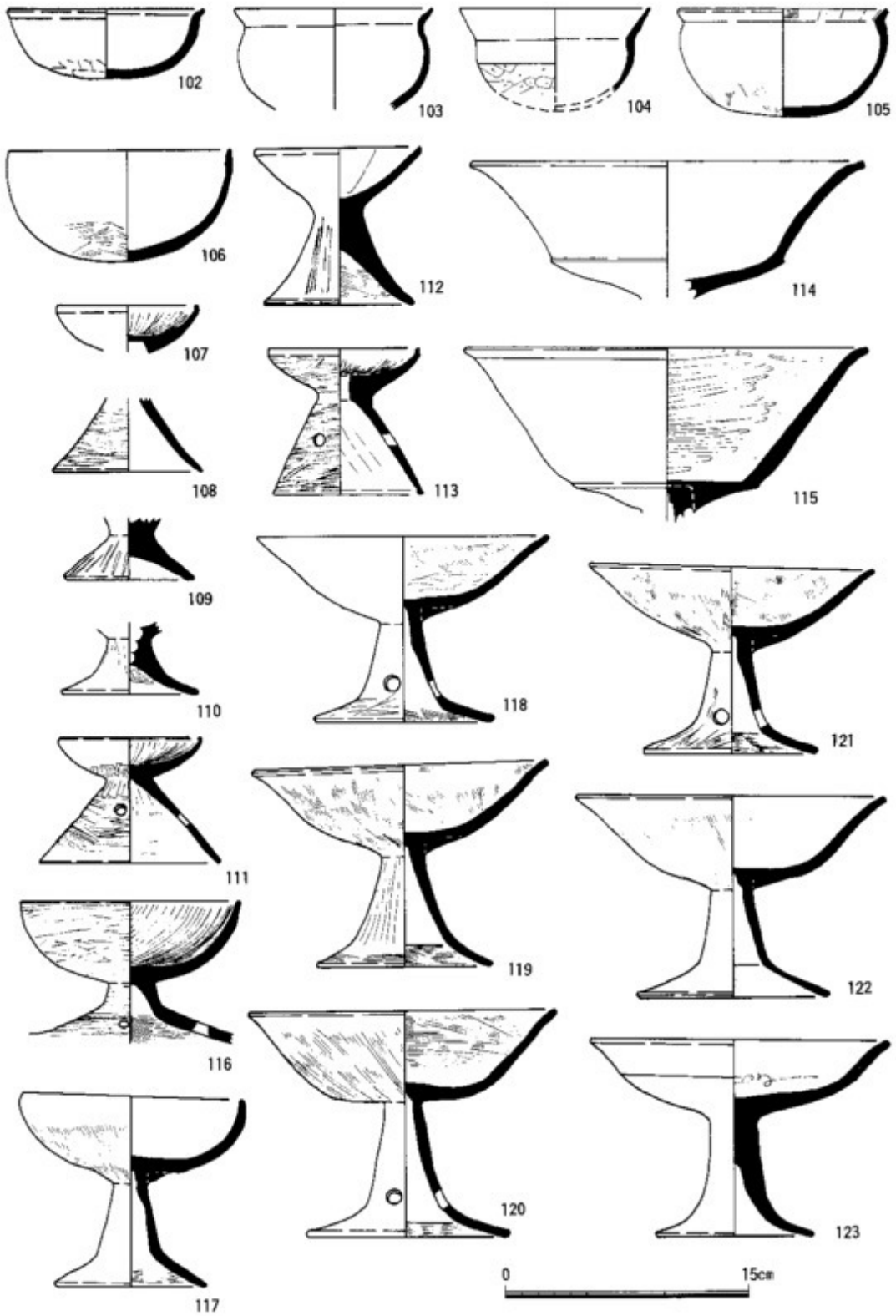
図版十　大溝四・その他の遺構等出土須恵器



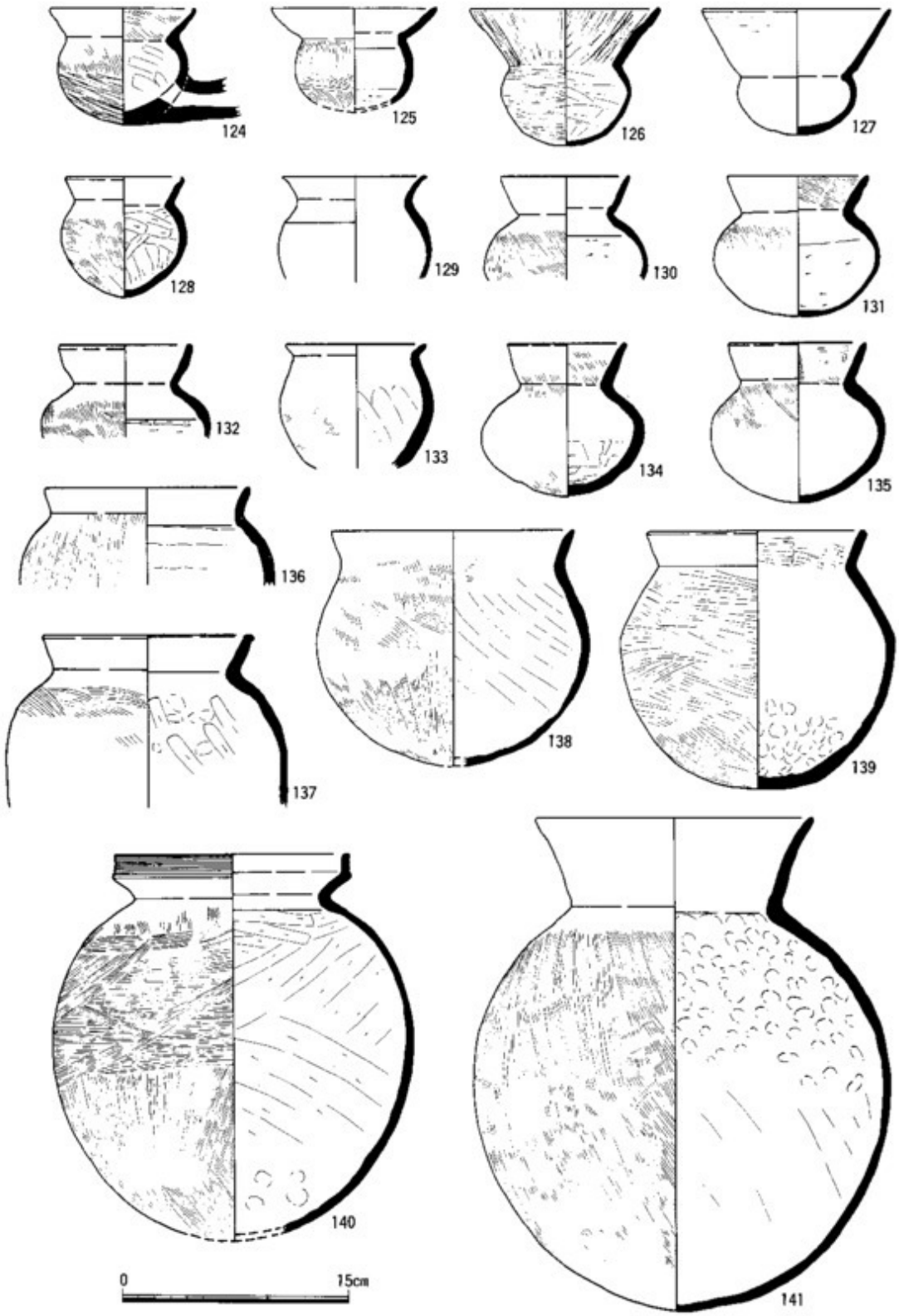

63
67
71
64
68
72
65
69
73
66
70
76
74
75
77
78
80
82
84
79
81
83
85
86
87
88
197
89
90
0
15cm

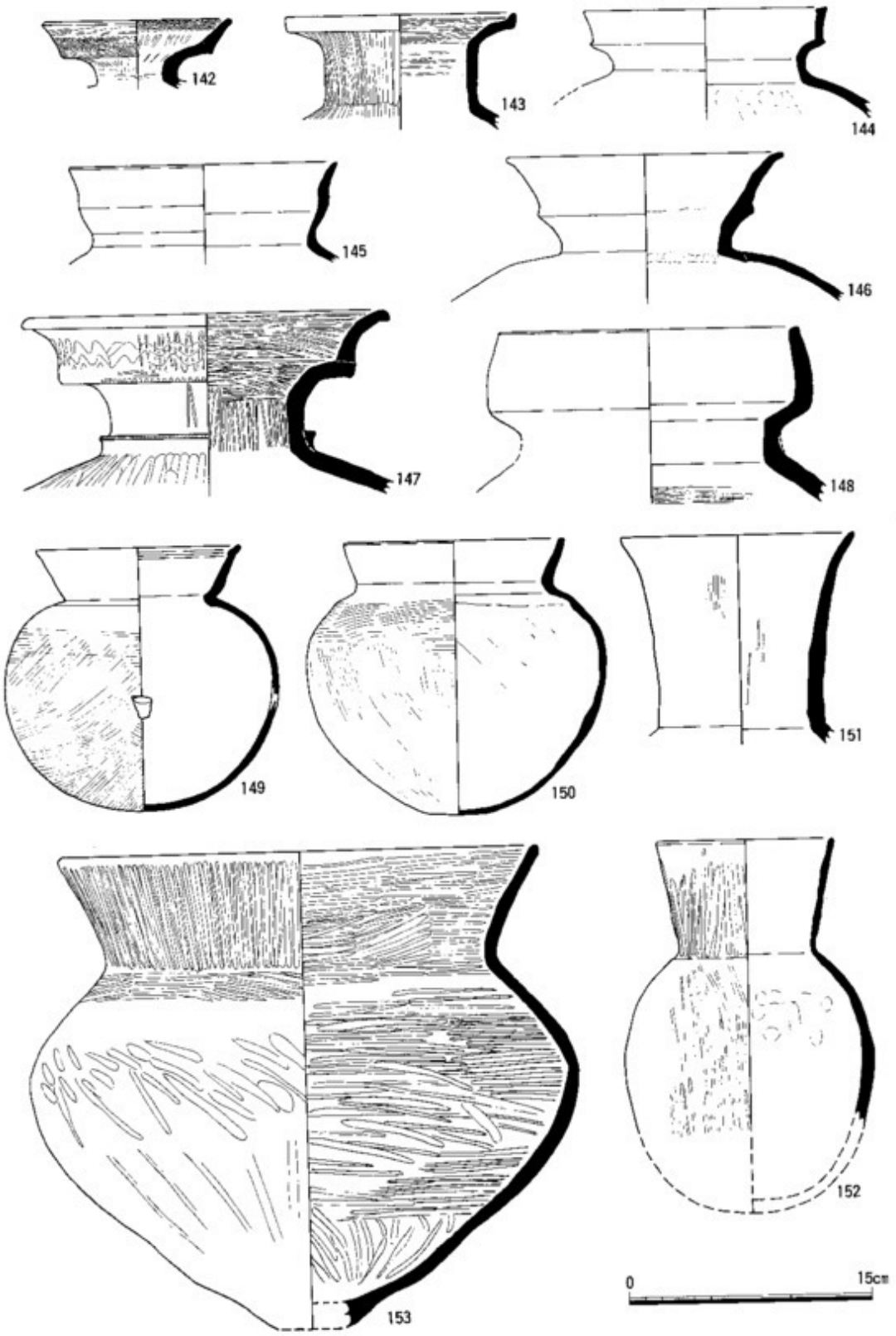
図版十二　大溝一出土土師器その二



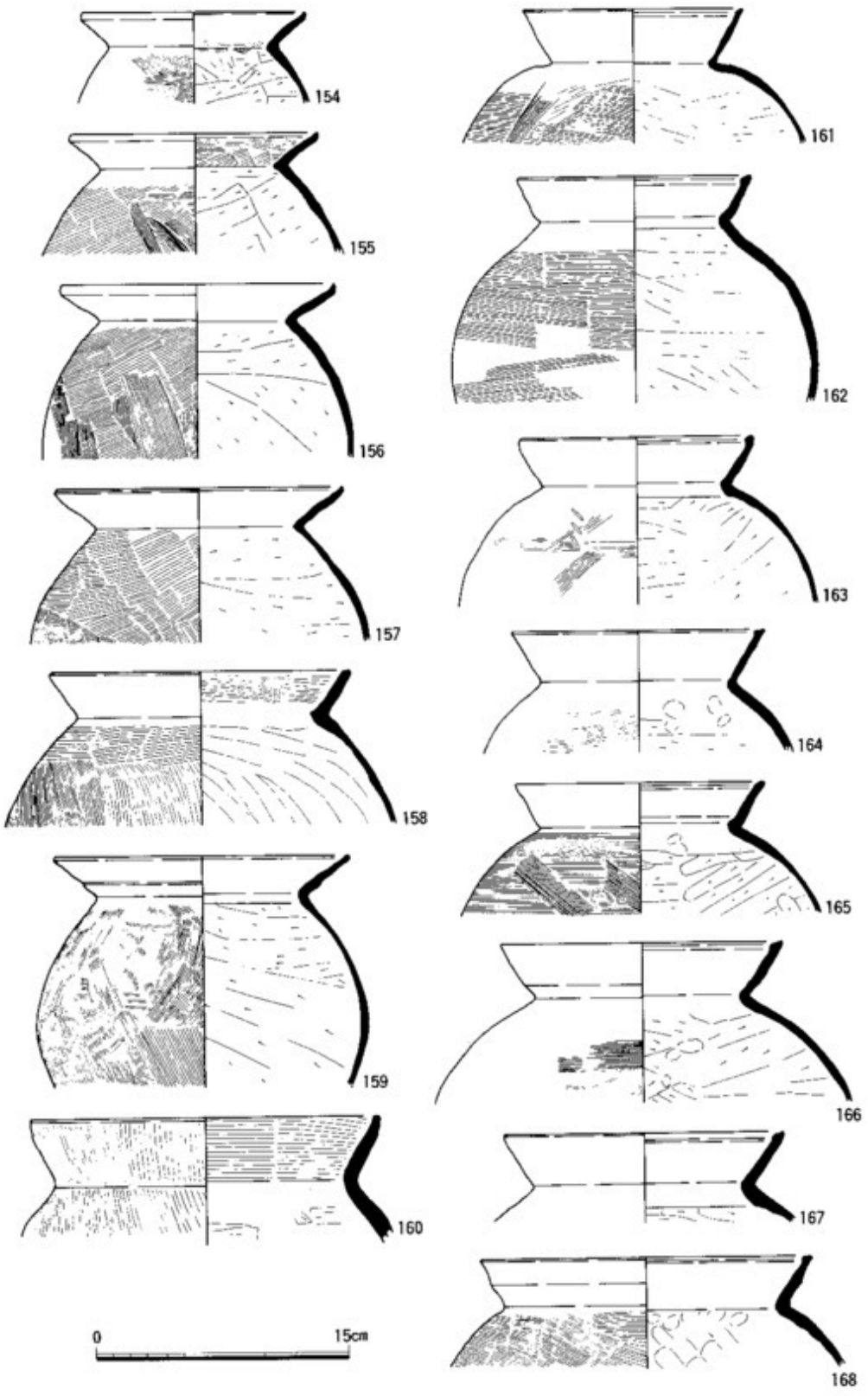

102
103
104
105
106
112
114
107
113
115
108
109
118
121
110
111
119
122
116
120
123
117
0
15cm

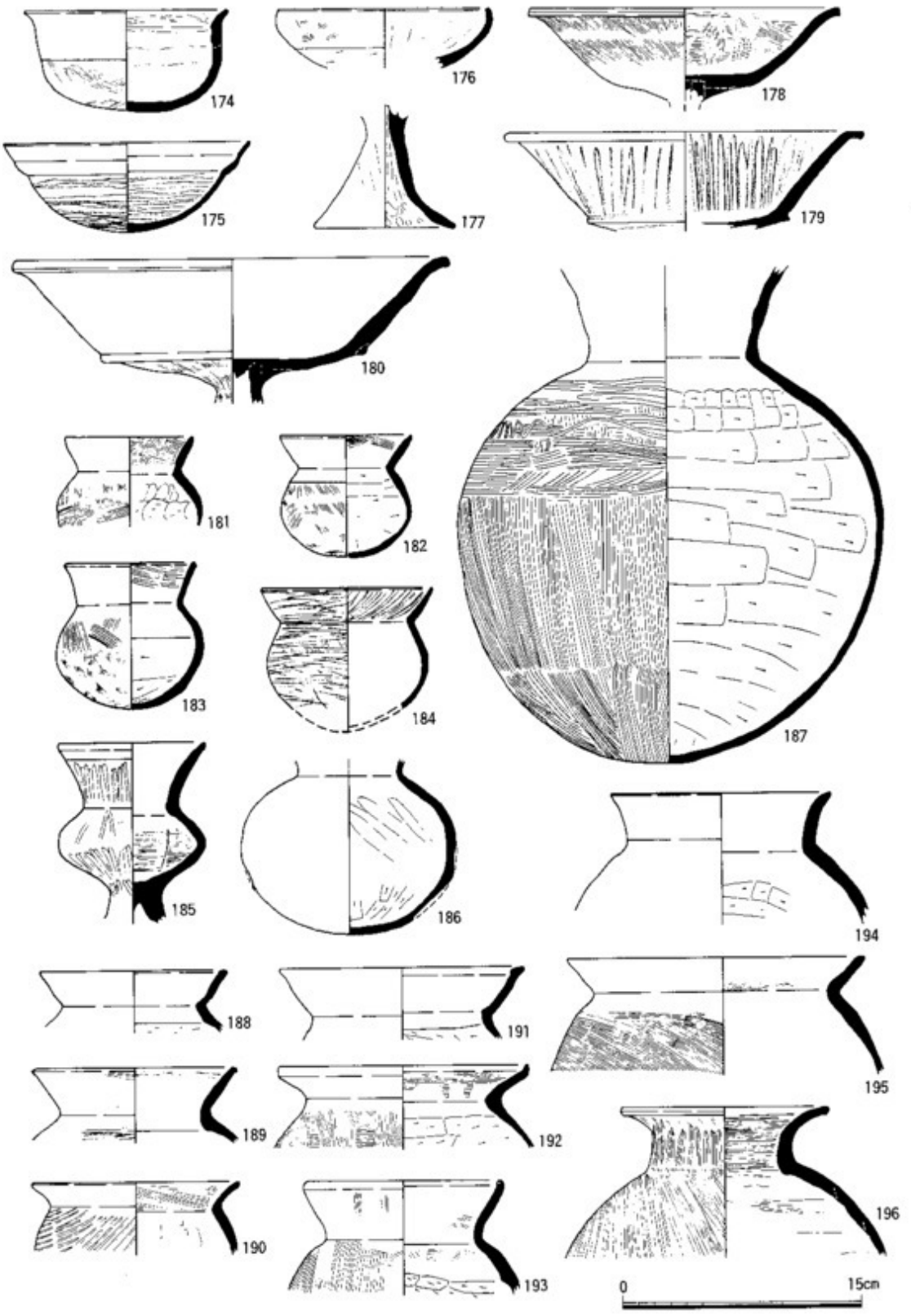
図版十四　大溝二出土土師器その二

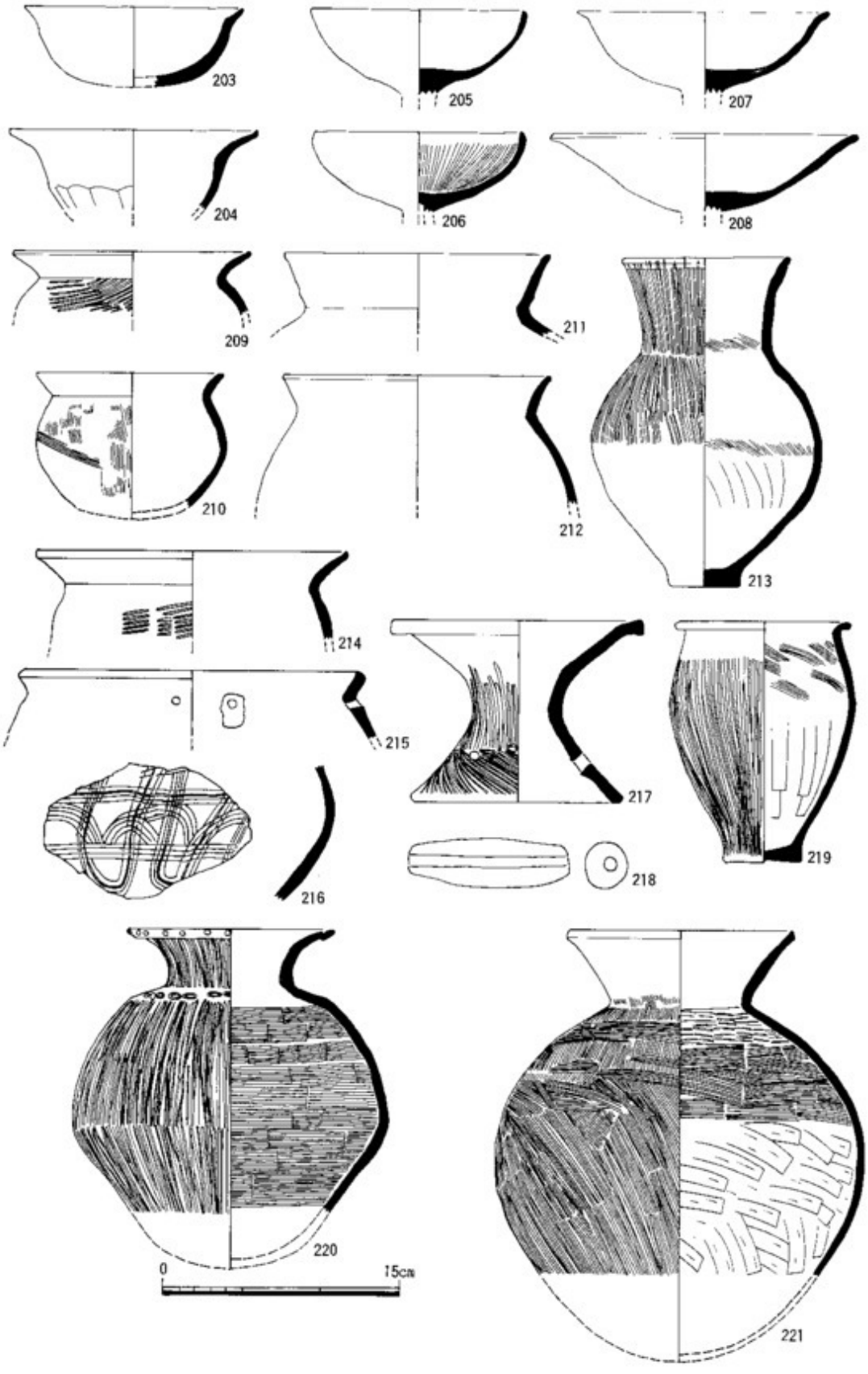


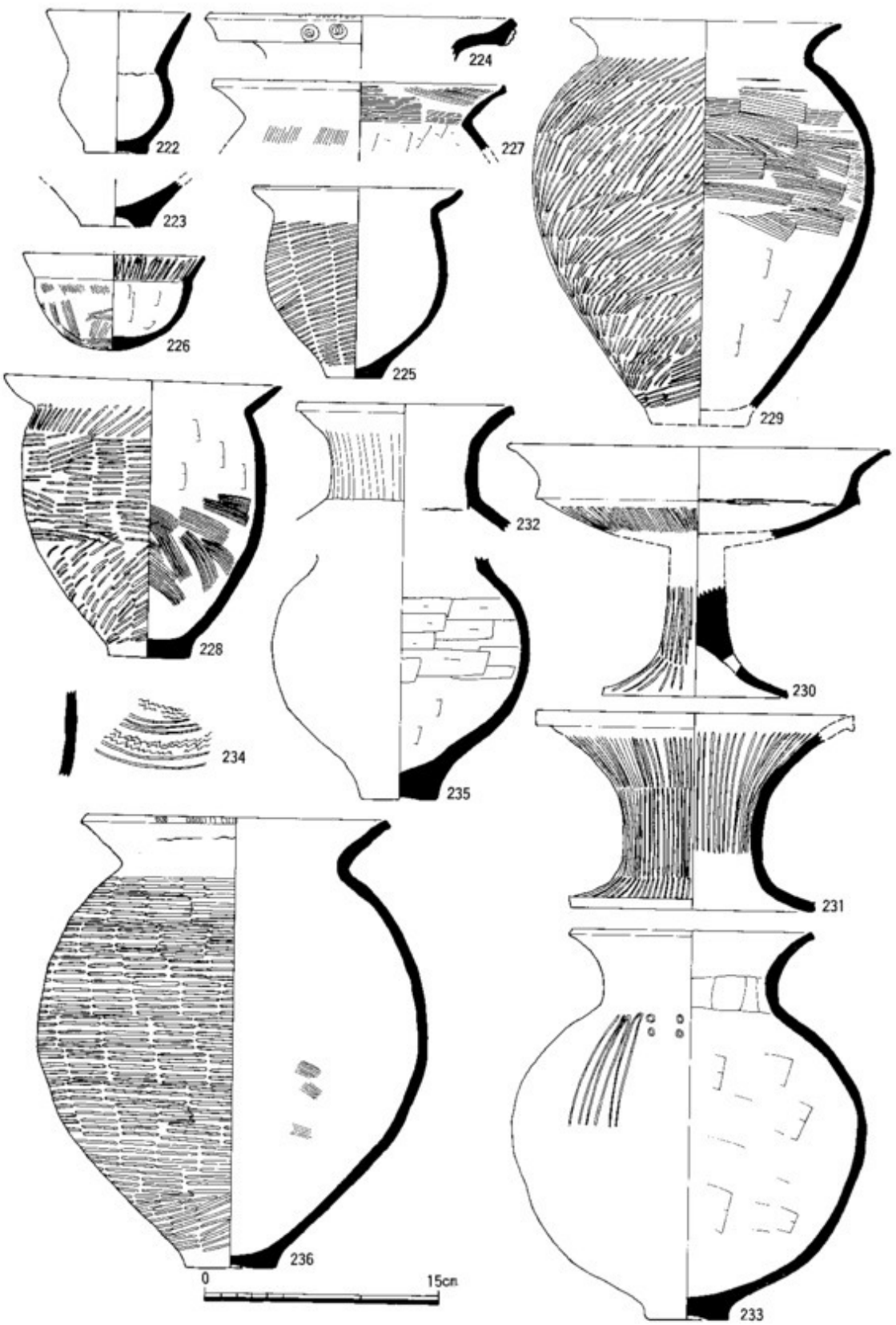

142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
0
15cm

図版十六　大溝二出土土師器その四

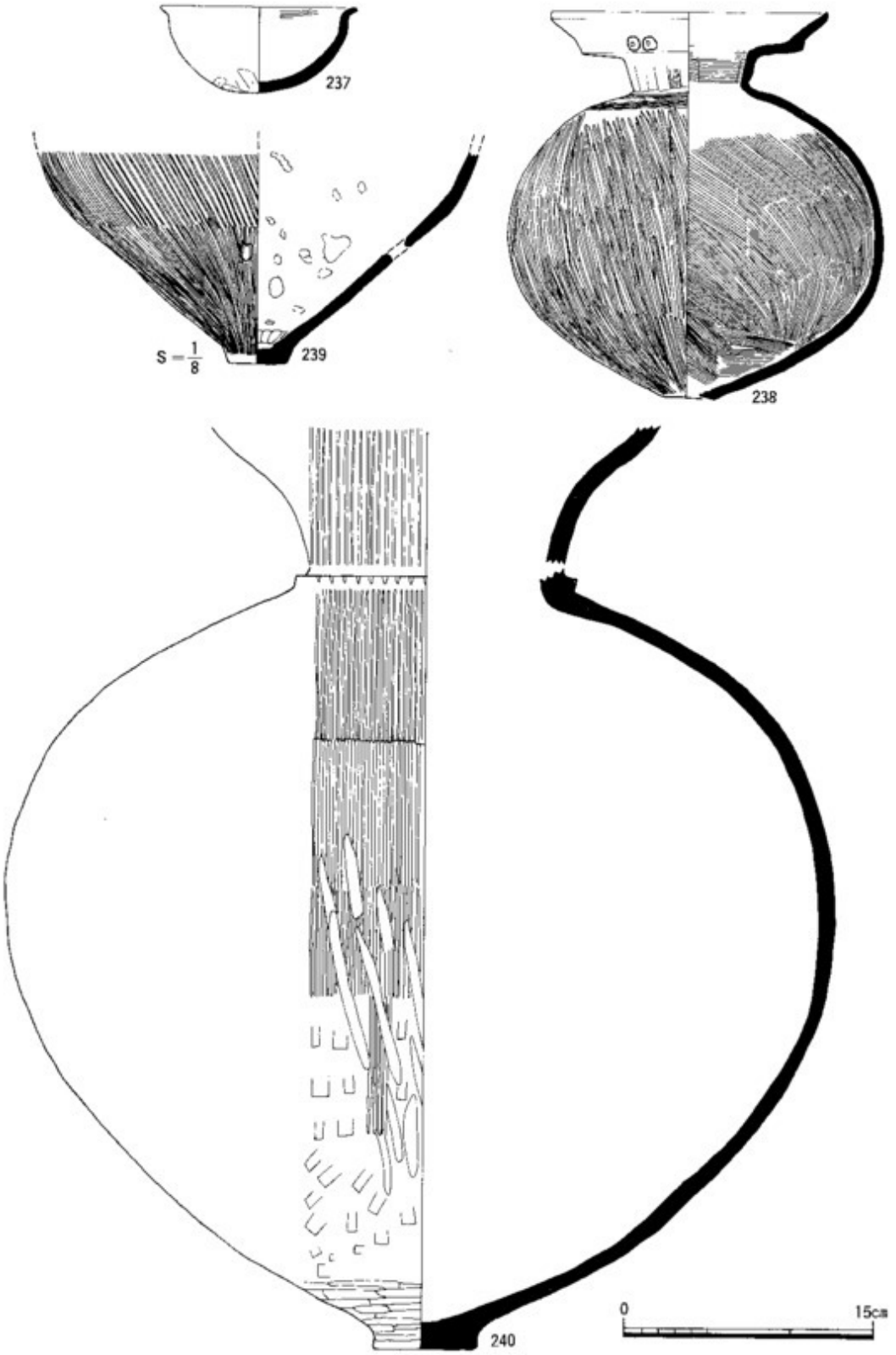


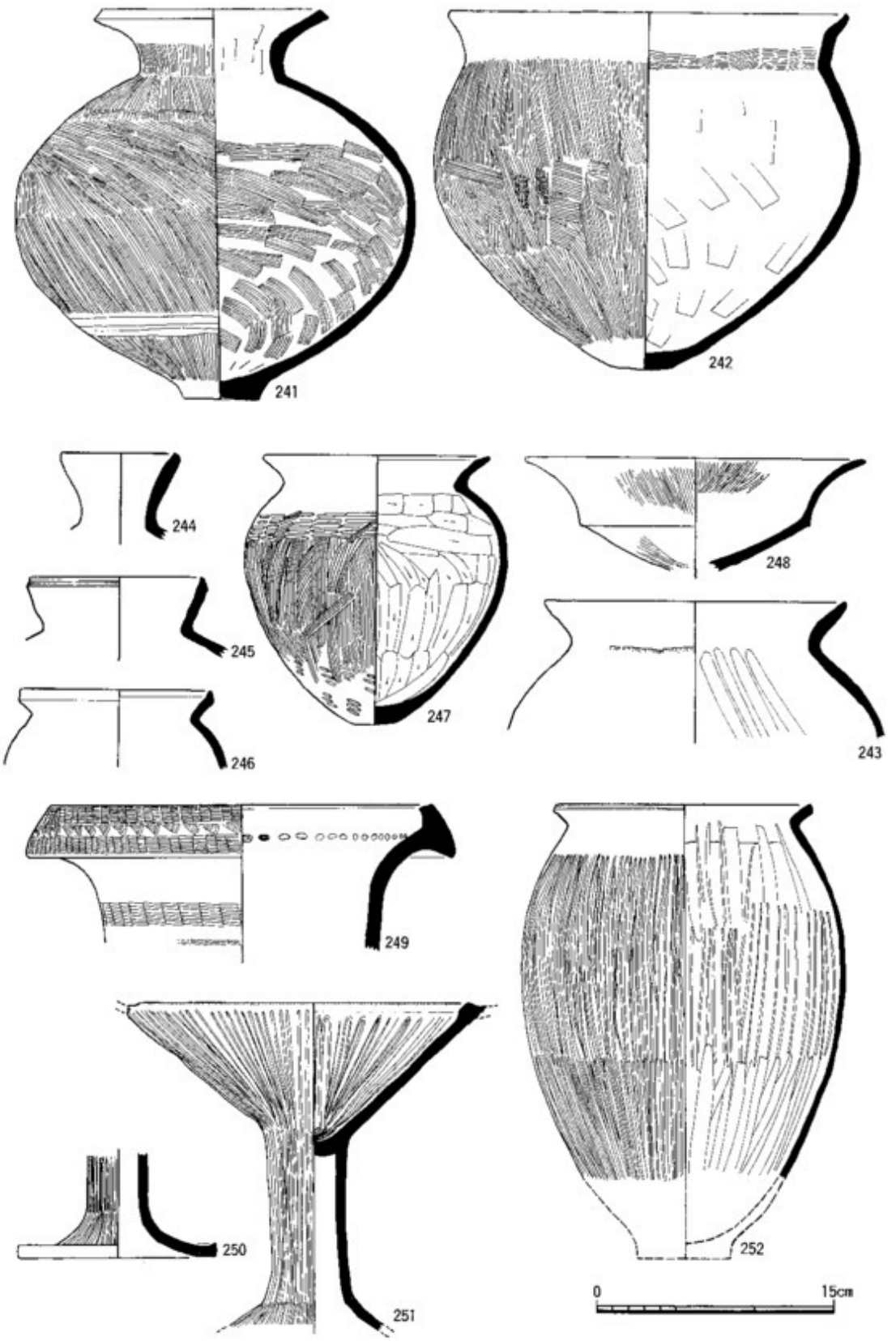

174
176
178
175
177
179
180
181
182
183
184
187
185
186
194
188
191
195
189
192
196
190
193
0
15cm


203
205
207
204
206
208
209
211
210
212
213
214
215
217
219
216
218
220
0
15cm
221

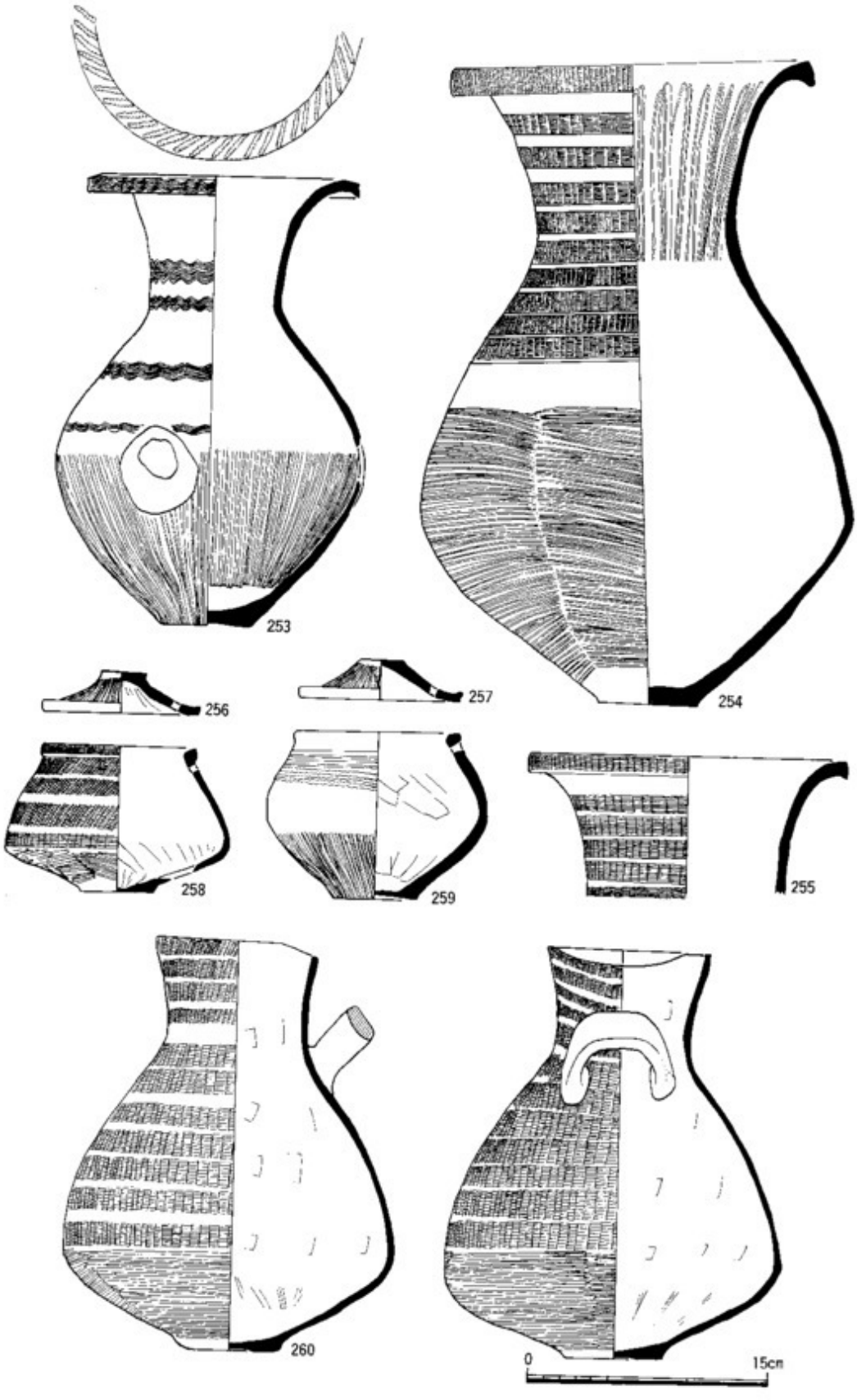

222
224
227
223
226
225
229
228
232
230
234
235
231
236
233
0
15cm

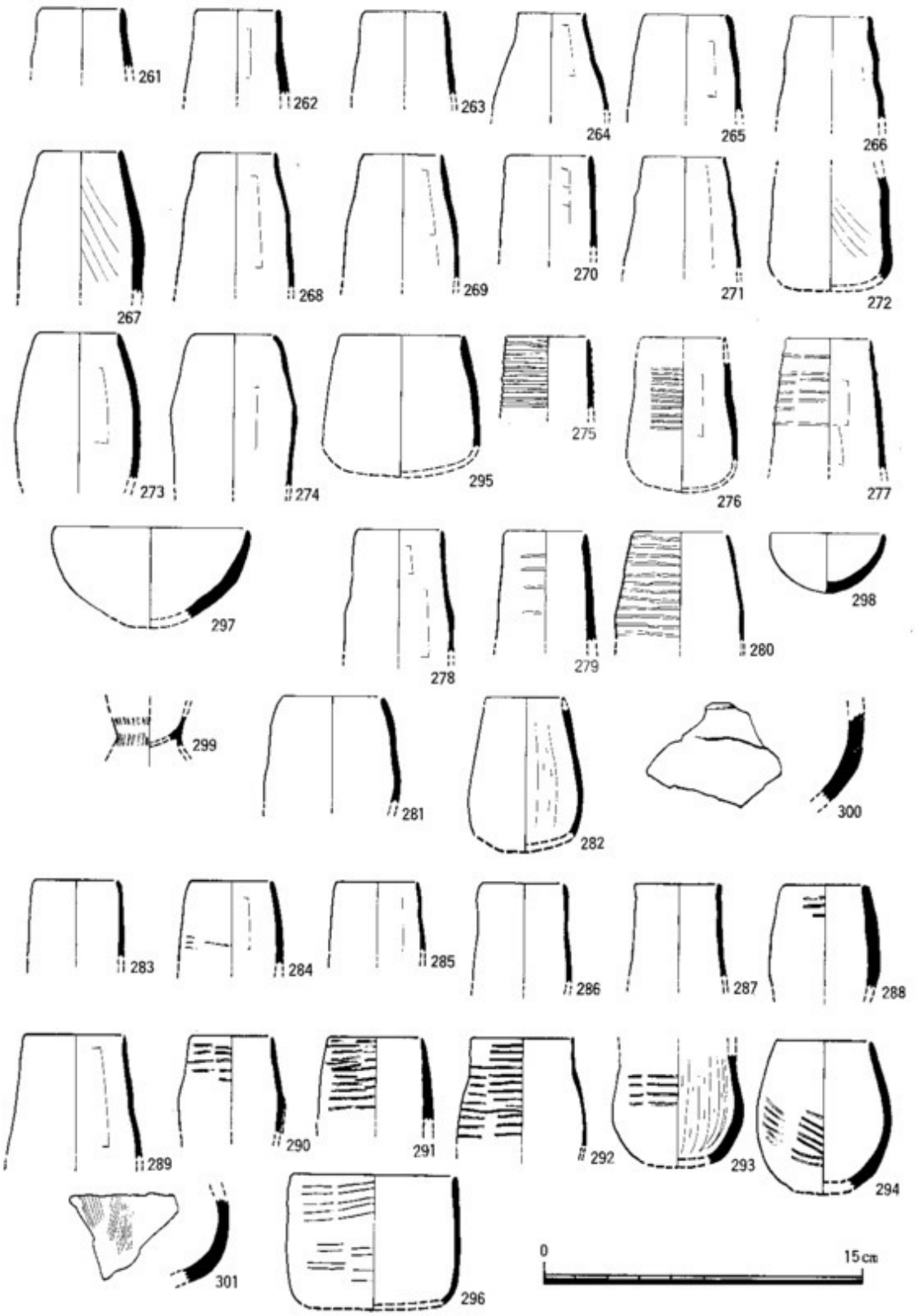
図版二十　方形周溝墓一出土土器



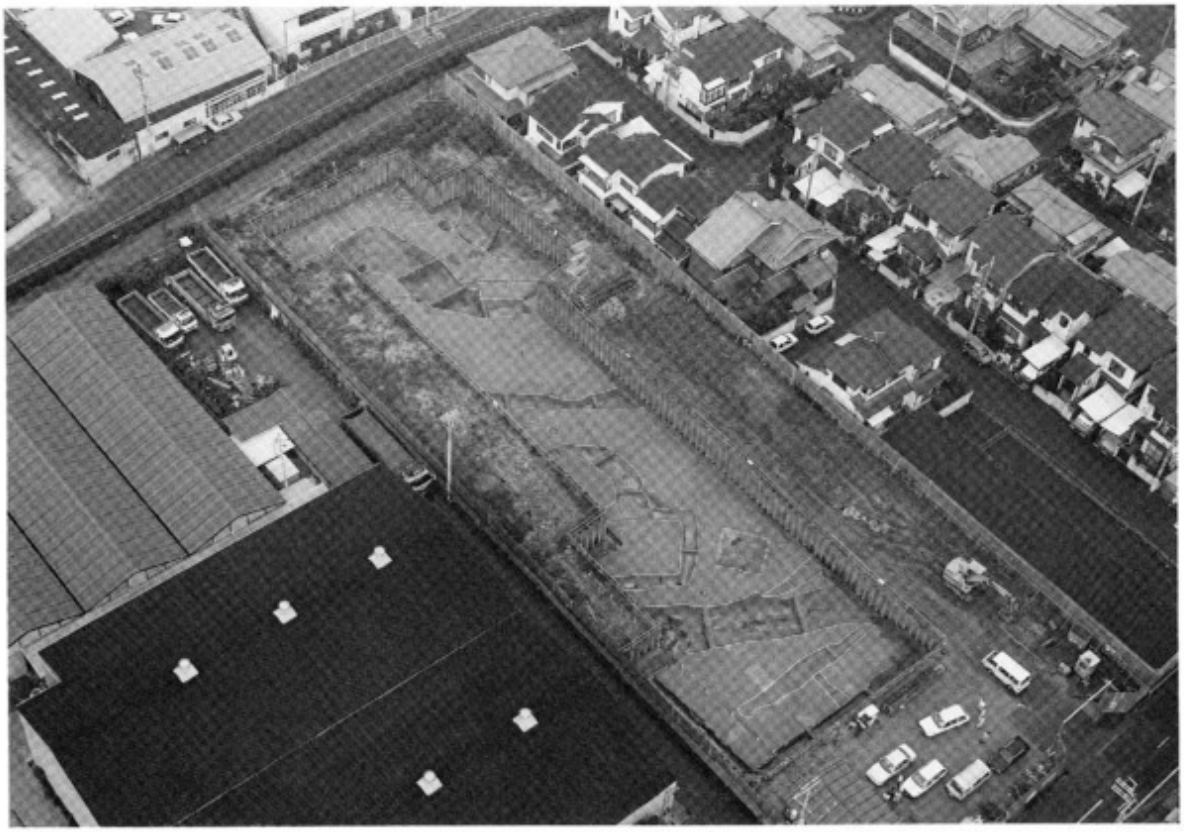

241
242
244
245
246
247
248
243
249
250
251
252
0
15cm

図版二十二　土抗三出土土器

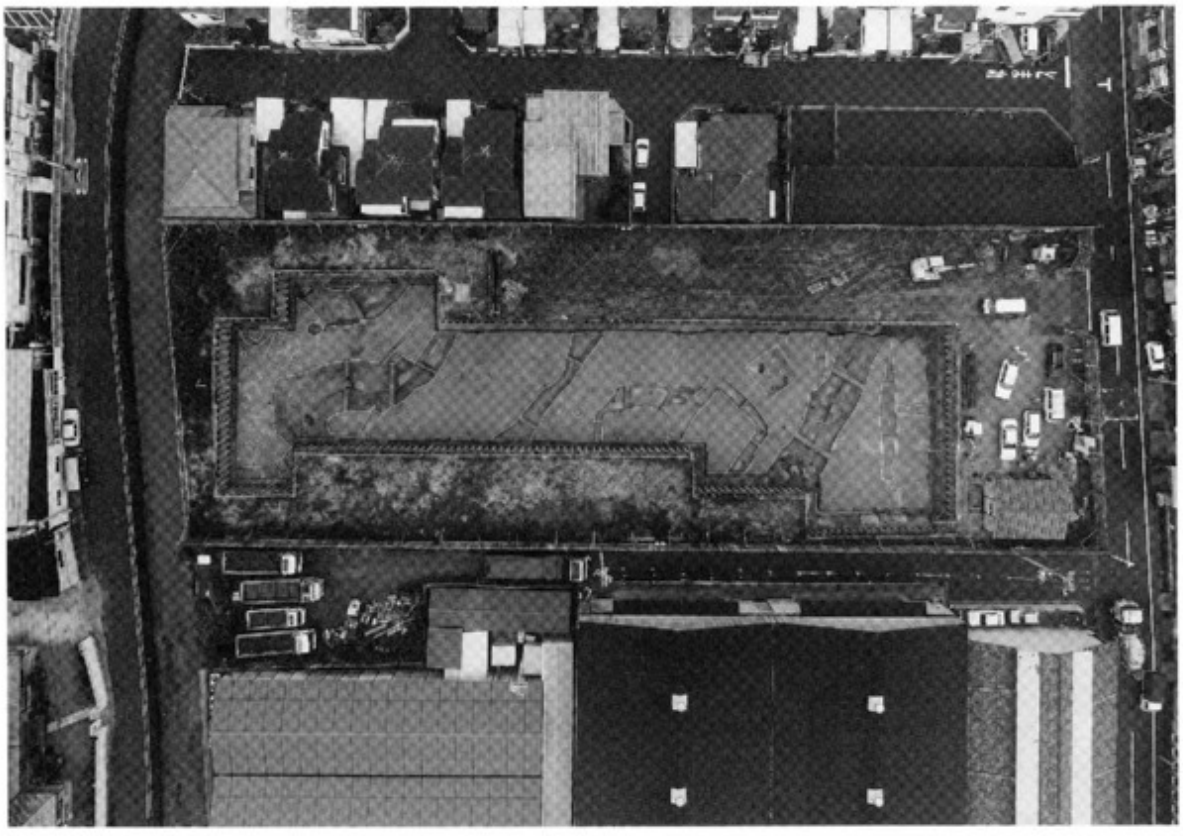



261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
295
275
276
277
297
278
279
280
298
299
281
282
300
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
301
296
0
15cm

図版二十四　航空写真

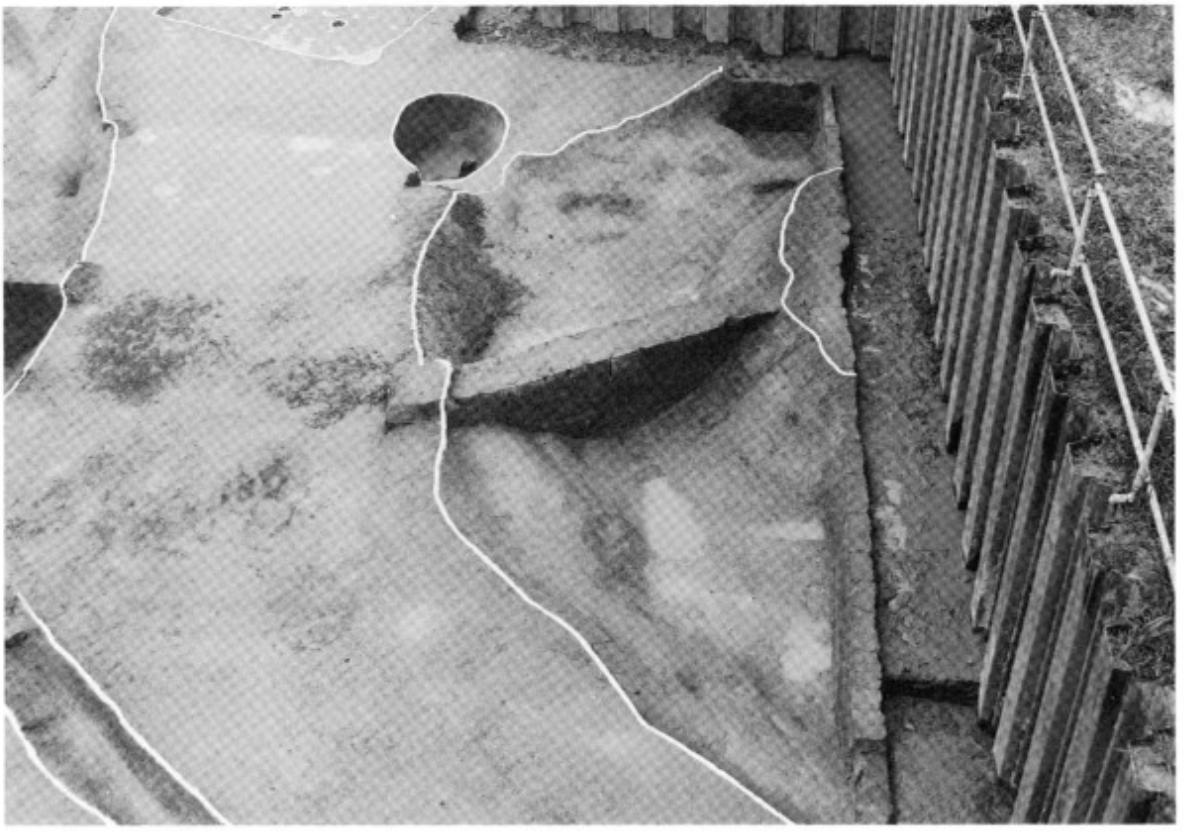


航空写真



航空写真

図版二十五　大溝一・二全景

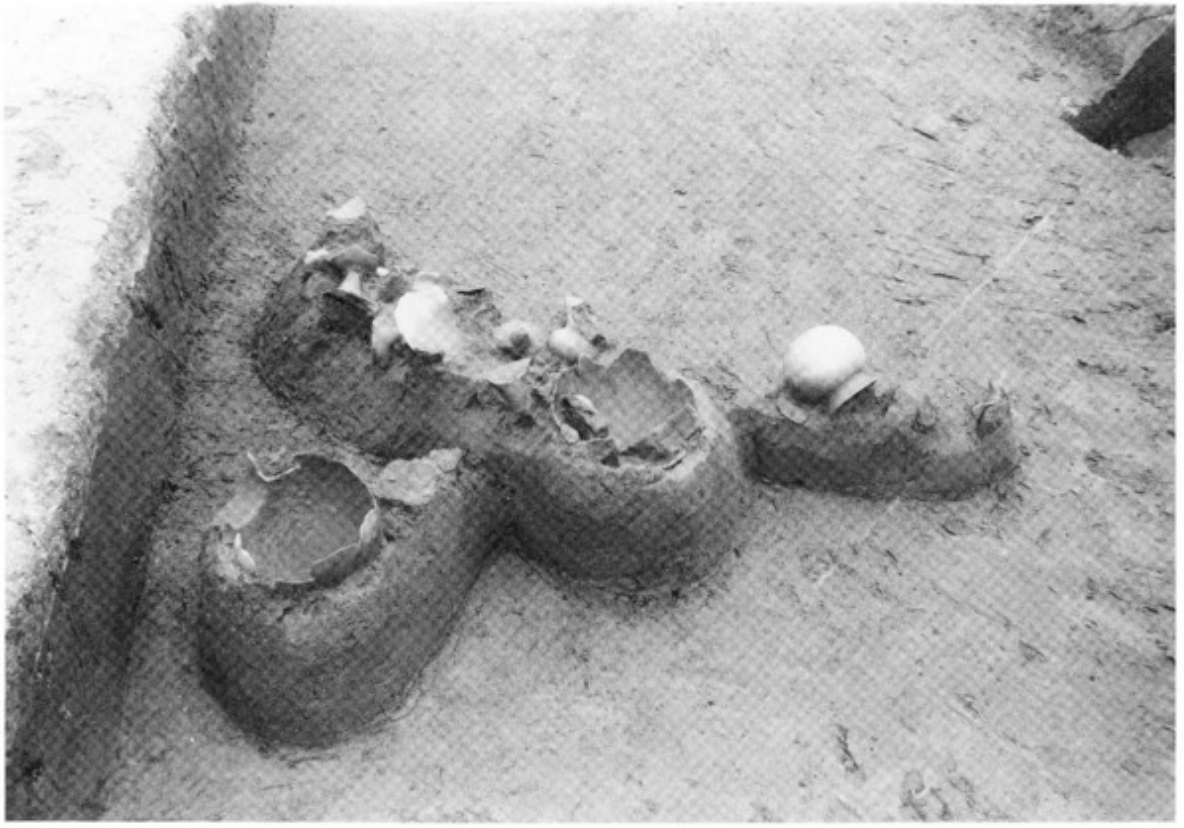


大溝1全景

大溝2全景

図版二十六　大溝二遺物出土状況

大溝２遺物出土状況



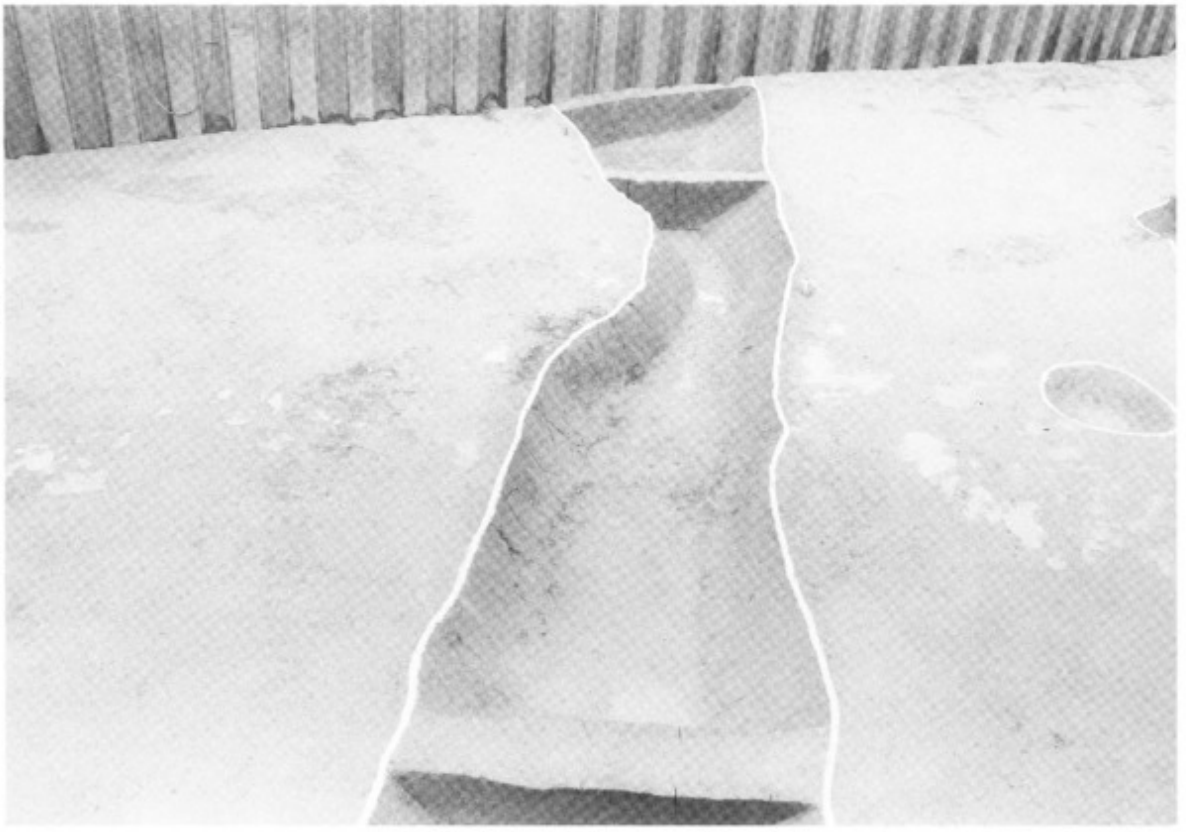
大溝２遺物出土状況

図版二十七　調査区北側（上・遺構検出状況　下・遺構全景）

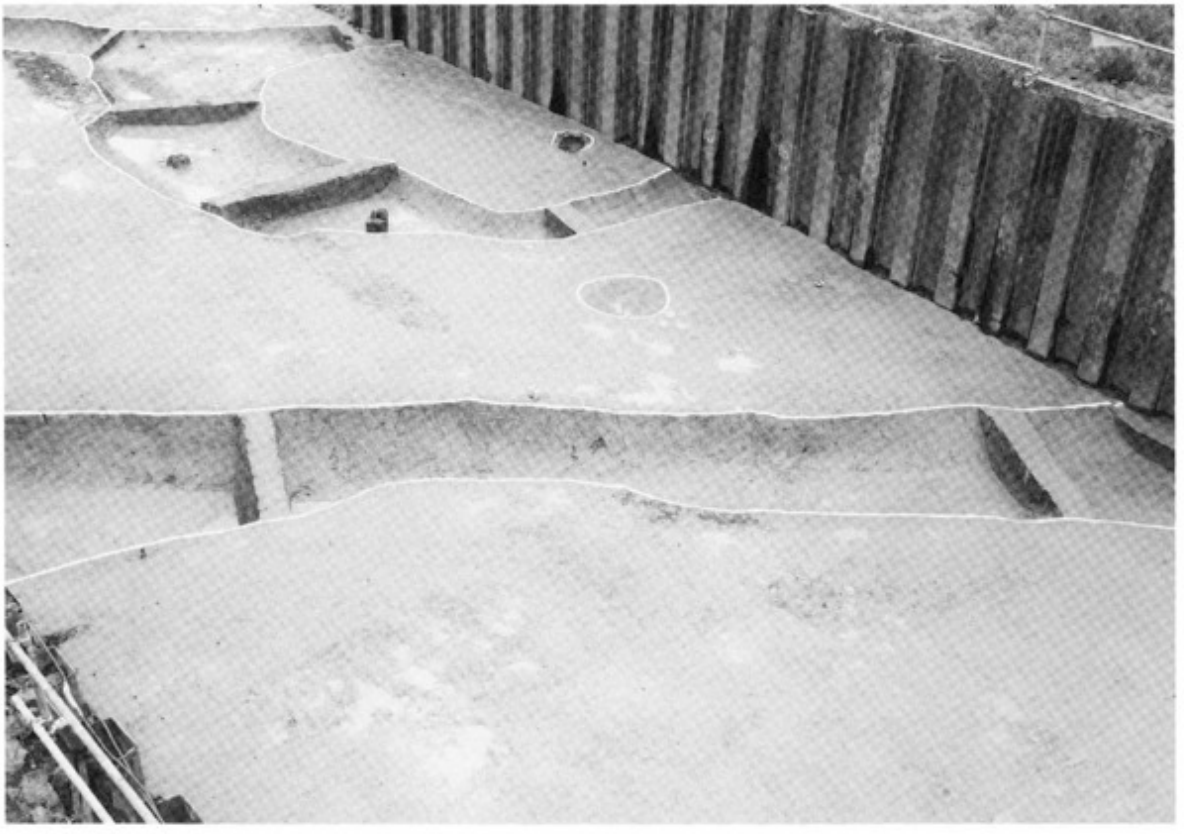
遺構検出状況

調査区北側遺構全景

図版二十八　大溝三（上・東から　下・北から）

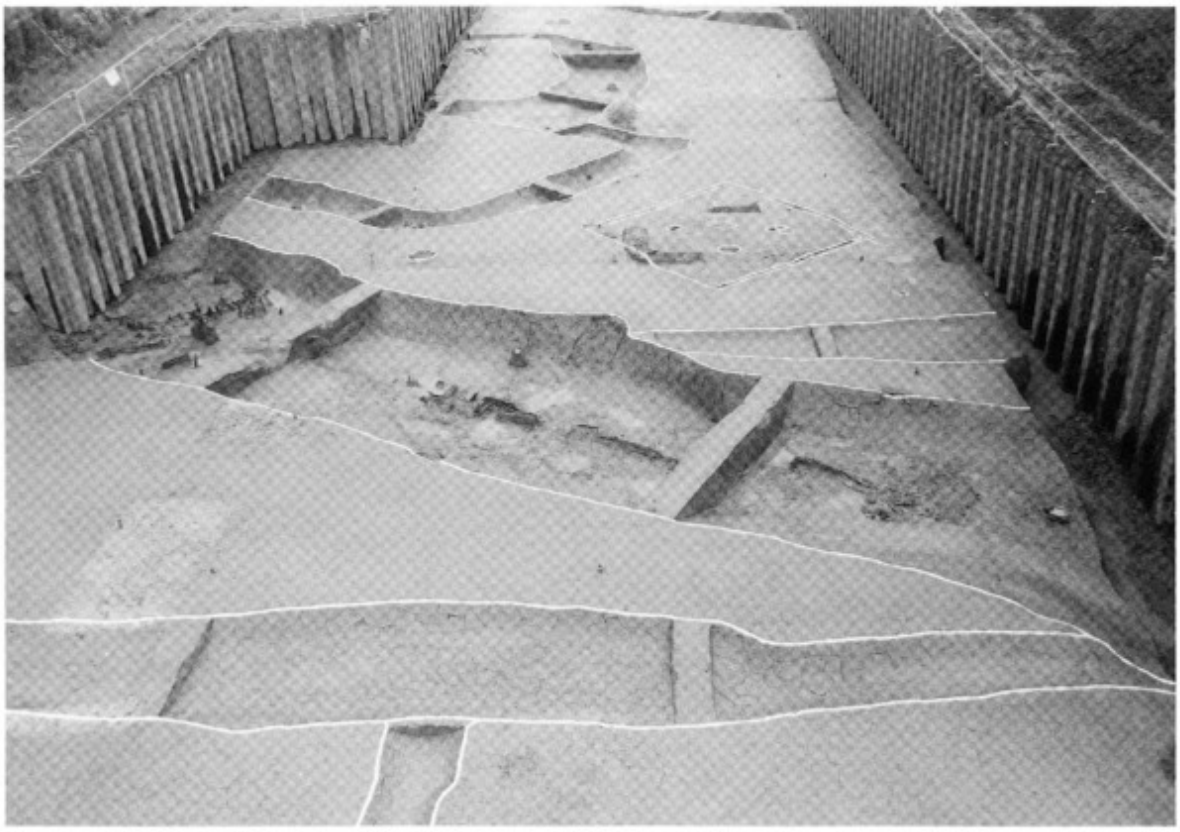


大溝３（東から）



大溝３（北から）

図版二十九　大溝四（上・全景　下・堰）



大溝4全景

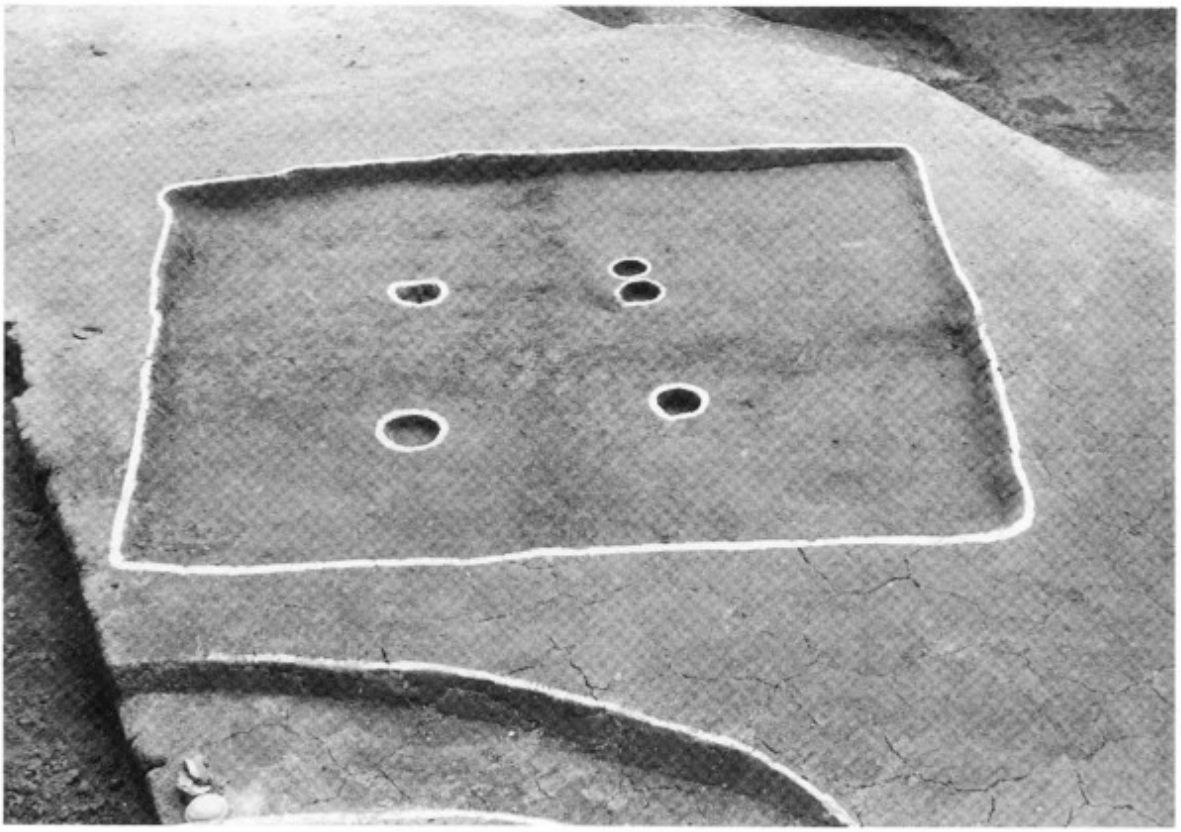
大溝4堰

図版三十　大溝四（上・木器出土状況　下・土器出土状況）

大溝 4 木器出土状況

大溝 4 土器出土状況

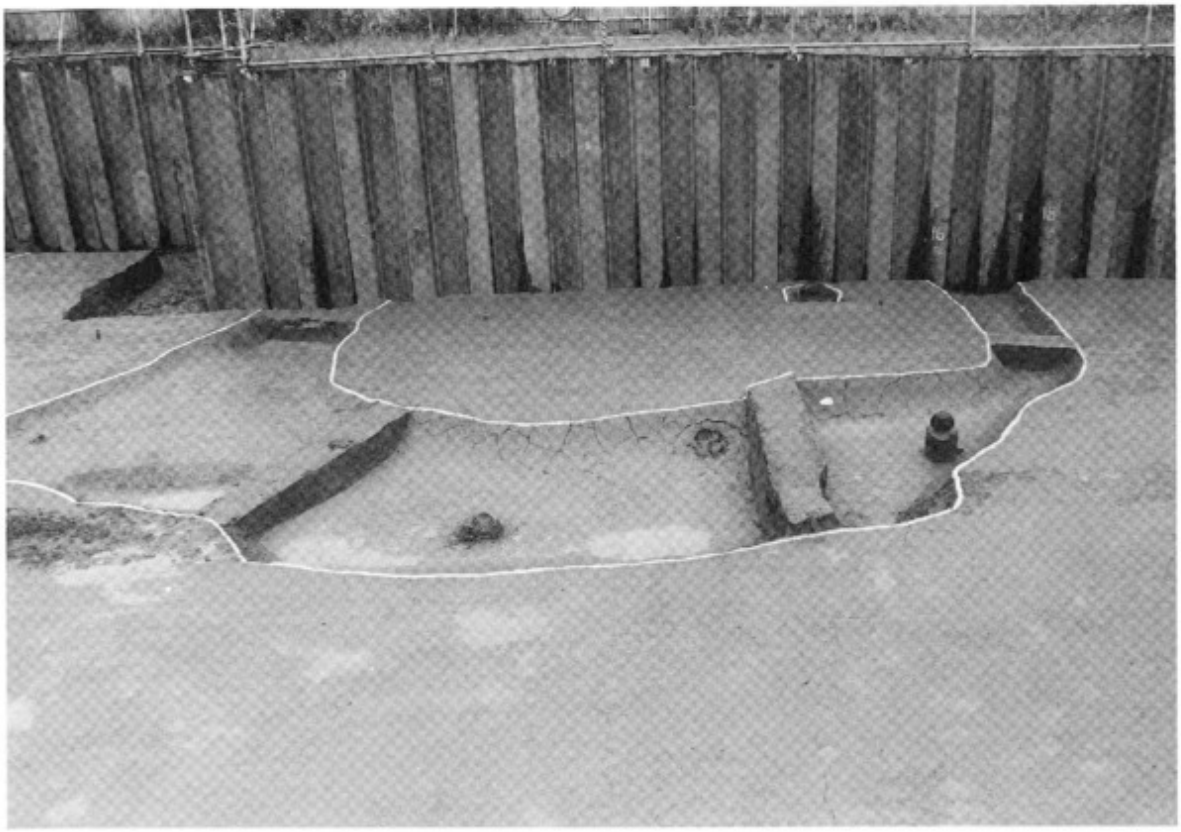
図版三十一　住居1・4



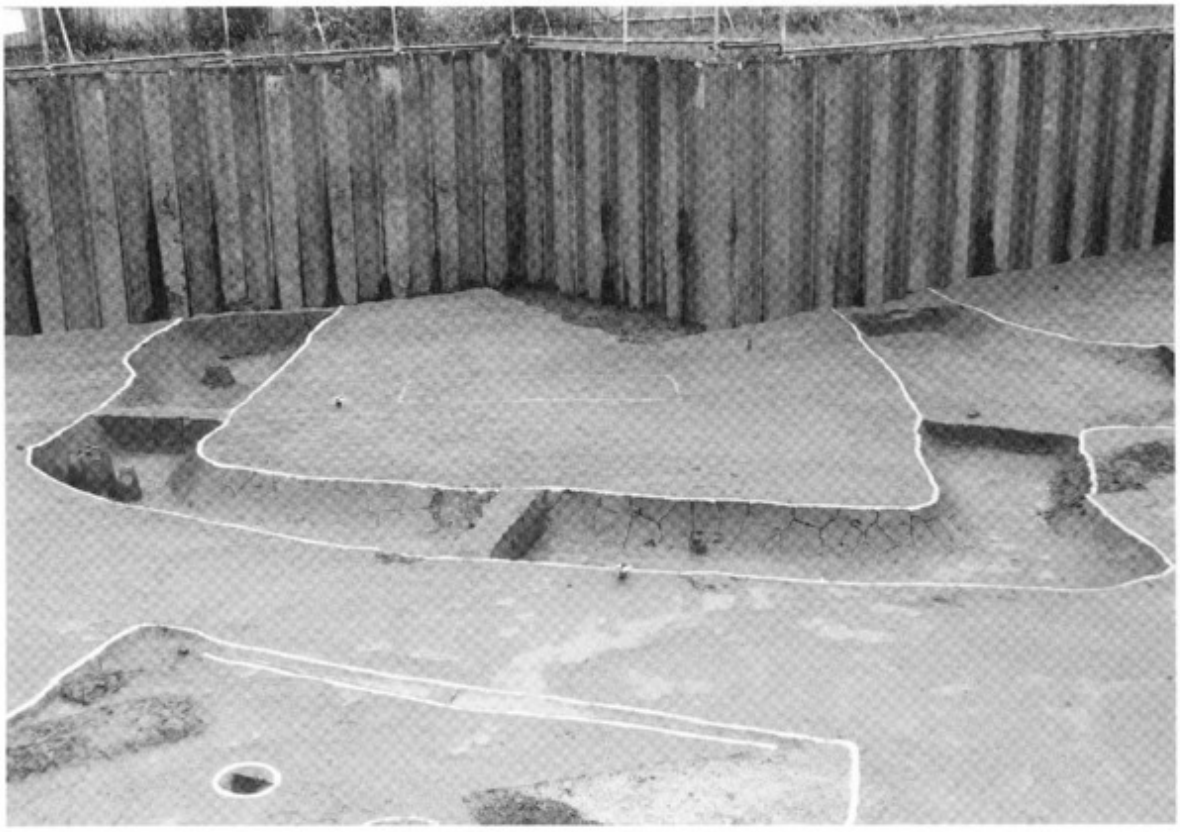
住居1

住居4

図版三十二　方形周溝墓1・2



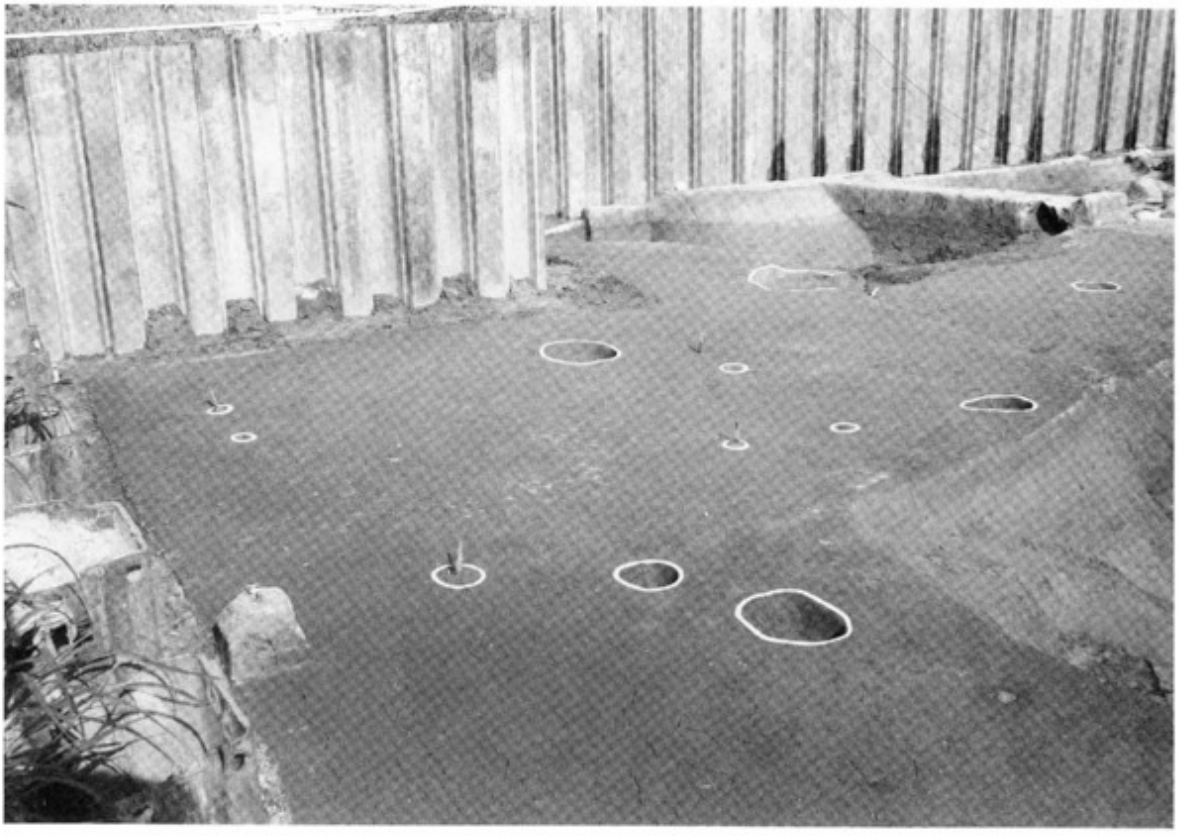
方形周溝墓1



方形周溝墓2

図版三十三　調査区北側（上・上層遺構　下・下層遺構）

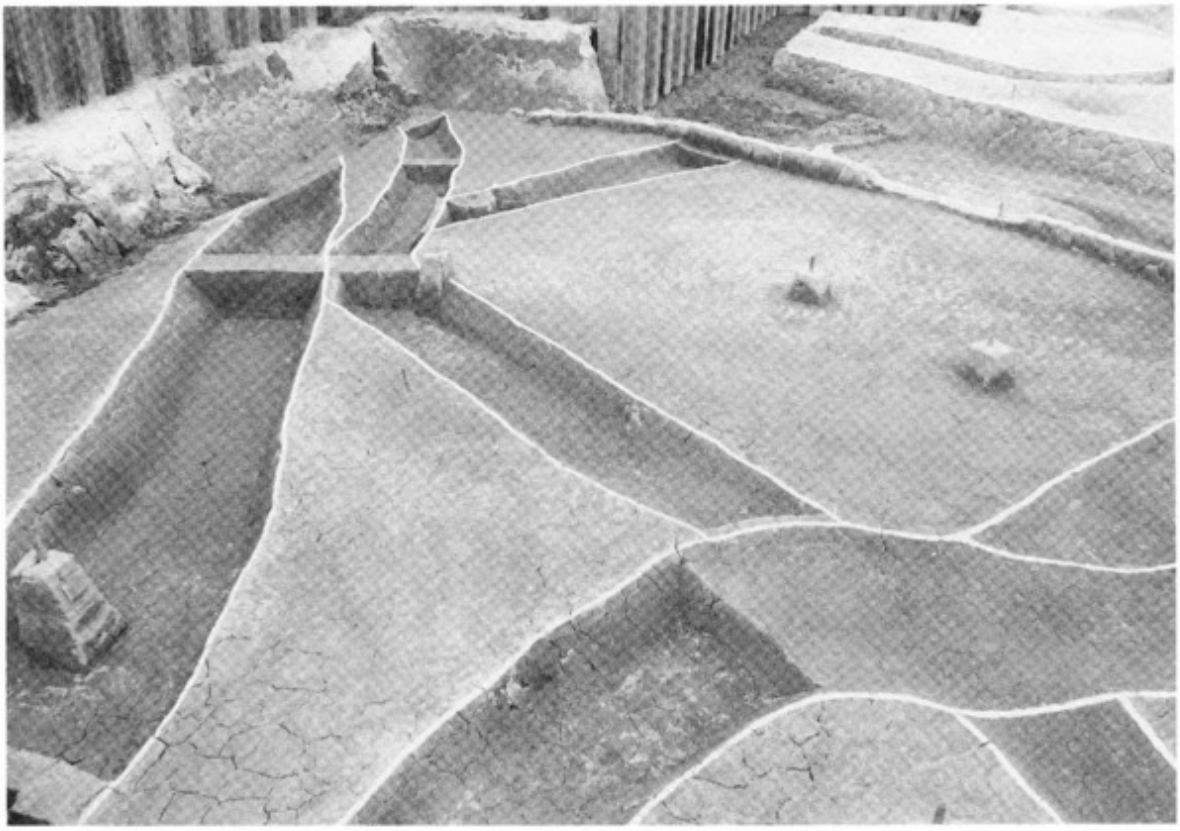
上層遺構



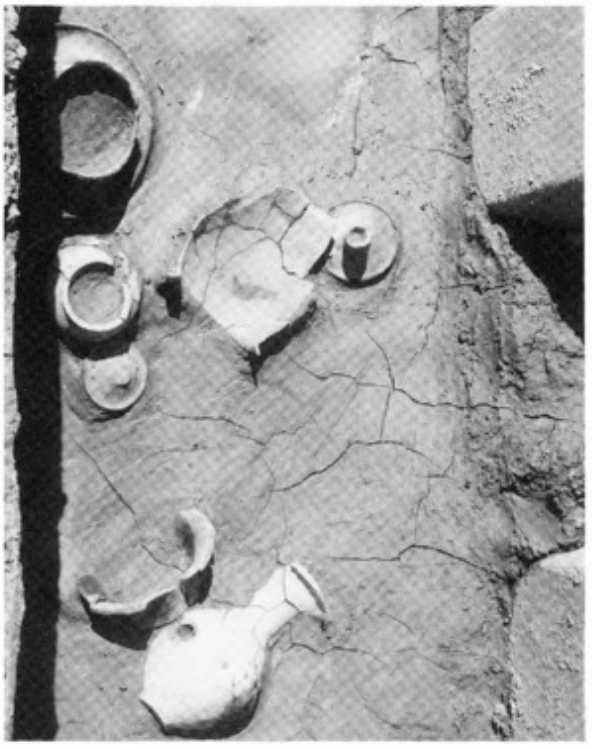
下層遺構

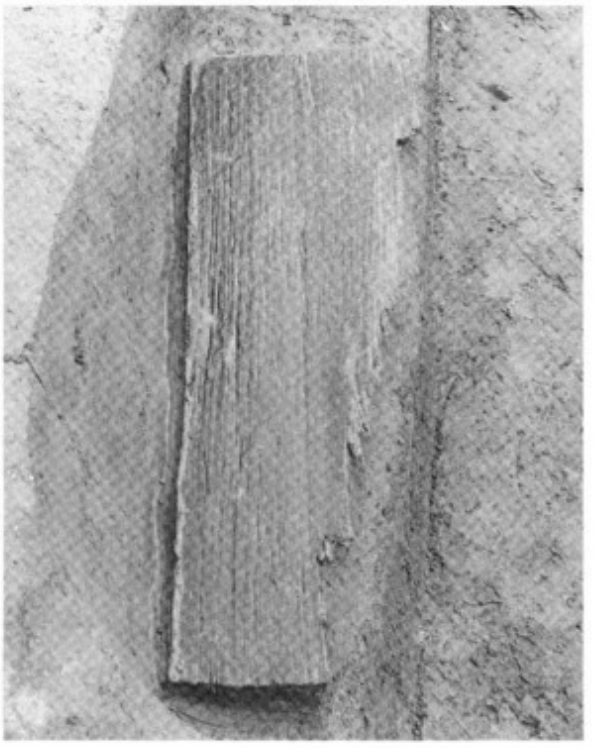
図版三十四　小銅鐸出土状況・南側下層遺構

小銅鐸出土状況

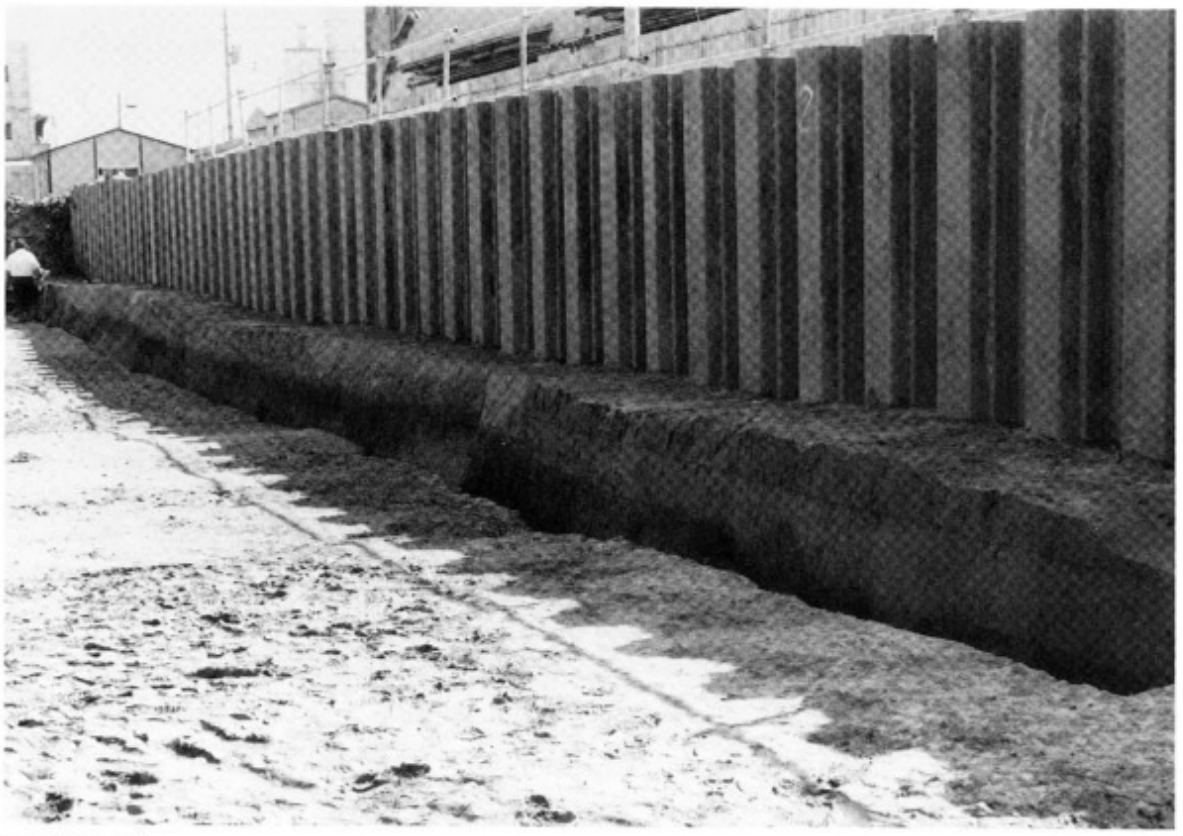


南側下層遺構





図版三十六　土層断面（上・西側　下・南側）

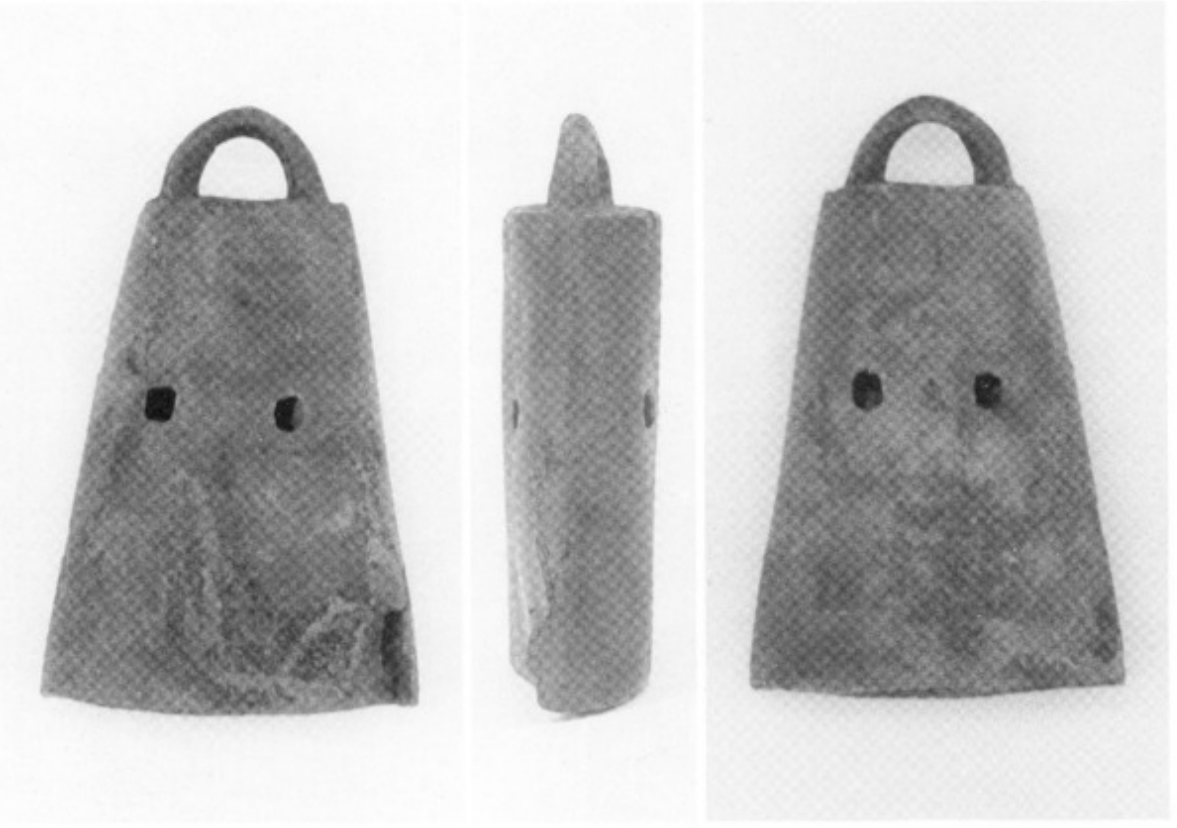


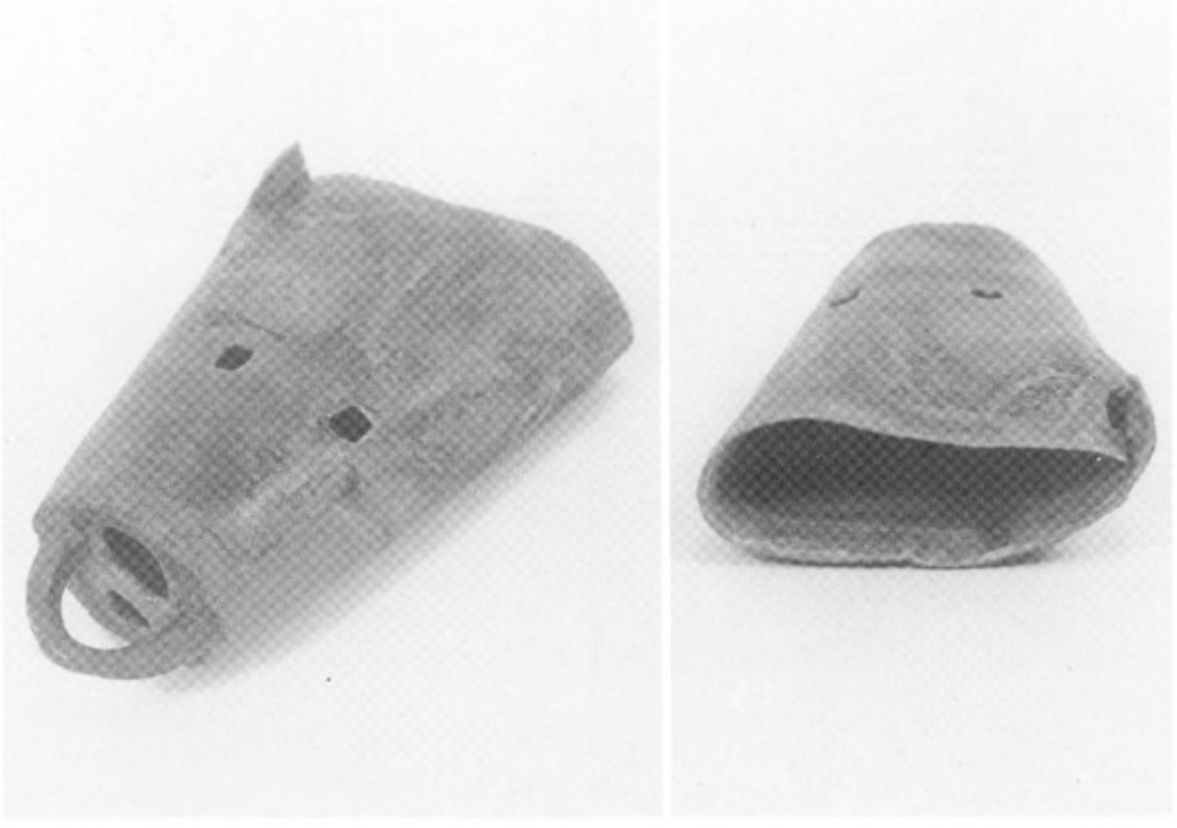
西側土層断面

南側土層断面

現地説明会

図版三十八　小銅鐸





図版三十九　大溝一出土遺物（須恵器）

大溝１出土遺物

図版四十　大溝一出土遺物（土師器）

大溝１出土遺物

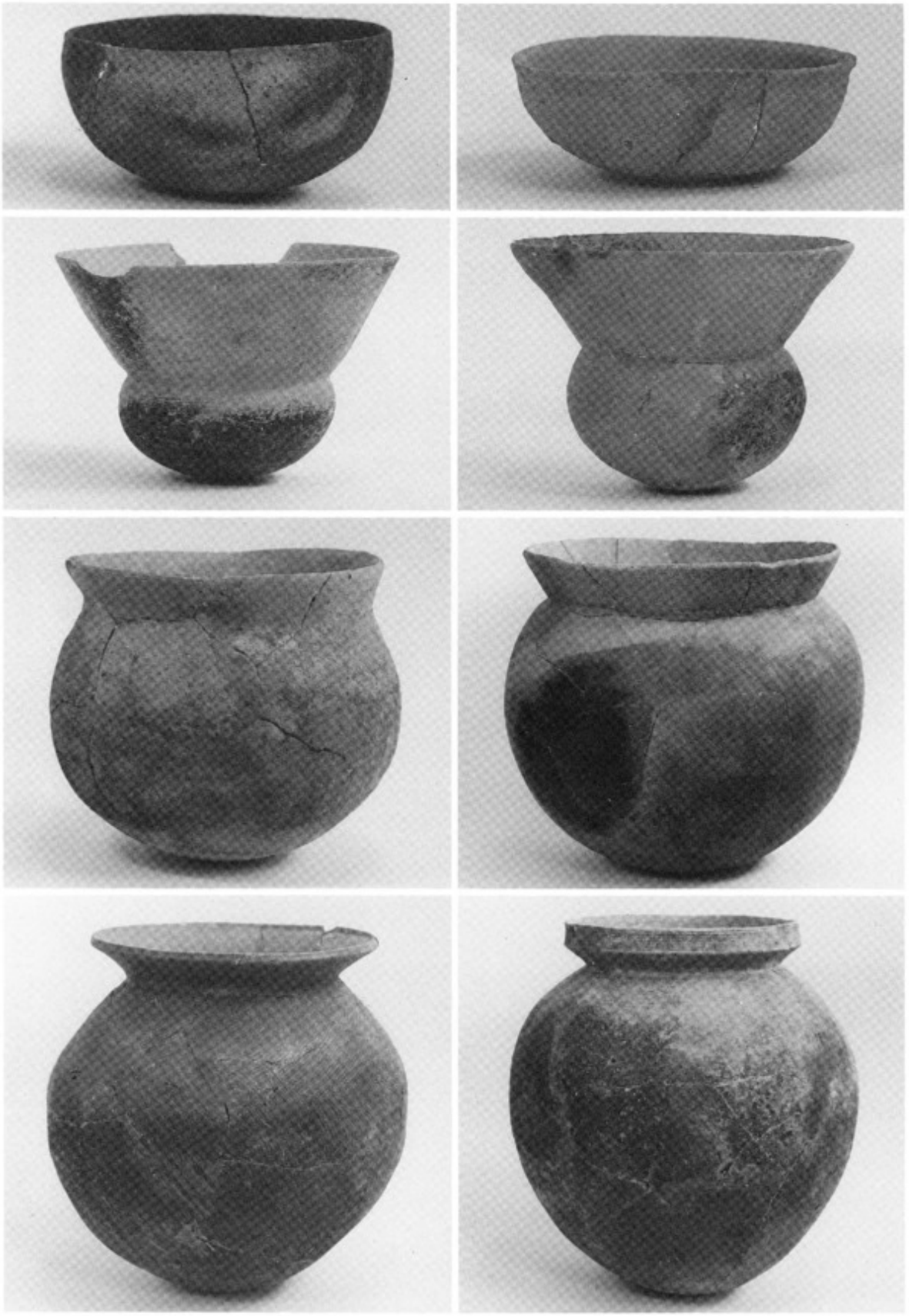
大溝２出土遺物

大溝２出土遺物

図版四十二　大溝二出土遺物（土師器）

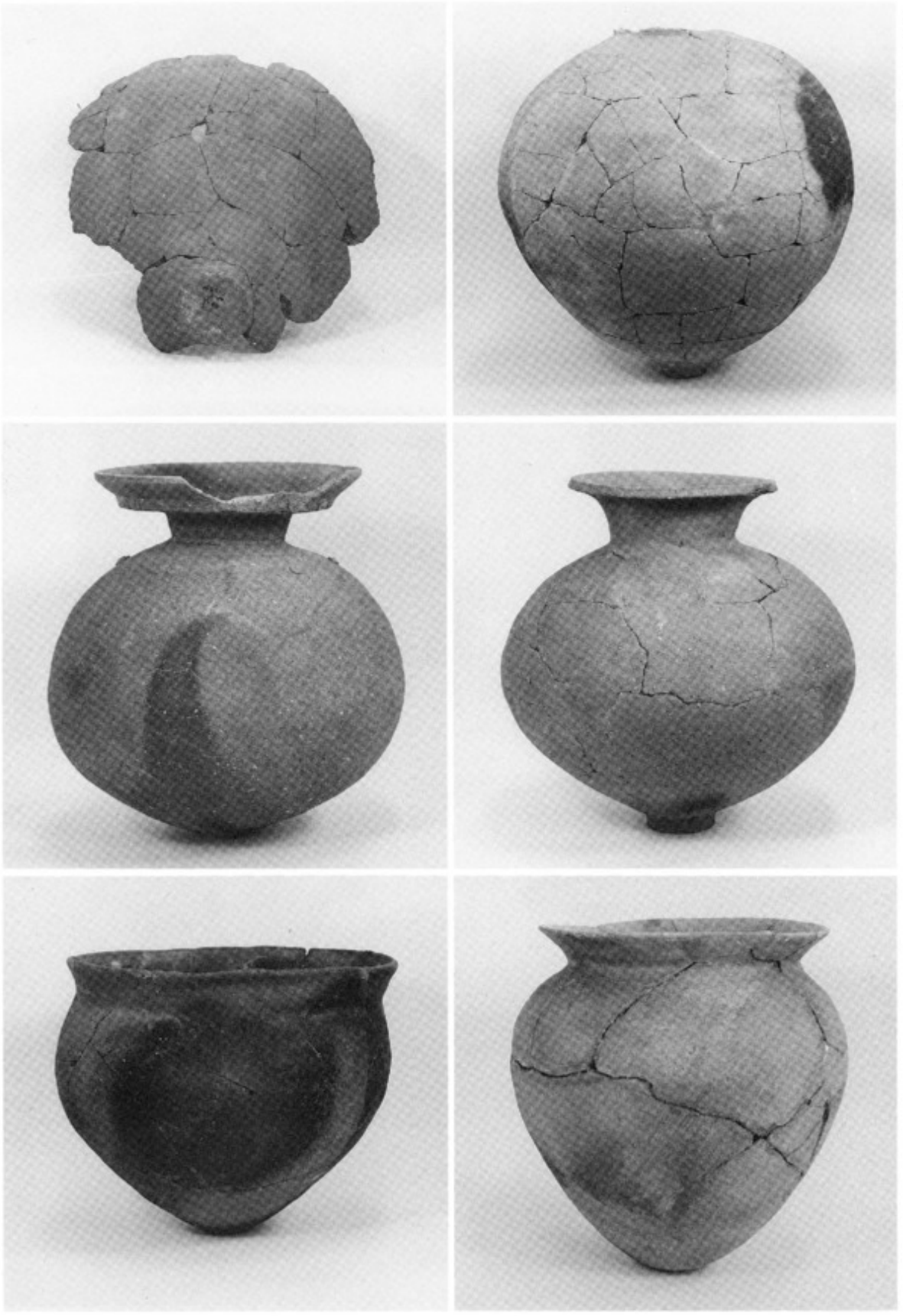
大溝２出土遺物

図版四十四　大溝二出土遺物（土師器）



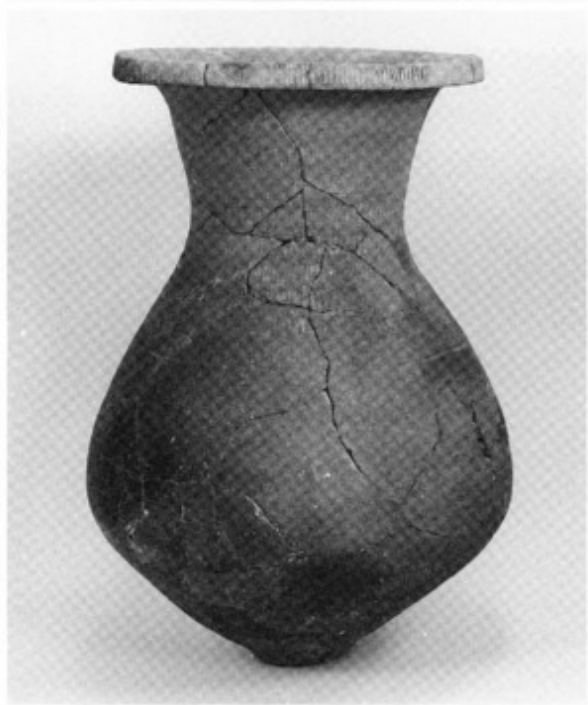
大溝２出土遺物

大溝４出土遺物



方形周溝墓出土遺物

図版四十八　弥生土器



柏原市文化財概報　１９９２－Ⅲ

本　郷　遺　跡

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町１番43号
電話 0729-72-1501　内線5133
発行年月日　平成５年３月３１日
印　　刷　近畿印刷センター